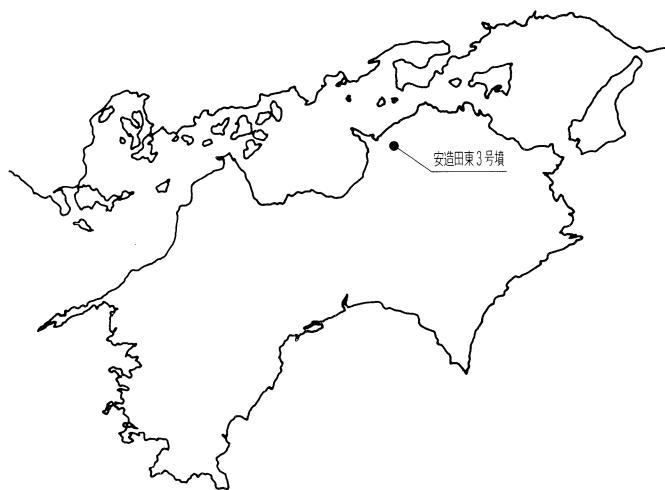


安造田東3号墳発掘調査報告書

1991年7月

満濃町文化財保護協会

安造田東3号墳発掘調査報告書



1991年7月

満濃町文化財保護協会

刊行にあたって

この報告書は、満濃町教育委員会が平成2年7月9日から平成2年9月15日まで実施した安造田(あそだ)東3号墳の発掘調査の記録であります。

町域には、約50基の古墳が確認されておりますが、今回発掘調査が実施された安造田東3号墳は、中津山西麓部で6基の存在が確認されている安造田古墳群の中の一つです。

今回のような本格的な発掘調査は本町においては初めてのことでしたが、香川県教育委員会事務局文化行政課ならびに、善通寺市教育委員会事務局文化振興室のご指導とご援助を得て、古代遺跡へ科学の手がさしのべられることになりました。

調査の結果、これまで国内はもとより東アジアでもあまり確認されたことの無いモザイクガラス玉・トンボ玉・県下で6例目の銀象嵌入りの鐔・馬具・須恵器など、多数の貴重な文化財が発見されました。

また、古墳の盛土が当時の高度な土木技術が駆使された版築工法により構築されたものであることも確認されました。

被葬者は誰だろうか。なぜこの地に古墳を築いたのだろうか。特殊な副葬品はどのような経路でこの地に……と古代への探訪が広がります。同時に、先人の残された貴重な文化遺産を保存し後世に継承することを考えますと、将来への夢も広がってまいります。

今回の調査を契機に、本町における埋蔵文化財に関する理解と関心が深まり、今後の学術研究の一助となり、文化の向上につながる事を願うとともに、本町文化行政に役立ててまいりたいと存じます。

最後に今回の調査にあたり、土地所有者・地元調査協力者をはじめ、ご指導・ご援助ならびにご協力いただきました関係者の皆さま方に、心から感謝の意を表しますとともに、厚くお礼申し上げます。

平成3年3月30日

満濃町教育委員会

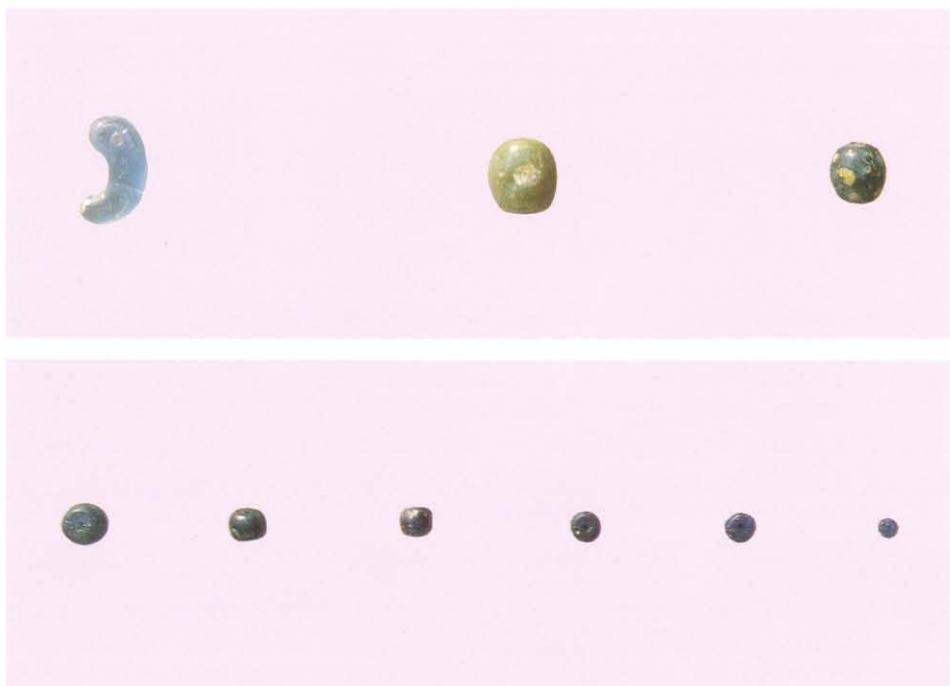
教育長 篠原義夫



モザイク玉 【原寸大：最大径 1.45cm】（本文中51頁参照）



羨道部の遺物出土状況（北から望む）



出土したガラス製装飾品類（勾玉・トンボ玉・トンボ玉
臼玉・臼玉・臼玉・臼玉・臼玉・小玉）

例　　言

1. 本書は香川県仲多度郡満濃町大字羽間2962-6, 7番地に所在する、安造田東3号墳の発掘調査報告書である。
2. 本墳は通称「安造田古墳」の呼称であるが、満濃町教育委員会の遺跡台帳等には「安造田東3号墳」とあり、本報告書ではこれに統一する。
3. 発掘調査は平成2年7月9日から平成2年9月15日まで行われ、引き続き平成3年2月28日まで、出土遺物等の整理作業と報告書の執筆を行った。
4. 調査は満濃町教育委員会社会教育課が香川県教育委員会文化行政課の指導のもと、善通寺市教育委員会の協力を得て実施した。組織は下記のとおりである。

総括	満濃町教育委員会	教長	篠原 義夫
	課	長	黒木 貴雄
	係	長	平田 公三
	派遣社会教育主事		大森 輝雄
調査担当	満濃町教育委員会	社会教育主事	高橋 守
	善通寺市教育委員会	文化振興室主事	笹川 龍一
調査補助	地元調査参加者	斎藤 重貴	白川 訓弘
		古川 照昌	田所 熱
		千葉 武子	多田 品江
		児島 英子	笹川 一子
	四国学院大学学生	山本 宏之	中山 豪
		国方 秀樹	古本 寛
			蔵崎 直哉
			三好 真実

5. 本書の執筆は調査担当者である高橋 守と笹川龍一が行い、遺構及び遺物の実測については四国学院大学学生他の協力を得て笹川が行った。
6. 本報告書に掲載している実測図の縮尺については全てスケールで表示した。また遺構実測図中の矢印は全て磁北を指す。また、挿図の一部に建設省国土地理院発行の5万分の1地形図「丸亀」を使用した。
7. 発掘調査及び整理期間を通じて、次の方々・機関より多大な御指導・御援助並びに資料提供を得た。記して謝意を表します。（敬称略・順不同）

小田嶋悟郎、佐原 真、町田 章、谷一 尚、斎藤賢一、国立奈良文化財研究所、奈良県立橿原考古学研究所、香川県埋蔵文化財調査センター、香川県工業技術試験場

目 次

刊行にあたって・巻頭グラビア・例 言・目 次

第一 章	遺跡周辺の地理と歴史	12
第二 章	調査に至る過程	17
第三 章	1. 調査の概要	18
	① 遺物出土状況	18
	② 横穴式石室の構造	26
	③ 墳丘の構築状況	29
	2. 出土遺物	35
	① 弥生土器・石器	35
	② 須恵器・土師器・埴輪	36
	③ 銀環・ガラス製装飾品	51
	④ 武具・馬具	52
	⑤ 人歯について	55
第四 章	ま と め	56
図 版		57

挿 図 目 次

第1図 丸龜平野全景	12	第11図 墳丘トレチ設定状況	29
第2図 調査地と周辺の主要遺跡	14	第12図 墳丘横断面土層実測図①	31
第3図 調査地周辺地形測量図	16	第13図 墳丘横断面土層実測図②	32
第4図 調査地周辺遠景	17	第14図 墳丘縦断面土層実測図	33~34
第5図 墳丘実測図	19	第15図 石室構造平面図(天井石と列石)	33~34
第6図 閉塞石遺存状況実測図	20	第16図 墳丘出土土器(弥生時代)	35
第7図 玄室床面遺物出土状況実測図	22	第17図 墳丘出土石器(弥生時代)	35
第8図 羨道部遺物出土状況実測図	23~24	第18図 出土土器実測図①	36
第9図 玄室床面下層実測図	25	第19図 出土土器実測図②	38
第10図 横穴式石室実測図	27~28	第20図 出土土器実測図③	39

第21図 出土土器実測図④	40
第22図 出土土器実測図⑤	41
第23図 出土土器実測図⑥	42
第24図 出土土器実測図⑦	43
第25図 出土土器実測図⑧	44
第26図 出土土器実測図⑨	45
第27図 出土土器実測図⑩	46
第28図 出土土器実測図⑪	47
第29図 出土土器実測図⑫	48
第30図 出土土器実測図⑬	49
第31図 出土土器実測図⑭	50
第32図 モザイクガラス玉実測図	51
第33図 出土装飾品(銀環・ガラス製品)実測図	52
第34図 出土鉄器(刀・鍔)実測図	53
第35図 出土鉄器(馬具・武具等)実測図	54
第36図 出土人齒	55
第37図 出土人齒実測図	55

図 版 目 次

第38図 調査着手前の墳丘遠景(南から)	58
第39図 調査着手前の墳丘(南から)	58
第40図 伐採後の墳丘(南から)	59
第41図 伐採後の墳丘(西から)	59
第42図 伐採後の墳丘(東から)	60
第43図 調査実施前の玄室内部	60
第44図 羨道部の発掘調査風景(東から)	61
第45図 羨道部の検出状況(東から)	61
第46図 羨道部の検出状況(西から)	62
第47図 開口部遺出土状況(西から)	62
第48図 羨道部遺物出土状況(北から)	63
第49図 羨道部遺物出土状況(東から)	63
第50図 羨道部完掘状況(西から)	64
第51図 玄門部完掘状況(羨道部中央から玄室を望む)	64
第52図 玄室完掘状況(玄室奥から玄門を望む)	65
第53図 玄室完掘状況(玄門部から奥壁を望む)	65
第54図 第1トレンチ東壁	66
第55図 第2トレンチ西壁	66
第56図 第3トレンチ西壁	67
第57図 第2トレンチ東壁	67
第58図 第3トレンチ東壁	68
第59図 第4トレンチ西壁	68
第60図 第5トレンチ西壁	69
第61図 第4トレンチ東壁	69
第62図 第6トレンチ南壁	70
第63図 第1次墳丘と第2次墳丘	70
第64図 墳丘南部の掘り方の様子	71
第65図 羨道部と墳丘内部の列石	71
第66図 出土遺物①(須恵器)	72
第67図 出土遺物②(須恵器)	73
第68図 出土遺物③(須恵器)	74
第69図 出土遺物④(須恵器)	75
第70図 出土遺物⑤(須恵器)	76
第71図 出土遺物⑥(須恵器)	77
第72図 出土遺物⑦(須恵器)	78
第73図 出土遺物⑧(須恵器・土師器・埴輪)	79
第74図 出土遺物⑨(須恵器・土師器)	80
第75図 出土遺物⑩(装飾品)	81
第76図 出土遺物⑪(銀象嵌入鍔)	82
第77図 出土遺物⑫(武具・馬具)	83
第78図 出土遺物⑬(武具・馬具X線写真)	84

第一章 遺跡周辺の地理と歴史

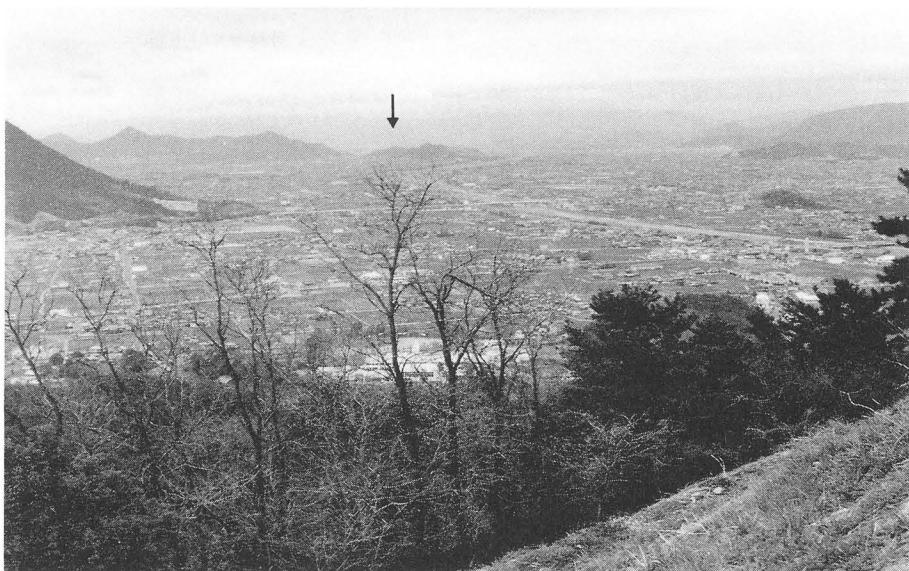
満濃町は香川県中央の内陸部に位置し、讃岐山脈の主峰である大川山(標高 1,043m)の北西麓から、丸亀平野の南部に位置する如意山(標高 157.8m)の東麓にかけて 53.63 km² 程の町域を持ち、東は綾歌郡綾上町・琴南町、南は仲南町、西は琴平町・善通寺市、北は丸亀市・綾歌郡綾歌町・同郡綾南町と境を接している。

町の名は、古代に築かれ平安期に弘法大師(空海)が修築した灌漑用溜池としては我が国最大の規模を持つ『満濃池』にちなんでいる。

満濃町の南部は土器川によって浸食された複雑な丘陵性山間部を形成するが、北部は丸亀平野の南端を占めており、当町の埋蔵文化財はその大半がこの周辺に遺存している。

この丸亀平野は、土器川やその支流であったとみられる金倉川・弘田川等の沖積によって形成された香川県下最大の沖積平野であり、満濃町北部を起点とした扇状地地形を基本に、これらの河川による氾濫原・小三角州などから形成されており、南から北に下るゆるやかな傾斜になっているため、たいていの場所から瀬戸内海や対岸の岡山を望むことができる。この河成沖積層の土壤は、下層土が灰褐色のマンガン結核を含む黄褐色砂質土層、表層70~80cmが強粘土質砂礫層で構成されており、通常弥生時代以後の遺構はこの下層上面に遺存している。

そして、更にこれらの遺構が遺存する黄褐色砂質土層と下の洪積層の間では、縄文時代後期から晩期の生活痕が確認されており、現在のところ丸亀平野の古代文化は約3,000年前まで遡ることが判明している。



第1図 丸亀平野全景（安造田古墳群は平野部奥中央の小丘陵に所在する）

瀬戸内海の南岸に位置し気候と風土に恵まれた丸亀平野は、かなり古くから人類の文化が開けた土地であり、丸亀市の中ノ池遺跡・善通寺市の五条遺跡・善通寺市から仲多度郡にかけて広がる三井遺跡など、弥生時代前期から中期にいたる同時代の遺跡群が数多く知られている。中ノ池遺跡では環濠と想定される三重の大溝が検出され、弥生時代前期の古段階の特徴をもつ弥生土器を中心に、一部中期的様相を呈するものまで出土している。三井・五条遺跡では、遺構・遺跡の範囲などについては現在も全く不明の状態であるが、出土した土器片については、機内第1様式の中段階から新段階に相当することが確認されている。こうした平野部の遺跡群は自然堤防上に立地すると考えられており、三井・中ノ池遺跡などは現在の海岸線からの距離は2～3kmを計るが、当時の復元海岸線を現在の標高5mあたりと推定すれば、海岸部に形成された集落であることがわかる。

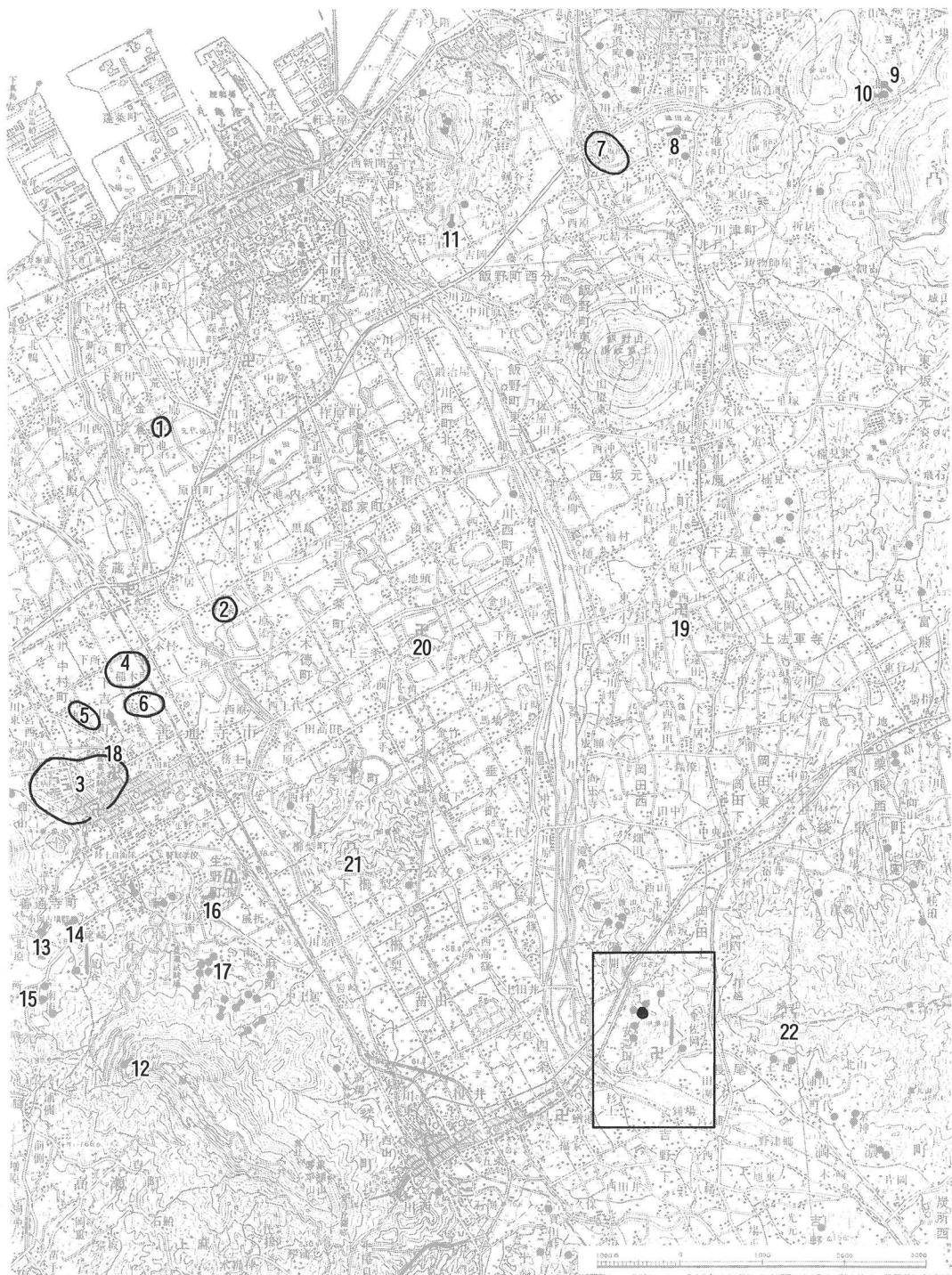
満濃町から北西に5km程の善通寺市周辺では、陣山遺跡・瓦谷遺跡・我拝師山遺跡などから銅鐸・銅劍・銅矛等が多数出土しており、周辺に広がる弥生時代初頭から古墳時代末にかけての中軸的な集落遺跡として知られている旧練兵場遺跡群や九頭神遺跡・石川遺跡・稻木遺跡等を本拠とした集団との関連も注目されている。やがて古墳時代になると弥生時代に開始された稻作文化は完成期を迎え、丸亀平野という肥沃な生産基盤を背景に、特定の有力者が地域を代表する権力者として生まれ変わり、各自の勢力域に多くの古墳を築くが、善通寺市周辺だけでも400基を超える古墳が存在している。中でも筆ノ山・我拝師山で北部を、大麻山で南部を限られた弘田川流域の有岡地区は前方後円墳が集中する地域として有名である。

また、満濃町から北に10km程下流域の坂出市周辺でも弥生時代から古墳時代にかけての大集落域とみられる下川津遺跡をはじめ、数多くの古墳の存在が知られている。

このように丸亀平野や周囲の山麓部には、数多くの古代遺跡が確認されているが、この平野の最奥を占める満濃町北部では、今のところ集落遺跡等は確認されていない。しかしながら、土器川下流域の如意山南東麓の西高篠宮西・公文や、上櫛梨の宮の前、土福周辺では弥生時代の土器や石器が発見されており、この周辺は当時低湿地であったと考えられることから、水田地帯とそれに伴う農耕集落の存在が考えられている。また、ここから4km程南の東佐岡の岩谷池下からは平形銅劍2口が発見されており、他にも大川郡志度町多和文庫に、土器川西岸に位置する吉野八幡社境内出土と伝えられる袈裟襷文銅鐸の破片が保存されていることや、この周辺が城山・猫山・鷹丸山山麓の湧水地帯に近いことから、如意山同様農耕集落が発達した可能性が高い地域であると考えられる。

満濃町域の古墳は土器川東の丘陵地帯に多く見られるが、前期から中期にかけてのものは極めて少なく、公文山古墳・富隈神社裏古墳・黄金塚古墳・七塚古墳（町内唯一の前方後円墳・全長20m）が知られている程度である。

後期古墳は羽間から長炭にかけての山麓や丘陵部に20基程度の存在が知られており、今回調査の対象となった安造田東3号墳もこの中に含まれる。代表的なものとして、安造田



第2図 調査地と周辺の主要遺跡

- | | | | | |
|------------|-----------|------------|-------------|-----------|
| 1. 中の池遺跡 | 2. 五条遺跡 | 3. 旧練兵場遺跡群 | 4. 稲木遺跡 | 5. 九頭神遺跡 |
| 6. 石川遺跡 | 7. 下川津遺跡 | 8. 川津茶臼山古墳 | 9. ハカリゴーロ古墳 | 10. 爺ヶ松古墳 |
| 11. 吉岡神社古墳 | 12. 野田院古墳 | 13. 菊塚古墳 | 14. 王墓山古墳 | 15. 宮ガ尾古墳 |
| 16. 磨臼山古墳 | 17. 岡古墳群 | 18. 伝導寺跡 | 19. 法勲寺跡 | 20. 法幢寺跡 |
| 21. 櫛梨城跡 | 22. 西長尾城跡 | | | |

神社前古墳(複室構造)・佐岡古墳（一墳二石室で左の石室は複室構造、右に4m離れて開口する石室は羨道部が埋まっており構造は不明であるが、両玄室壁面は共有される可能性がある）・断頭古墳(ドーム型石室)など極めて特徴的なものが多く含まれることが知られているが、これまでに本格的な調査が実施されたことがないため、未確認の古墳も数多く残されている可能性が高く、この地の調査は今後の課題とされていた。

以上の内容からも、満濃町北部の平野部には、未発見の弥生時代から古墳時代の比較的大規模の大きな集落が眠っている可能性が高いと推定される。

律令制下の当町域は鵜足郡と那珂郡に属しており、条里制が施行されたらしく、町域北部には「四条」「五条」「大坪」等の地名と共に方格地割りが残る。また、この頃四条本村に弘安寺が建立された。現在も本堂の下や境内隅に礎石が残り、白鳳期のものとみられる十六葉重弁蓮花文軒丸瓦や重弧文軒平瓦が出土する。弘安寺は境内地周辺に残る「大門」の地名や布目瓦が散布する範囲からみて、創建当時は方一町程の広大な寺域であったとみられる。

古代における人々の活躍の場は、古墳や古代寺院の分布が示すように、丸龜平野では満濃町北部が最奥とみられるが、当地域には大規模な古墳の築造は行われておらず、弘安寺が羽間から長炭周辺に小規模な群集墳を築いた集団によって建立されたと考えれば、この寺院の成り立ちはこの地の古代史を知る上で非常に興味深いものと思われる。

鎌倉期になると在地領主が頭角をあらわす。そして勢力をのばし、城山山頂に西長尾城を築いたが、阿波の三好実休、土佐の長宗我部元親などの侵入により、これに屈することとなる。

この後、生駒氏による統治を経て、近世になると新田開発が積極的に進められ、各地で埋立工事や灌漑用溜池の構築等の土木工事が行われ、満濃池の修復工事も進められた。藩政時代の満濃池の修築は讃岐の国普請であり、屈指の大工事であったと伝えられている。

現在では町のシンボルでもある満濃池の水資源に頼り、長く行われて来た米・麦・葉煙草などの生産に加えて、最近では多角経営化が進み、果樹・茶園・施設園芸などが行われている。

参考文献

『満濃町史』	満濃町	1975年4月
『善通寺市の古代文化』	善通寺市教育委員会	1973年11月
『善通寺市史』第1巻	善通寺市	1977年7月
『香川叢書・考古篇』	香川県教育委員会	1983年3月
『王墓山古墳調査概報』	善通寺市教育委員会	1983年3月

第3図 調査地周辺地形測量図

- 1. 安造田東峠古墳
- 2. 安造田東1号墳
- 3. 安造田東2号墳
- 4. 安造田東3号墳
- 5. 安造田神社裏古墳
- 6. 安造田神社前古墳
- 7. 佐岡1号・2号墳
- 8. 佐岡遺跡
- 9. 佐岡寺跡

This figure is a topographic map of the survey area, featuring contour lines indicating elevation. The map includes several labeled locations and features:

- Topographic Labels:** 羽間駅 (Himajin Station), 羽間池 (Himajin Pond), 延命 (Enmei), 打越上池 (Tachibaru Upper Pond), 東佐 (Higashisawa), 西佐岡 (Nishisawagawa), 小原 (Komohara), 上仲屋敷 (Ue-nomaya Residence), 仲屋敷 (Nomaya Residence), 佐岡寺 (Sawagawa Temple), 安造田神社 (Anzota Shrine), 河 (River), 道 (Road), 駅 (Station), 变電所 (Transformer Station).
- Contour Lines:** Contour lines are shown in meters, with elevations ranging from approximately 80m to 160m.
- Scale:** A scale bar indicates 500m.
- Numbered Points:** Points 1 through 9 are marked with numbers and symbols, corresponding to the numbered list in the legend.

- 16 -

第二章 調査に至る過程

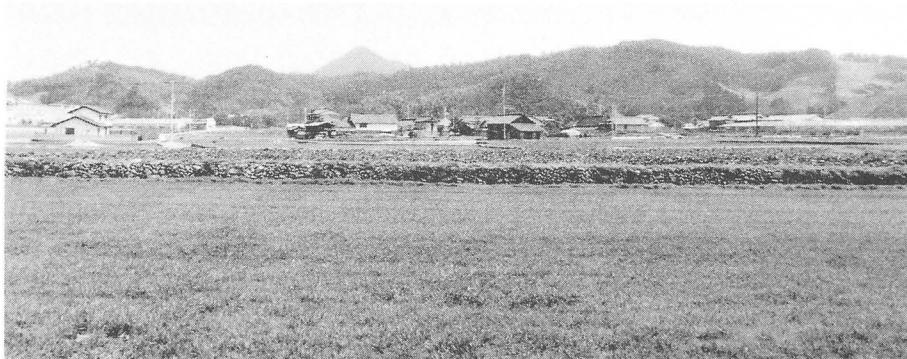
前章で紹介した中津山西側山麓部に群集する後期古墳群の中に、安造田東3号墳と呼ばれる円墳が所在している。この地区の古墳は果樹園・山林中などにあり、その大半は私有地である。また、すぐ西側に国道32号線とコトデン(高松琴平線)が平行して走り、琴平宮の参詣客の交通が多い場所であることから、観光開発による文化財破壊が懸念されている地区もある。

平成元年1月24日、琴平町内に在住する丸尾重夫氏から、氏の所有する満濃町大字羽間2962-6,7番地(安造田東3号墳が所在する山林)に対しての開発申請がなされた。当該地周辺には古墳が多いため、殆どの所有者は古代人の墓である古墳を認識しており、丸尾氏からの申請も古墳の処置についての問い合わせに始まっている。

満濃町教育委員会は古墳の処遇について香川県教育委員会の指導を受け、現地での確認作業・資料収集等を実施したところ、墳丘及び横穴式石室の遺存状況は比較的良好であることが確認され、本格的な発掘調査が必要であると判断された。

発掘調査経費については事業者経費負担が原則となっているが、個人の住宅建設に伴う工事であったため、満濃町教育委員会が事業主体となり平成2年度国庫補助事業として埋蔵文化財発掘調査を実施すべく申請準備を開始したが、町教委には埋蔵文化財専門職員がおらず、香川県教育委員会文化行政課、埋蔵文化財調査センター等に協力を求めた。しかしながら、四国横断自動車道路建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査等で多忙との理由により良い答が得られず、町教委は発掘調査の経験を持つ近隣の関係機関に照会した。最終的に善通寺市教育委員会が協力し調査を実施することとなった。

満濃町教育委員会は円滑に事業を進めるため、平成2年6月1日に補助金交付決定(7月24日)前の事業着手承認申請の手続きを行い、7月9日から伐採作業に取りかかった。補助事業の総額は2,028,000円、内訳は国費1,014,000円、県費338,000円、町費676,000円である。



第4図 調査地周辺遠景(中津山を西から望む)

第三章 調査の概要

平成2年7月9日から現地での発掘調査を開始した。まず記録写真撮影を行った後、墳丘及び周辺部を覆う樹木・下草の伐採作業を実施した。この作業により墳丘の形態がより明瞭になり、安造田東3号墳は自然の尾根の先端部を利用した小円墳であることが一瞥できる状態となった。

石室内部には多量の土砂が堆積していたが、天井石が一部失われている羨道部中央の天井部分から侵入し横穴式石室の構造を把握した後、その内容を基に首軸方向と併せた縦断・玄室内部で2箇所の横断・玄門部の横断・羨道部の横断実測箇所を選定し、石室構築状況と併せた墳丘断面を調査するための基準杭の設置作業を実施した。ただし、首軸については羨道部西半分が埋没しているためその形態が不明瞭であり、一部露出する石材からだけでは下部構造が把握できず、また羨道幅が比較的狭いと思われたため、土層観察用の畦を残しての掘削を考慮し、本来の首軸と思われる位置からやや北寄りにずらして設定した。

次に、後の作業を容易に進めるため、羨道部の天井石が失われている部分から発掘作業を開始し、併せて墳丘現地形の平板を使用した地形測量を実施したが、調査時期が酷暑と重なり、また伐採後の墳丘には至る所に樹木の根が広がっており、特に開口部の初期掘削と各トレンチの掘削時は大変な作業となった。

埋没していた羨道部の西半分では50cm程掘削すると両側の壁面上部が見え始め、転落している不要な石材との判別が容易にできるようになった。更に掘削を進めると、開口部付近において、壁面の石材でなく転落石材でもない複数の石材が確認された。動かされた形跡はあるものの、その遺存状況から閉塞石と判断し、位置を詳細に記録しながら掘削レベルと併せて除去した。

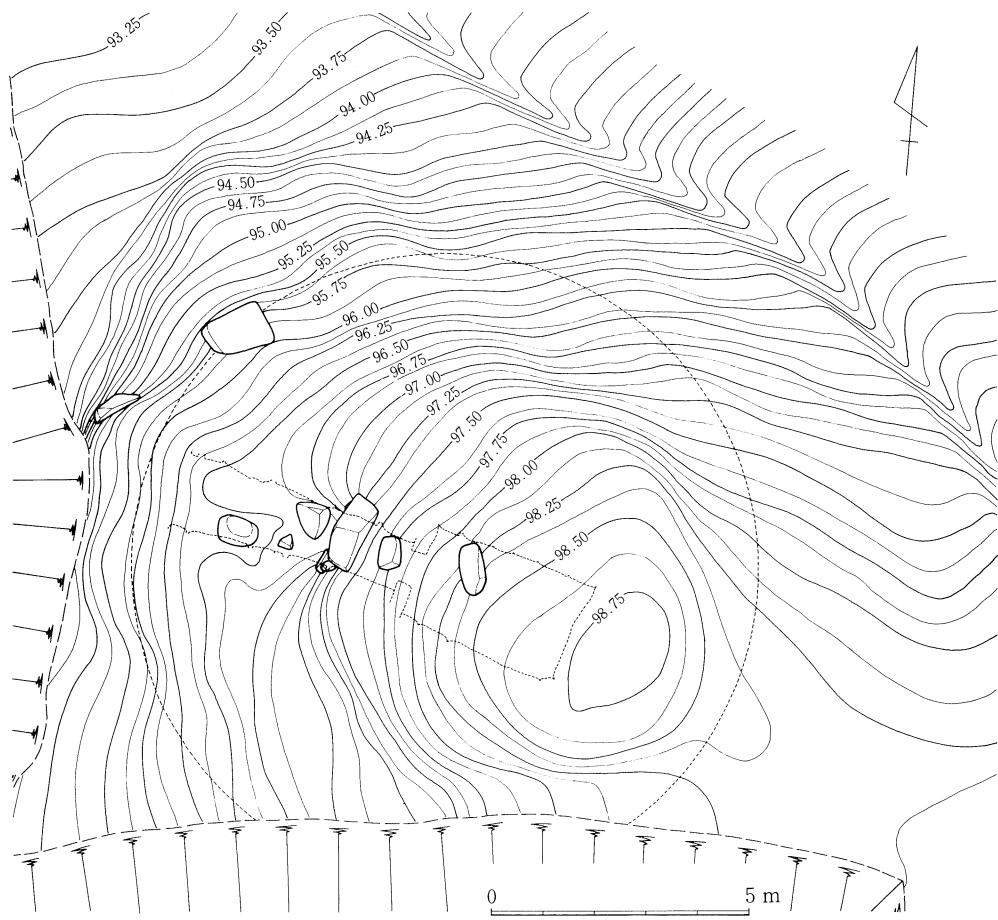
更に掘削を進めるうちに完形の須恵器が数点、ほぼ同一レベルで顔を覗かせはじめたので床面に近づいたと判断し、並行してこのレベル以下の排土のふるいがけ作業を実施し、ガラス玉・鉄器片等小遺物の確認作業を行った。

驚いたことに、羨道部であるにもかかわらず、ほぼ完形の須恵器約50点や馬具等が開口部に近い南壁面に沿って積み上げられたような状態で確認された。また北壁沿いには直刀・鎧が置かれており、追葬時に掻き出されたものか、或いは玄室に追葬しきれなかったため羨道部に埋葬された被葬者の副葬品かと考えたが、調査が羨道から玄室へと進むにつれて意外な状況が浮かび上がって来た。

以下、調査の進展により確認された内容をその順に従って解説する。

① 遺物出土状況

石室内部を埋める土砂の堆積状況からは、当古墳が構築された後暫くすると墳丘上に樹

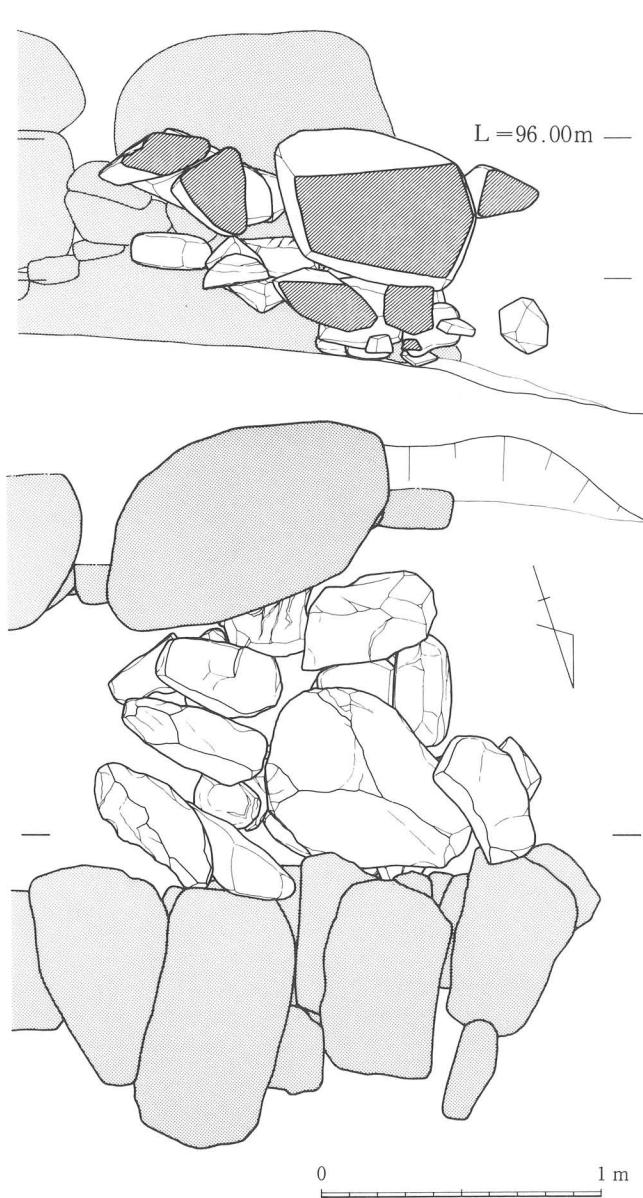


第5図 墳丘実測図

木が繁茂し、その根の浸食等によって雨水が侵入するようになり徐々に埋没が進行した様子が伺えた。調査時に確認された土砂の堆積は玄室ではほぼ水平に約80cmであり、下層は墳丘の版築に見られた黒色土と褐色土が交互に堆積しているが、中層では砂質土が多くなり、中～上層には、天井や壁面の隙間を埋めていた礫が多く含まれていた。時間を経るにつれて墳丘上部の損傷は進み、埋没の速度は加速している。そして、羨道天井部が崩壊し、開口した時点で更に多量の土砂が流入し現在に至ったようである。

横穴式石室内からの遺物は、盜掘等による攪乱層からの出土を除けば、全て床面上にはほぼ同一レベルで遺存しており、石室内部に厚く堆積する土砂で埋められていた。遺物は出土位置とその状況により閉塞部から開口部までを含む羨道部と玄室部に大別できる。

石室内部の掘削は作業行程を考慮し、玄門を境に玄室内部の調査は後に残し、羨道部か



第6図 閉塞石遺存状況実測図

状況下で9世紀前半頃の須恵器片(坏)が出土した。この部分には攪乱された形跡が無く、その頃に何者かが石室内部に侵入したことが考えられた。また、床面までの掘削が完了し、閉塞部分も最下部までの構造が明かとなった時点で、羨道西側に置かれた遺物群はこの閉塞石の下を経て開口部にまで散在していることが判明した。

羨道部から開口部までの遺物の出土状況を克明に記録した後にそれらを取り上げ、羨道部壁面の実測作業と並行し、引き続き玄室内部の掘削を実施した。当初、玄門部の土層には攪乱された様子が無いことから玄室が未盗掘であるという期待もあったが、実際にはその中央部に礫床下にまで及ぶ乱雜な盗掘跡が確認された。この盗掘孔からは蠟燭片・鉛筆

ら開口部までの掘削を最初に実施した。羨道部の埋土は部分的に攪乱を受けているらしく、掘削中に少量の須恵器片の他に円筒埴輪片・9世紀前半頃の初産と思われる須恵器(坏)片がそれぞれ1点ずつ出土した。

羨道部床面の須恵器は大半が羨道南西側の壁沿いに整然と並べられた状態で出土しているが、完形の土器の間に破損したものの破片を丁寧に整理し並べた状態のものも幾つか認められたため、この時点では追葬の際に搔き出されたものではないかと推定された。確認できた遺物は夥しい数の須恵器の他、土師器、馬具(轡金具・鐙・帶金具)、武具(直刀・鎧)、装飾品(銀環・トンボ玉・ガラス製白玉・ガラス製小玉)などであり、まるで未盗掘の玄室を調査しているかの様相を呈した。直刀と鎧については他の遺物と分けて北西壁沿いに置かれており、土器群との間には辛うじて人一人が通行出来る程の幅が確保されていた。

出土した遺物はいずれも古墳時代後期の代表的な遺物であったが、羨道中央部から他の遺物群と同一遺存

の芯・雨合羽片・昭和三十?年の一円硬貨が出土しており、最近荒らされたものであることも判明した。盗掘者は開口していた羨道中央の天井部分から侵入し、玄室のみを荒らしているが、盗掘は玄室中央部のみに留まり他に及んではいない。

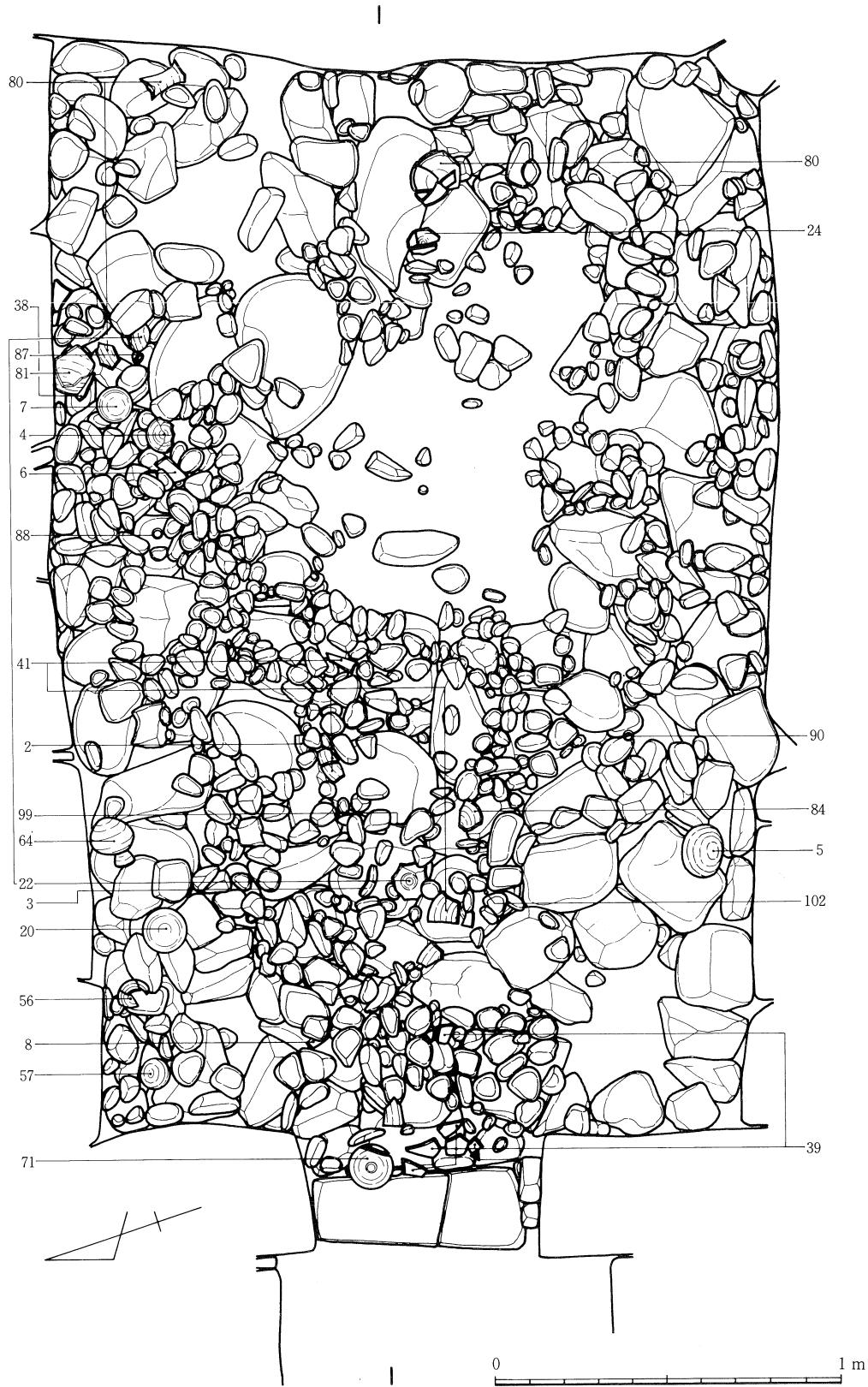
玄室は荒らされてはいたが、礫床まで達している盗掘痕は玄室中央部のみであり、その周囲にはまだ多数の須恵器や銀環、礫床の隙間には数点のガラス玉が残されていた。出土遺物は本来の副葬品としては、羨道部で確認されたものと同時期のものだけであることから、羨道の出土遺物が追葬に伴う搔き出しである可能性は極めて低くなった。ただ玄室奥から、8世紀前半頃の初産とみられる須恵器(壺)と9世紀前半頃の須恵器(壺)がそれぞれ1点ずつ出土しており、後者については羨道部から出土していた破片と接合できたが、その遺存状況等から昭和の盗掘以前に破損し、石室内に散乱していたことを示している。驚いたのは、9世紀前半頃以前の8世紀前半頃にも何者かの侵入があったという痕跡が確認されたことである。古墳時代より後の二度にわたる侵入は、一体何を目的としたものであるのかなど不明な点は多いが、残された遺物を見る限りでは盗掘が主な目的ではなかったようである。

また、開口部には河原石が集積しており、一部に火を焚いた痕跡も認められた。本墳に伴う墓前祭祀の痕跡とも考えたが、羨道床面からの遺物の散乱が閉塞石の下を経てこの場所まで広がっている。その状況から、恐らくは9世紀前半頃に何者かが閉塞石を除去して侵入し(8世紀前半頃から開口していた可能性も考えられる)、中で何等かの行為を行うために玄室の副葬品を羨道まで運び出し、目的を果たした後に再び閉塞石を戻したのではないかと考えられ、開口部の焚き火についてもこうした行為の一環として行われた可能性が高い。

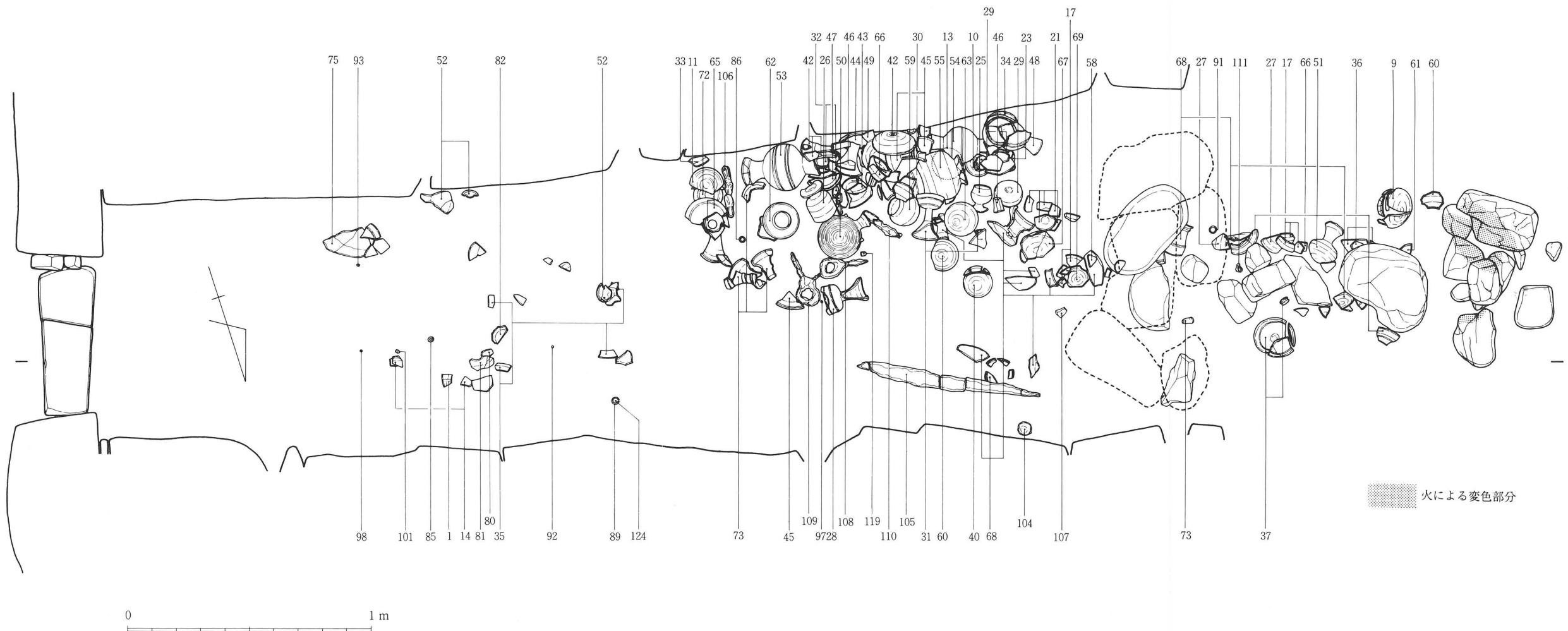
羨道部の副葬品を検出している際に、耳環と伴に人歯と思われる遺物が出土している。焼かれていれば、8世紀前半頃と9世紀前半頃の二時期に持ち込まれた壺のいずれかが藏骨器であることが証明できようと、鑑定を岡山大学歯学部の小田島梧郎先生にお願いしたが、結果は「40才前後の成人の歯で焼かれてはいない」とのことであった。

従って、出土した人歯は本墳の被葬者のものである可能性が高い訳であるが、後の時代の侵入者が持ち込んだ遺物の性格については全く不明のままである。しかしながら、県下では後期古墳から同様の時期の遺物が出土したという調査例が数件確認されており、この時期に横穴式石室内部で何等かの特別な儀礼を行うことが流行したのではないかと推定することができよう。他の調査例との比較検討が待たれるところである。

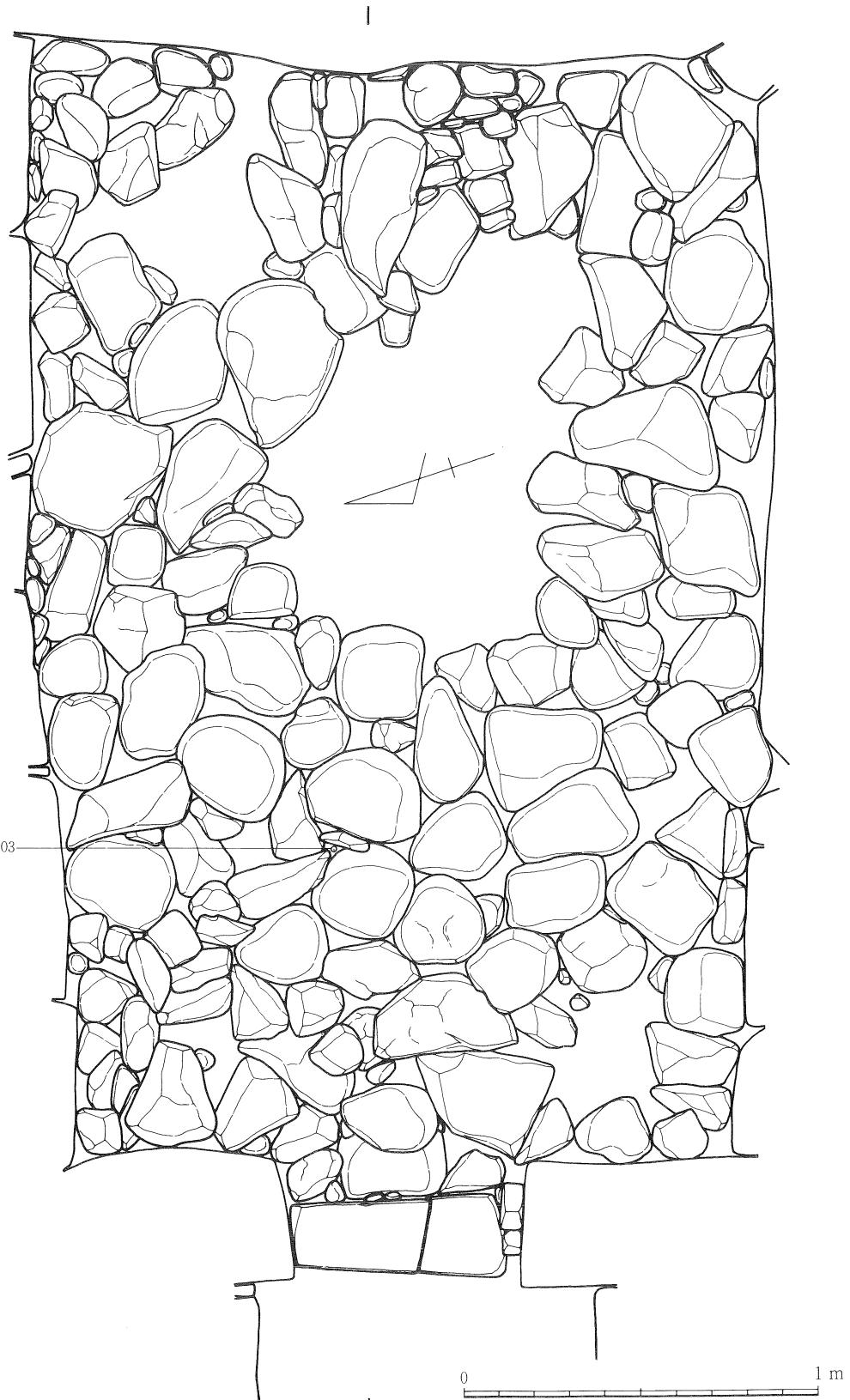
また、人歯の鑑定の詳細については55頁に掲載してあるので参考にして頂きたい。



第7図 玄室床面遺物出土状況実測図



第8図 萩道部遺物出土状況実測図



第9図 玄室床面下層実測図

② 横穴式石室の構造

本墳の主体部である横穴式石室の遺存状況は当初の予想以上に極めて良好であった。

石室の規模は全長 8.0 m・羨道長 4.5 m・玄門長 0.3 m・玄室長 3.2 m、羨道幅は西端で 1.4 m・東端で 0.95 m、玄門幅は 0.65 m、玄室幅は西端で 1.9 m・中央部で 2.0 m・東端で 2.0 m、羨道高は残存部で 1.4~1.5 m、玄門高 1.1 m、玄室高は西端で 2.0 m・中央部で 2.25 m・東端で 2.0 m を計る。石室の主軸方位は N-74°-W に向いておりほぼ西に開口しているが、基底部を見ると玄室を基準とした首軸に対して、羨道南壁は開口部でやや外側に反っている。開口部からの展望は、正面が普通寺市の古墳地帯である有岡地区・五岳山方面であり、その右手に丸亀平野が広がり一部瀬戸内海も望める。

石室の石材はこの地区の山に多く露頭している淡灰褐色の花コウ岩であり、風化し方状節理したもの、更に風化が進み角が取れ卵形を呈するものが使用されている。また、天井の隙間を埋めるために扁平な河原石が数点用いられているが、壁面や天井は全て花コウ岩が用いられている。丸亀平野周辺の山麓部に見られる石室構築用の石材は、この花コウ岩か安山岩が主流であり、古墳付近に豊富に露頭しているものが使用されているため、石室を見ると付近の地質的環境もある程度は把握できる。

石室は小振りではあるが構築状況は見事である。壁は 2~3 段階に分けて積まれており、その手順は奥壁に顕著に見られる。奥壁は最下段に 1 枚の巨岩を置き、中段には中型の岩を複数用い、上段には再び 1 枚の巨岩が架設されている。奥壁最下段の岩の上面から水平に左右の壁を見れば、これに併せて同一の高さまで積まれた壁が確認でき、この線は玄門立柱を経て、羨道を開口部まで追うことが出来る。また、壁の持ち送りや平面構造は左右対象に造り出されているが、南側の壁面には全体的に大型の石材が使用されているのに対して、北側の壁はこれと比べて小振りな石材しか見られない。これは、本墳が立地する尾根の地形に起因するものではないかと考えられる。詳細は次項で述べるが、石室の南側は昇りの斜面であり、石室自体も山を削り込んだ部分に構築されているため墳丘の封土も薄い。これに対して石室の北側は降り斜面となっており、石室は平坦に削られた部分に構築されているため墳丘の封土は極めて厚くなっている。

天井石は羨道部では一部失われているが、残存部の構造等から 4~5 点の柱状の石材が用いられていたと見られる。玄門部分では天井が一段下がるが、玄室の天井は高く扁平な 2 枚の巨岩が架設されている。

玄門部には両側に扁平で四角い巨大な自然石が対象に置かれ、見事な門構造を呈している。その床部には薄い安山岩の仕切り石が設置されており、礫床はここを境に玄室内部にのみ見られる。床一面に比較的大きな扁平の河原石を敷き詰めた後にその上に円礫が薄く敷かれているが、下の石が部分的に露出している。床面のレベルは玄室奥から開口部に向かって緩やかに降り（全長 8.0 m で 40cm 降る）、排水溝は持たない。

開口部付近では羨道部の天井石が失われているが、これは盗掘によるものではなく、本



第10図 石室実測図

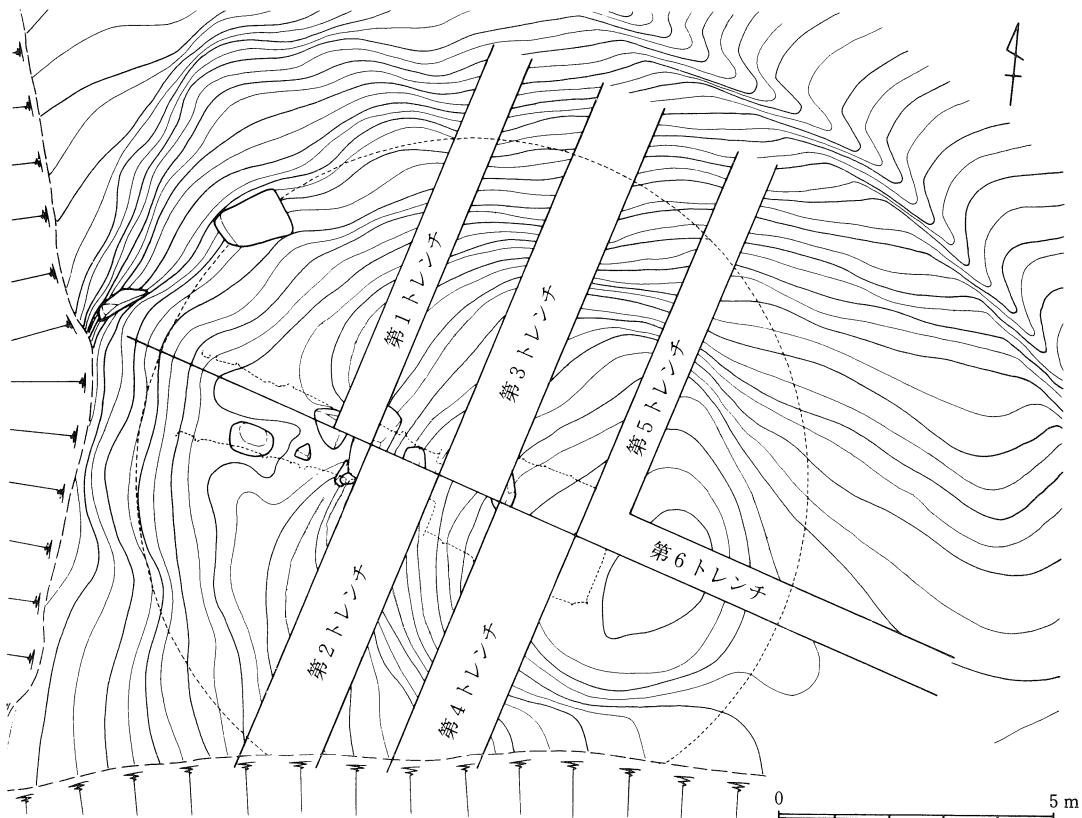
墳の立地条件と構造によるものである。副葬品等の遺存状況をみると、中世頃に口が閉じられた後の侵入者の痕跡は認められず、また開口部が強固に閉塞されていた様子も認められないため、天井石を除去してまでの盗掘は考えられない。

横穴式石室内部を観察すると、玄門部を境に、羨道全体が開口部及び斜面下方向に向かって押され変形している様子がよくわかる。変形は特に羨道部北壁に顕著に見られる。恐らくは他の横穴式石室と同様に、押えの無い開口部(西)に向かって土圧がかかり、地盤が不安定な斜面下(北)への崩壊と併せて天井石がずれ落ちたようである。羨道部の変形方向の斜面下約1.5～2 mの所に2点の天井石が転落している。

従って本墳開口部の崩壊は、尾根の先端部に構築された際の構造が斜面の傾斜に対して力学的にみて非対象であったことに起因していると思われる。地形が左右対象となる方位に石室の首軸を取らなかった点については、その向きの持つ意味の解明が必要であるが、当地域の古墳群は未調査のものが大半であり今後の比較分析が期待される。

③ 墳丘の構築状況

本墳は中津山西側山麓部の尾根の先端部に立地している。そして前項で述べたように横穴式石室は斜面の傾斜に対して力学的にみて非対象に構築されている。横穴式石室の調査と併せて、墳丘上に6箇所のトレンチを設定し、版築土層等の断面観察を行った。



第11図 墳丘トレンチ設定状況

第1・3・5トレンチでは掘削中に安山岩・花コウ岩塊の石列を確認したが、版築土層を観察するための作業を急ぐため、各トレンチの石材は位置とレベルを克明に記録した後に除去し、引き続き地山面下まで掘り下げた。ただ、第1トレンチで確認された石列から羨道部及び開口部までは、両者の関係を調べるため、石列のレベルまでの掘削を実施したが、石列は予想に反して希薄であり、石室の北側にのみ墳丘の形態と併せて半円形に遺存している状況などから、墳丘造成作業中の必要な工程で置かれたものではないかと考えられた。

各トレンチの掘削が完了した段階で、石室の北側のみ確認された石列の外側にこれと平行して半円形に回る溝の存在も確認されたが、石列と同様に墳丘の盛土工事の際の土留めや平面プラン確認用等様々な理由が考えられる。

またトレンチ壁面の土層観察の結果も、石室の構築が地形に対して非対象であることを反映し、北側と南側では完全に異なっている。

古墳の構築状況は、尾根の先端部の地形に併せて階段上の平坦面を削り出し、そこに古墳の構築プランを決定した後に、まず石室の掘り方を掘削している。この際、石室の南側は本来の地形が高いため余り削平されておらず、削平面と石室床面との比高差は1.5m程度であるのに対し、石室の北側では50cm以下となっており、このため版築の状況も両者で異なっている。石室南側及び東側では、石室の石材設置と併せて深い掘り方を埋める作業が最初に行われているため、石材の移動や架設などの石室構築作業は比較的容易であるのに対して、石室北側で行われた、石室の石材設置と併せて低い場所からの版築工事及び石材の移動や架設などの石室構築作業はかなりの労力が必要であったと見られる。前項の横穴式石室の構造で述べた「南側の壁が全体的に大型の岩が使用されているのに対して、北側の壁はこれと比べてやや小振りな岩が使用されている」という点もこれと一致する。

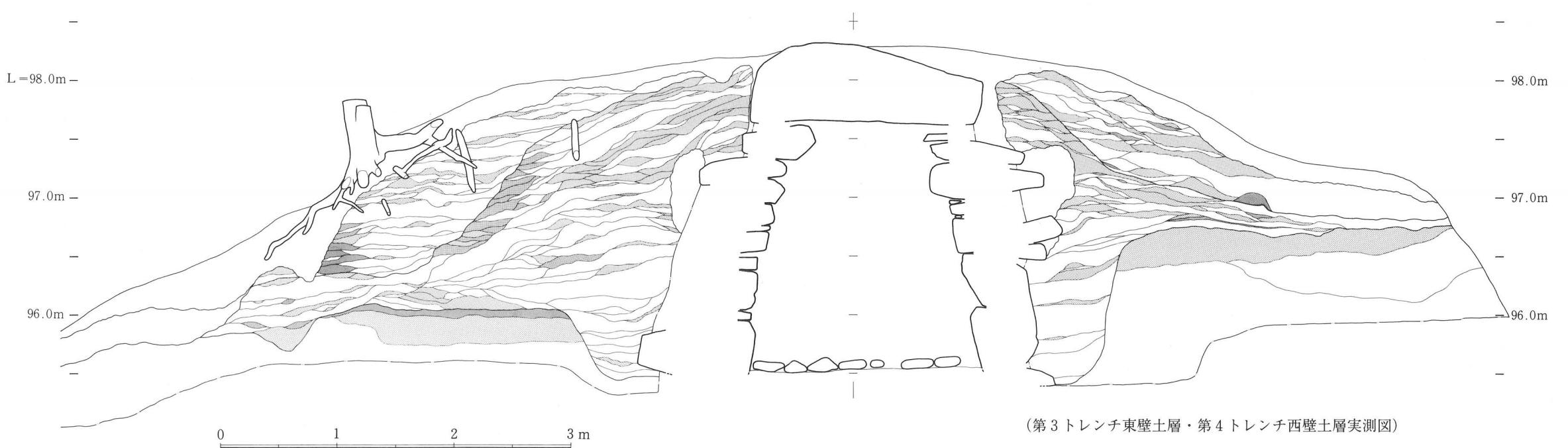
版築土層は色で見ると当該地の地山である褐色粘性土と、これに何等かの物質を加えて土壤改良を施した硬質の黒色土層に大別できるが、地山である褐色粘性土は途中で灰褐色の花コウ土の風化土となり、土壤で分類すると更に細分できる。土壤改良された黒色の土は乾燥すると極めて硬質であり、石室を保護する墳丘を強化させる工夫が施されている。

土壤改良された黒色土層の内容については、善通寺市の有岡地区に所在する前方後円墳である王墓山古墳・菊塚古墳・丸山古墳等で確認された同様の土層の分析結果を見ると、墳丘の封土に不透水層としての機能を持たせるため、木と共に焼き、海水を混ぜて練り上げたものであることが判明しており、本墳にも同様の技法が用いられている可能性が高い。

墳丘の盛土作業は石室の構築作業と並行して行われているが、最初に形成された墳丘は石室を取り巻くだけの痩せたものであり、天井石が架設され第1次墳丘が完成した後に全体を整える第2次墳丘が形成されている。第1次墳丘の表面は土壤改良された黒色土が多く露出し防水効果を高め更に強固なものとなっており、第2次墳丘との接合状態がよく解る。この様子は第3トレンチ西壁面・東壁面及び第5トレンチ西壁面に克明に見える。

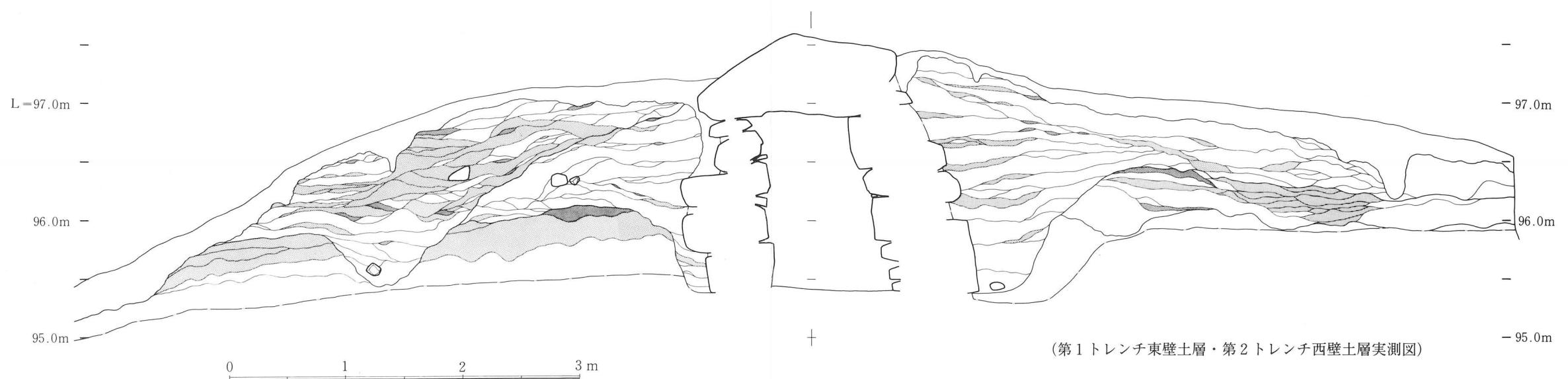
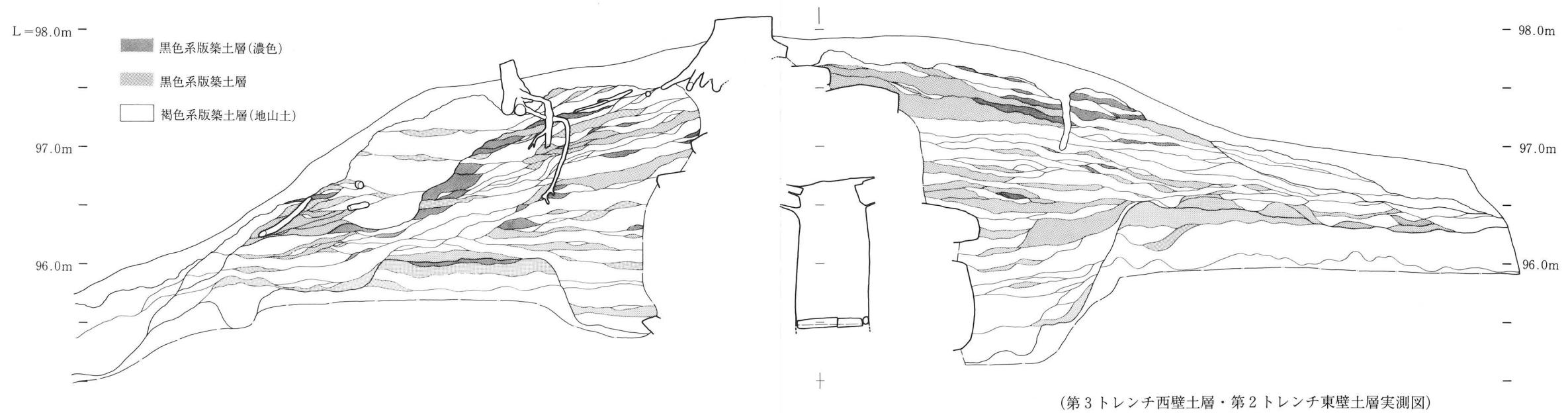


(第5トレンチ西壁土層・第4トレンチ東壁土層実測図)

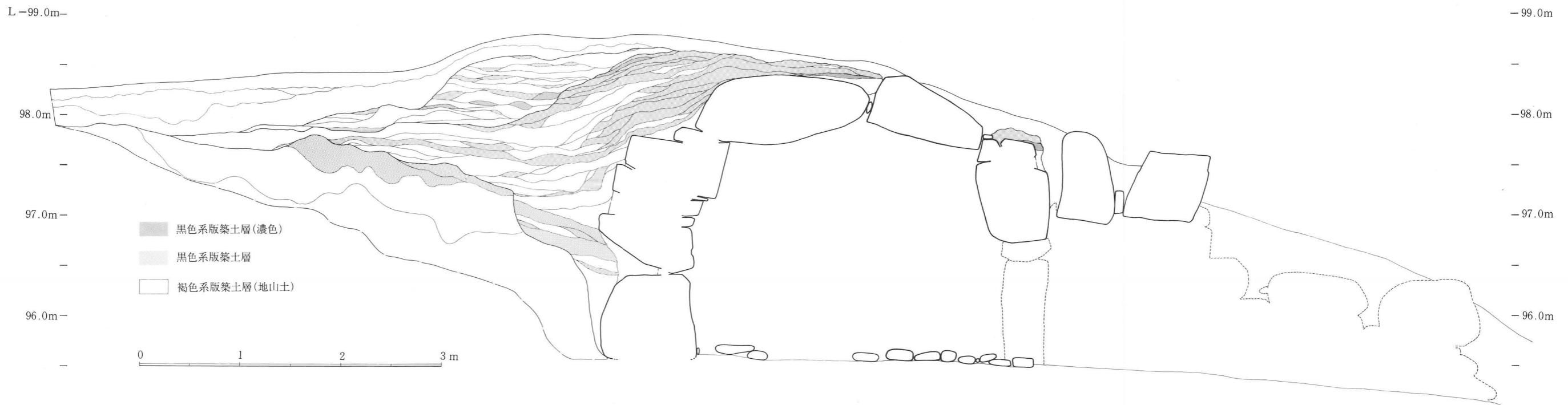


(第3トレンチ東壁土層・第4トレンチ西壁土層実測図)

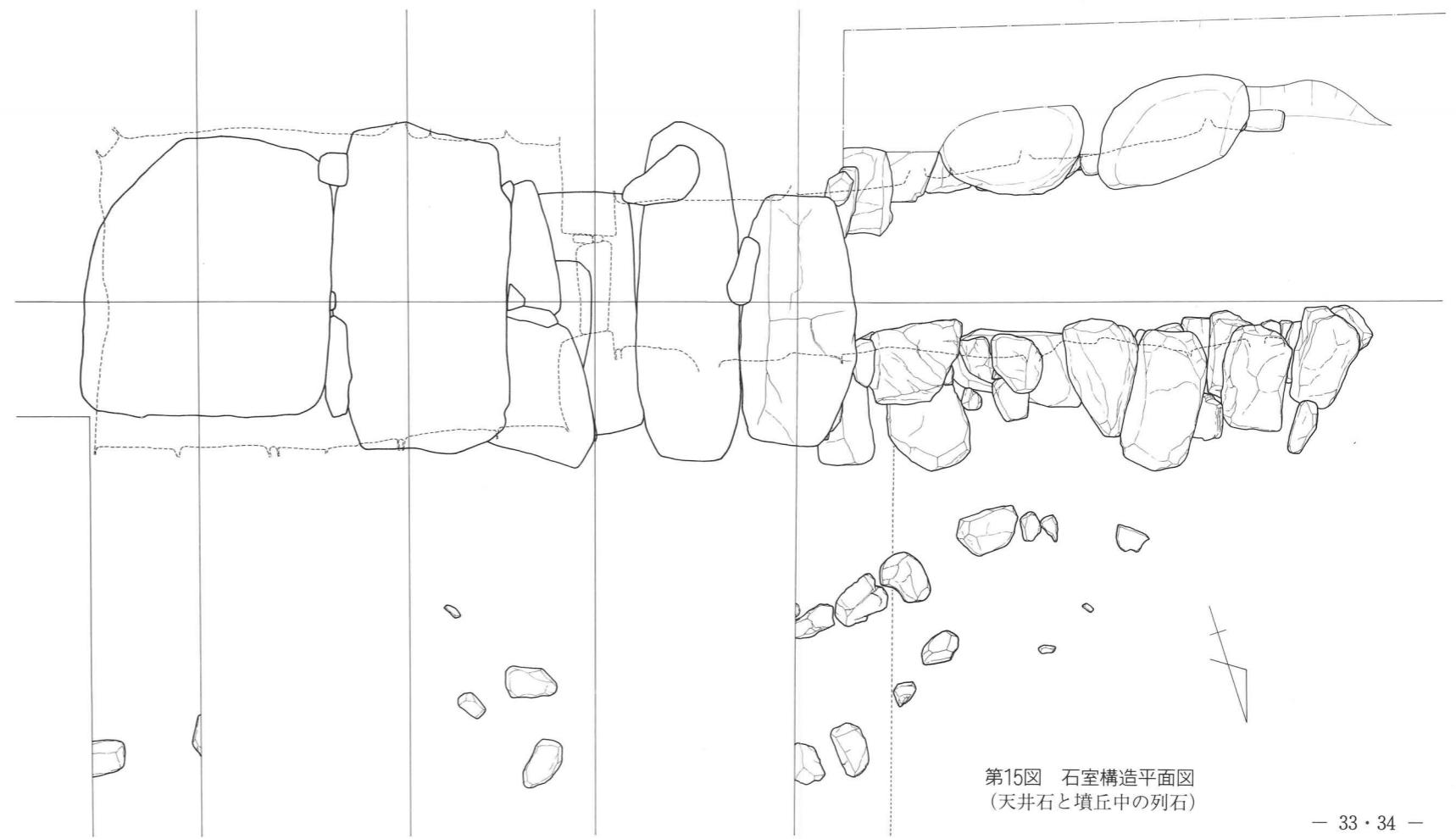
第12図 墳丘横断面土層実測図①



第13図 墳丘横断面土層実測図②



第14図 墳丘縦断面土層実測図
(第6トレンチ南壁土層実測図)



また、削平された地山上面についても土壌改良が行われた痕跡が認められる。地盤強化、土壌改良作業の跡等とも考えられるが詳細は不明である。善通寺市の王墓山古墳の調査の際にも、本墳と酷似した第1次墳丘と第2次墳丘の状況と共に、地山上面の土壌改良が確認されており何等かの理由付けが必要であると思われるが、現在のところこのような調査事例が少ないため、古墳築造に係る土木技術研究の今後の課題としておく。

善通寺市有岡地区の古墳の版築土分析結果は、史跡有岡古墳群（王墓山古墳）整備事業の一環として、香川大学農学部の吉田重幸教授に分析をお願いし御教示頂いた資料である。

2. 出土遺物

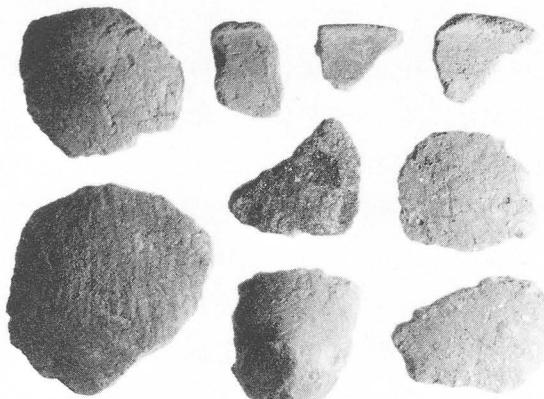
安造田古墳の発掘調査によって確認された遺物はその出土位置から、墳丘から出土したものと横穴式石室内から出土したものに大別し、さらに横穴式石室内を玄門部・羨道部・閉塞部・開口部に細分した上で、その遺物の製作時期や遺存状況等から分類を試みた。

① 弥生土器・石器

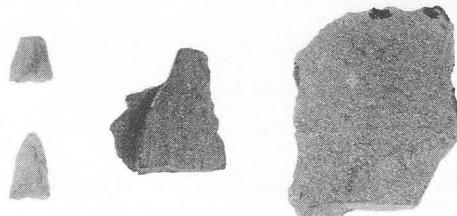
墳丘及び版築土層確認のためのトレーナーを掘削した際に、表面の腐食土や版築土層中から多量の弥生土器をはじめ石鏃や石包丁片等の石器が出土している。土器は殆どが表面に荒い叩き目を持つ小型の甕の破片であり、底部や口縁部の形態から弥生時代後期末頃の所産と見られる。

墳丘の版築土として使用されている土は古墳築造作業の最初の段階で削り出された地山の花コウ土であり、土壌改良作業等もこの場所で行われたと考えられるので、これらの遺物は当初からこの周辺に散布していたものと考えられる。

現に周辺の果樹園や畑を歩くと同様の遺物が多数散布しており、周辺に弥生時代後期頃の何等かの遺構が存在しているものと推定される。



第16図 墳丘出土土器(弥生時代)



第17図 墳丘出土石器(弥生時代)

②須恵器・土師器・埴輪

本墳の副葬品として確認された遺物は、横穴式石室内から出土した須恵器・土師器等の土器類をはじめ、武具・馬具・工具類等の鉄器、耳環、ガラス製品など多種多様である。

須恵器の形態的特徴を見ると6世紀後半の初産と見られるが、その中にはやや古いものと新しいものに分類可能な器種もある。一時期の副葬品としてとらえられる範囲内の時期差ではあるが、追葬が行われた可能性も考えておきたい。

また、後世に持ち込まれた土器類も数点確認されている。

須恵器は完形品・破片共に点数が非常に多かったが、出土時にその状況等から同一個体であるものは大半が判別できており、整理・接合作業は比較的容易に行うことができた。また、復元作業後に破片は余り残らず、確認された遺物数が本来の数に近かったものか、若しくは完形で持ち去られたものがあるのであろうと推定される。

次頁以降の出土遺物実測図及び巻末の写真に示した番号は、前項の遺物出土状況実測図に示した番号と全て一致する。以下、各遺物について器種ごとに簡潔に紹介する。

1～6・8～13は壺蓋、7・14～20は壺身であるが、出土した須恵器全体の量からすれば壺の数は以外に少ないようと思われる。

21～24は高壺である。

25・26は台付き鉢であるが、25は珍しい形態であり胎土・焼成とも他の遺物と異なる。

27は鉢である。

28～32は透かしを持つ長脚の高壺であり、28のみ身部が深く櫛目の模様を持つ。

33～41は有蓋高壺の蓋であるが、37は欠損部分に煤が付着しており、灯明皿に転用された痕跡を残している。再利用された時期は不明であるが、開口部からの出土であり、中世頃の侵入者の手による可能性がある。42～47は有蓋高壺の身部である。

48～50は提瓶である。肩部の把部はいずれも退化が進んでいる。

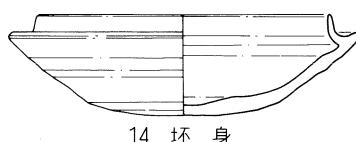
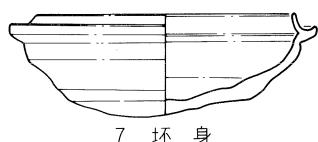
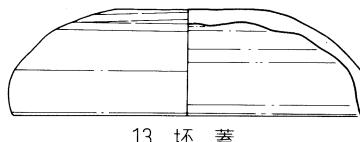
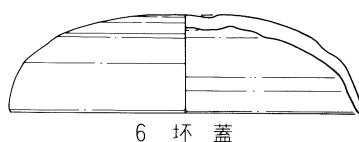
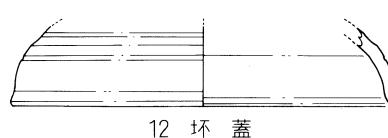
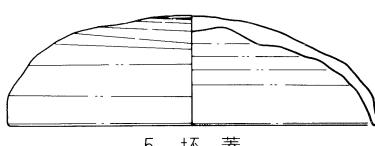
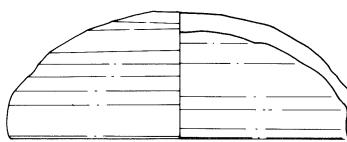
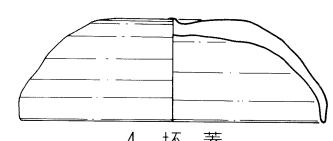
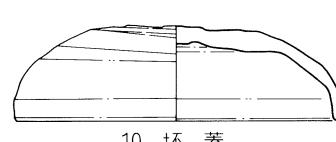
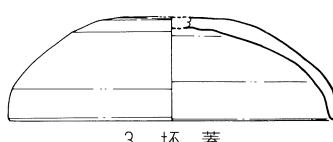
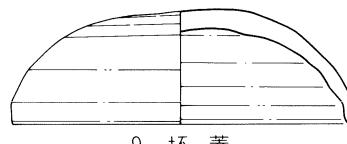
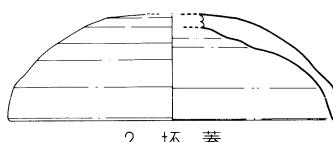
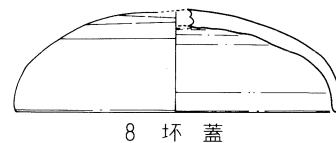
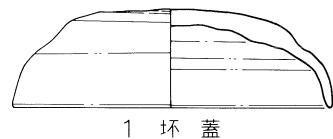
51は壺であり、底部に直線状のヘラ記号を持つ。

52～54は台付長頸壺である。他と形態が異なる52の口縁部にはヘラ磨き状の調整、体部にはヘラによる連続刻文の装飾が認められる。また脚部に円形の透しがあり、胎土・焼成とともに他の遺物とは異なる。

55は甕である。

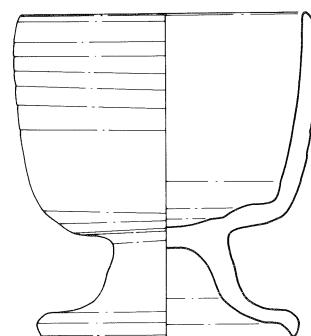
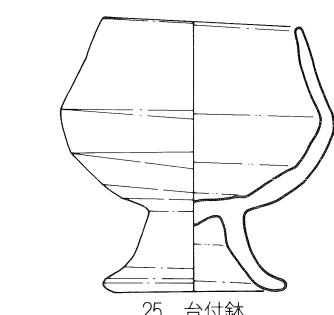
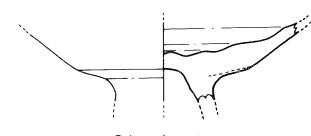
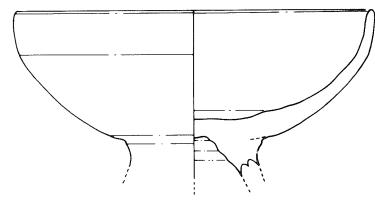
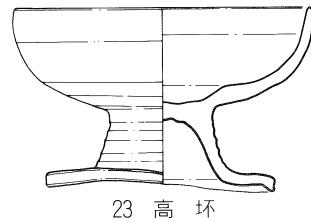
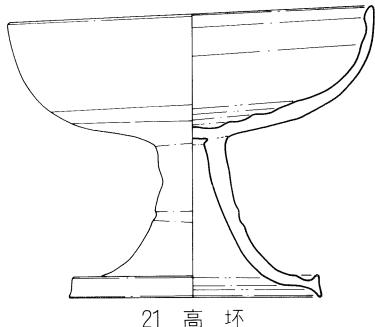
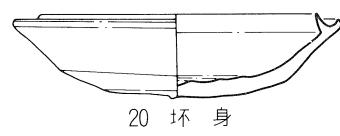
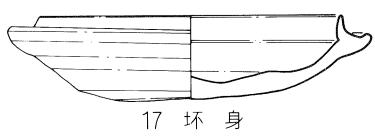
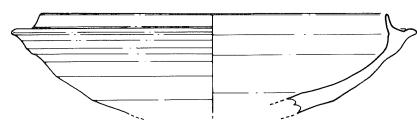
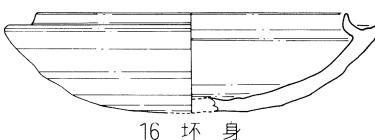
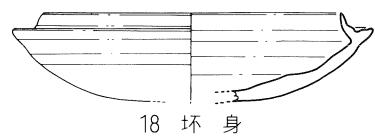
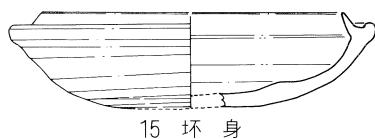
56・57は短頸壺の蓋と思われるが2点の形態は異なり、57にはZ形のヘラ記号が認められる。58～62は短頸壺であり、58の肩上部から頸部にかけて（3本の平行線と交わる直線）と59の頸部にそれぞれヘラ記号（鋸歯状文）が認められる。

63～67は平瓶であり、65の肩部にはコの字形のヘラ記号が認められる。67の底部付近にも丸いヘラ痕が認められるが、これは頸を付ける際の目印とみられる。しかしながら頸は



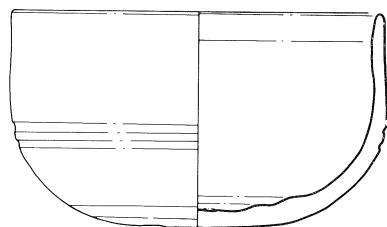
0 10cm

第18図 出土土器実測図①

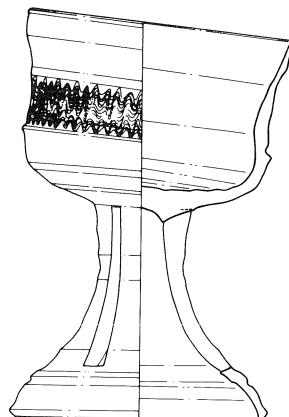


0 10cm

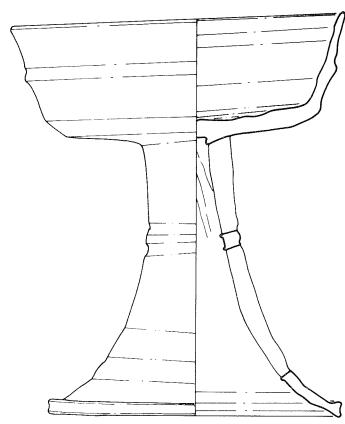
第19図 出土土器実測図②



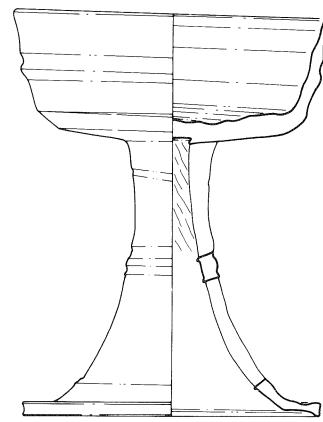
27 鉢



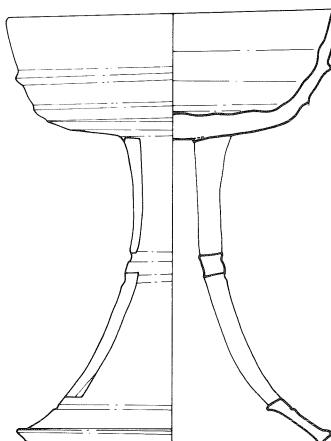
28 高 坏



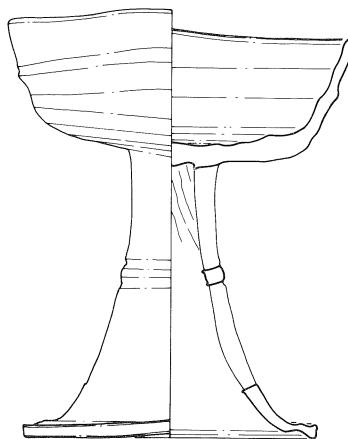
29 高 坏



30 高 坏



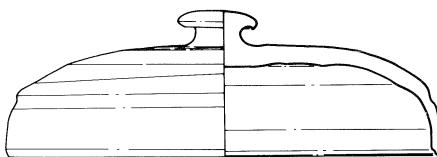
31 高 坏



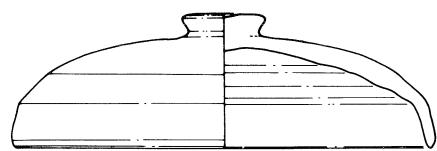
32 高 坏

0 10cm

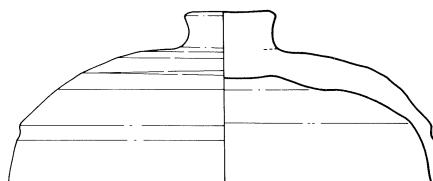
第20図 出土土器実測図③



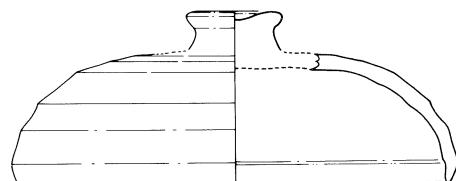
33 高壺の蓋



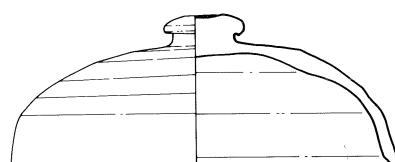
38 高壺の蓋



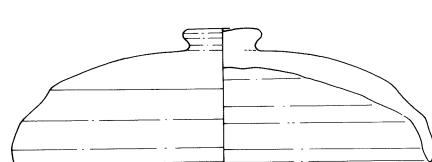
34 高壺の蓋



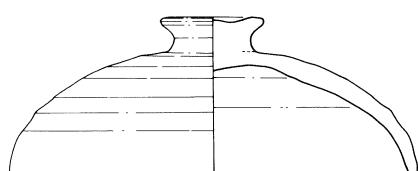
39 高壺の蓋



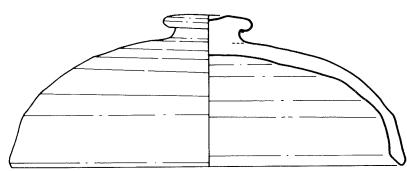
35 高壺の蓋



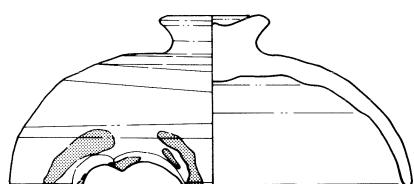
40 高壺の蓋



36 高壺の蓋



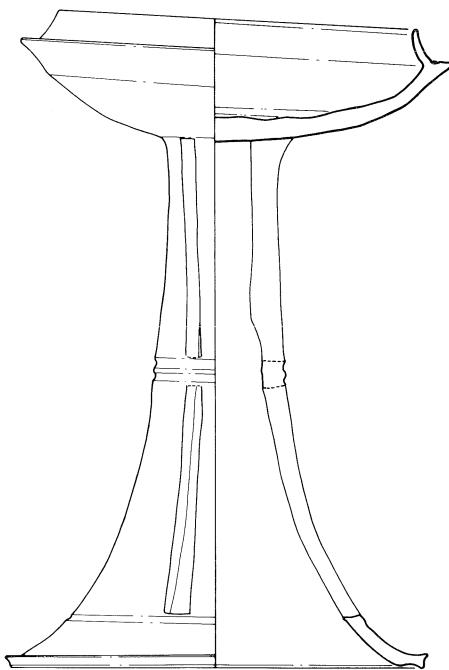
41 高壺の蓋



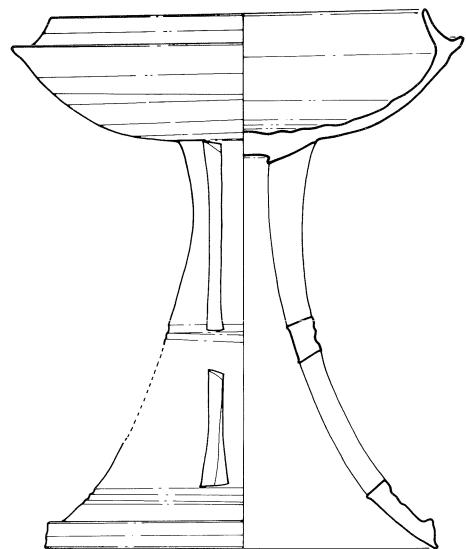
37 高壺の蓋



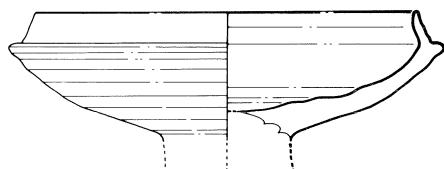
第21図 出土土器実測図④



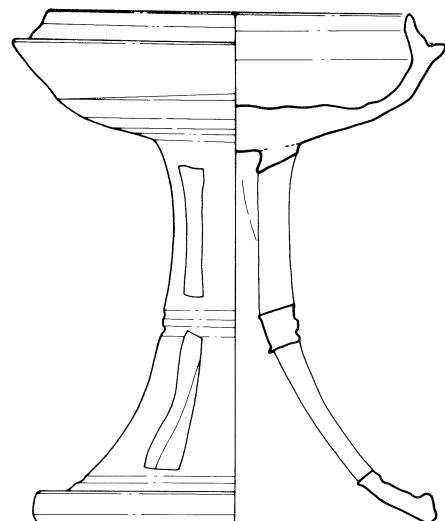
42 有蓋高坏



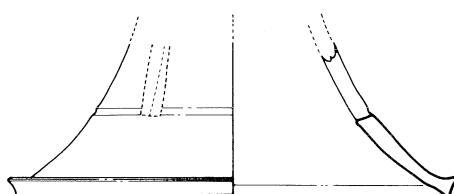
44 有蓋高坏



43 有蓋高坏

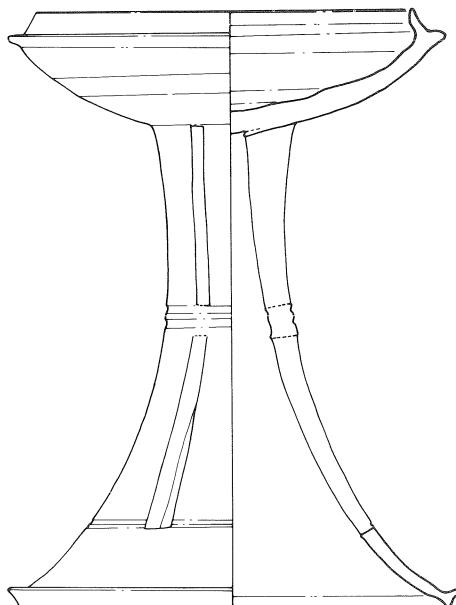


45 有蓋高坏

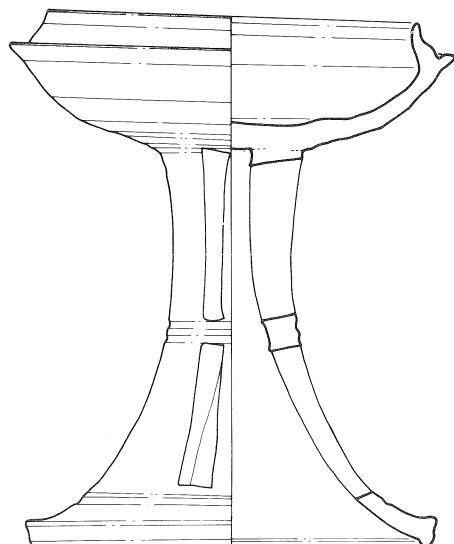


0 10cm

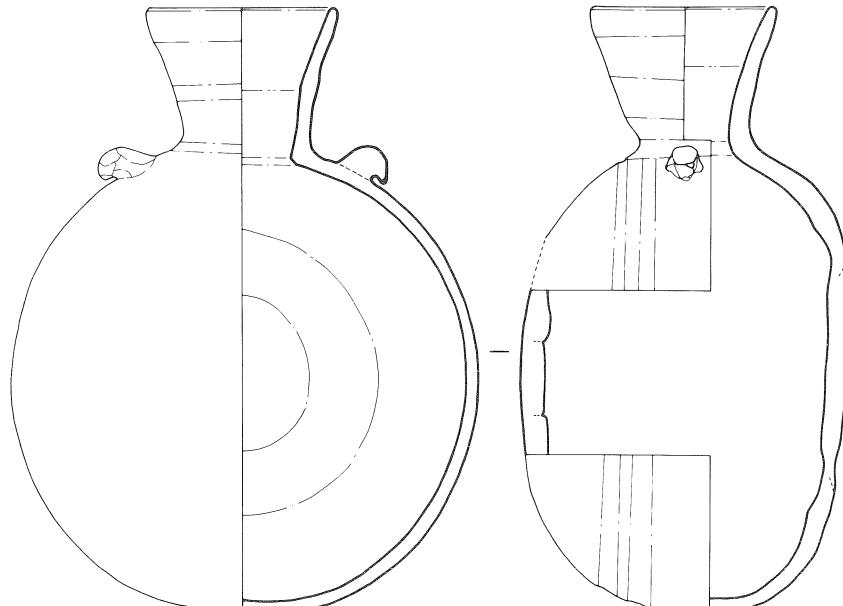
第22図 出土土器実測図⑤



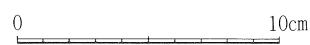
46 有蓋高壺



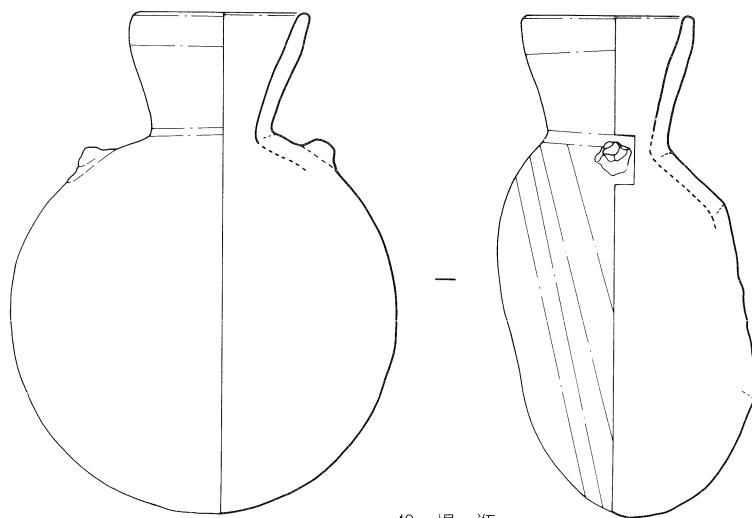
47 有蓋高壺



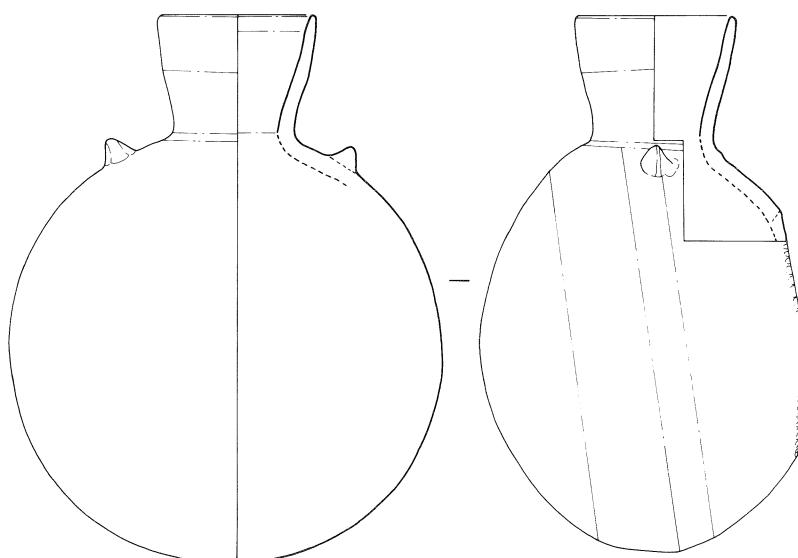
48 提瓶



第23図 出土土器実測図⑥



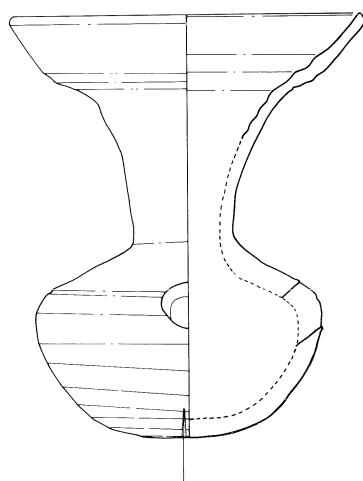
49 提瓶



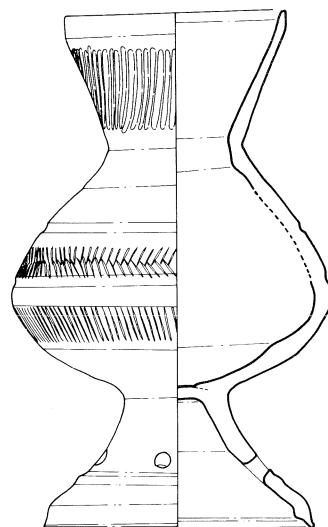
50 提瓶



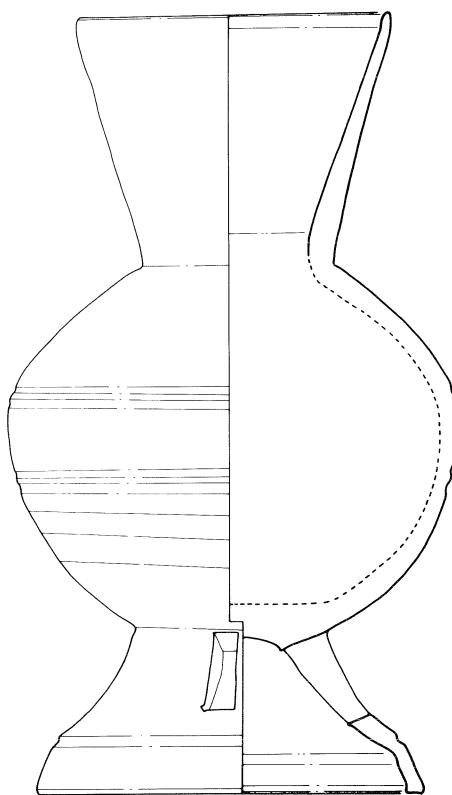
第24図 出土土器実測図⑦



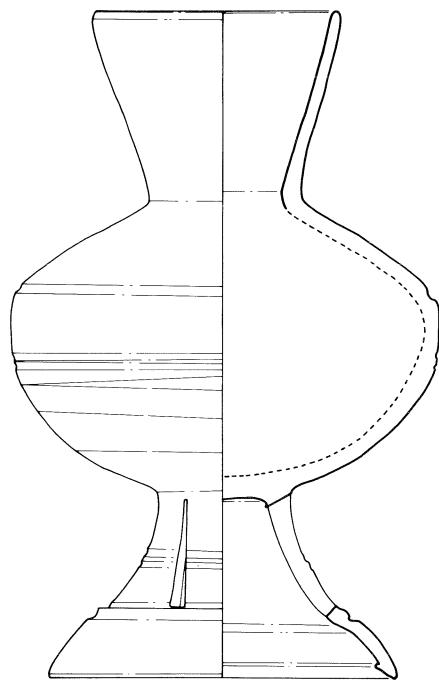
51 鏽



52 台付長頸壺



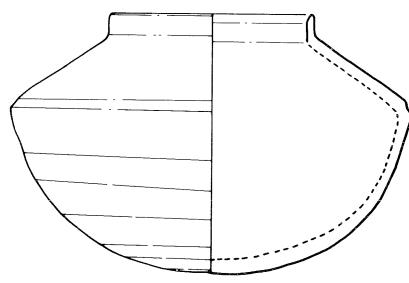
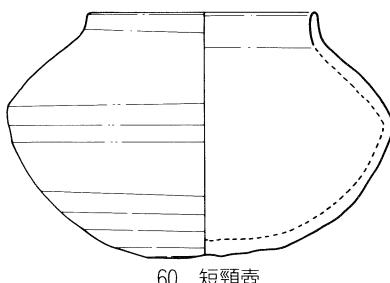
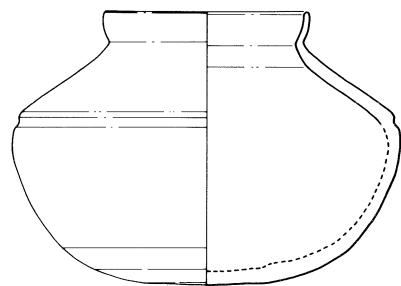
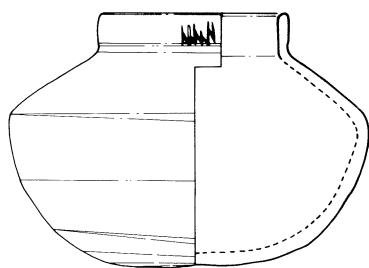
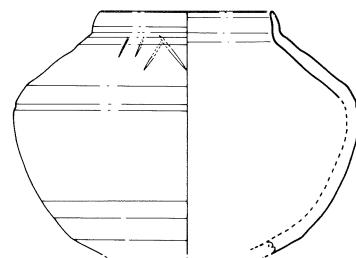
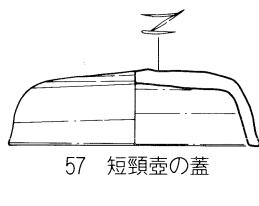
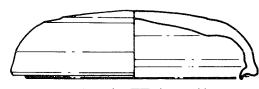
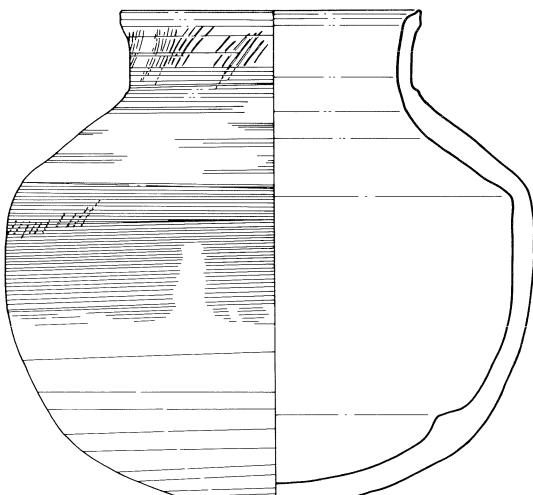
53 台付長頸壺



54 台付長頸壺

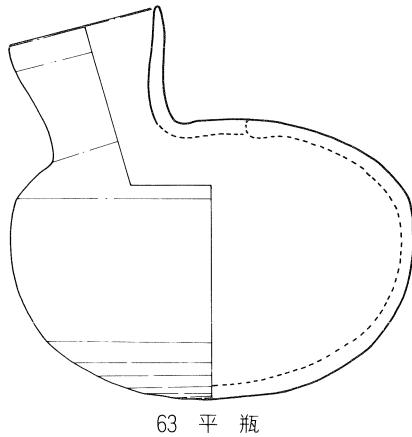
0 10cm

第25図 出土土器実測図⑧

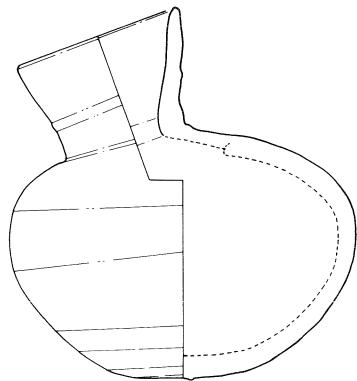


0 10cm

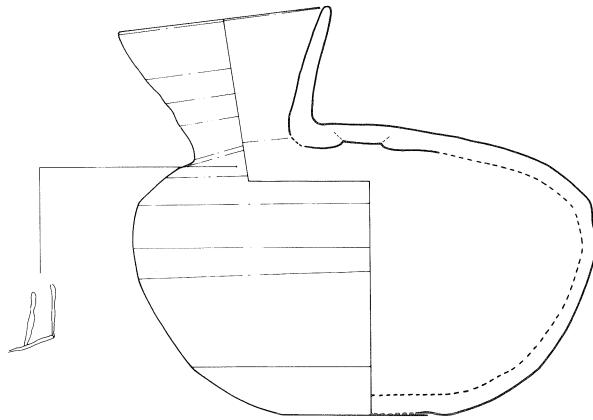
第26図 出土土器実測図⑨



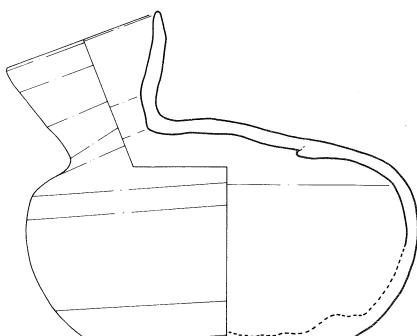
63 平 瓶



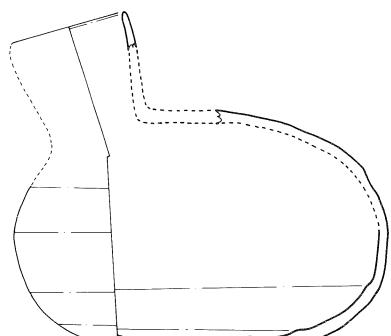
64 平 瓶



65 平 瓶



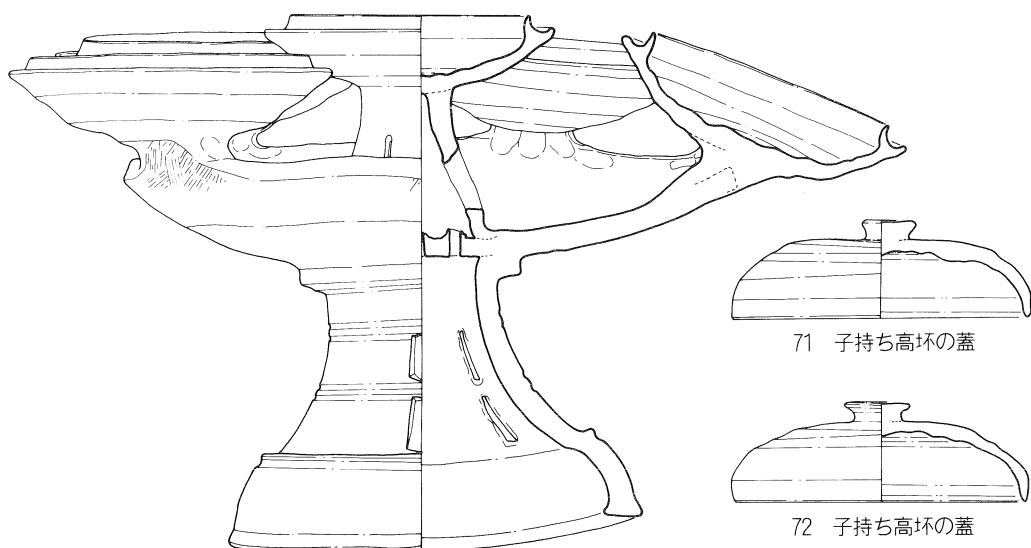
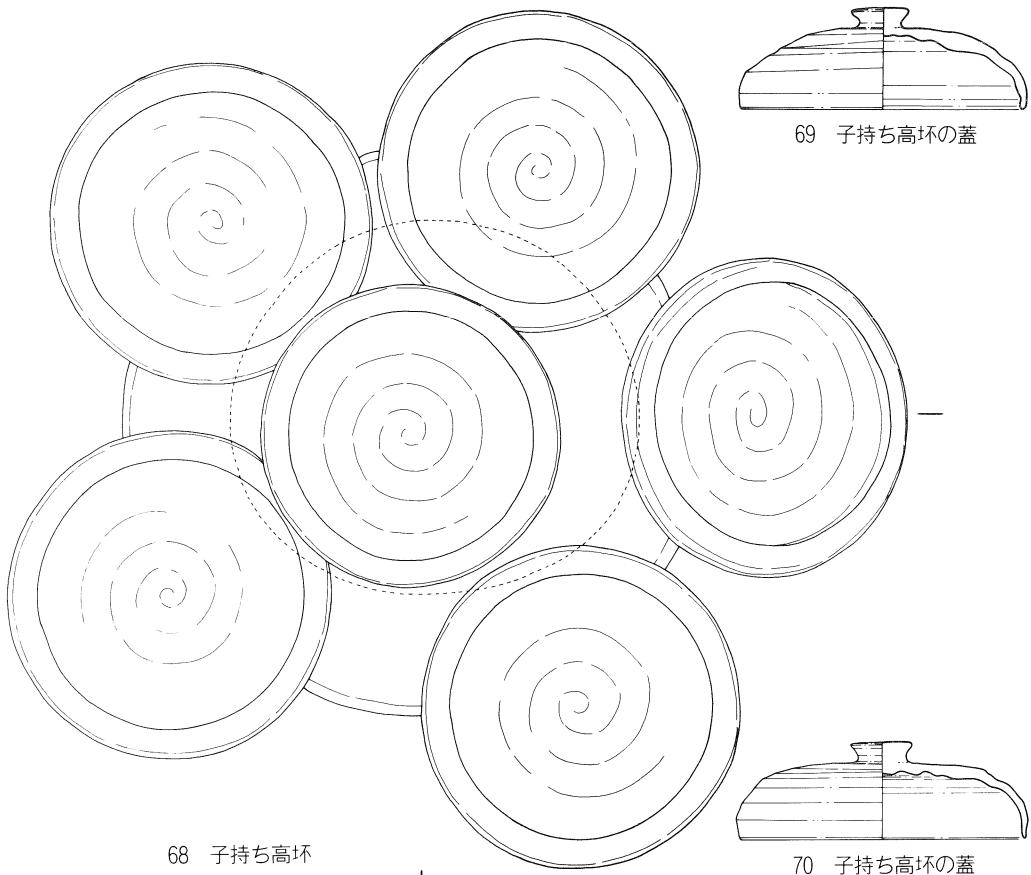
66 平 瓶



67 平 瓶

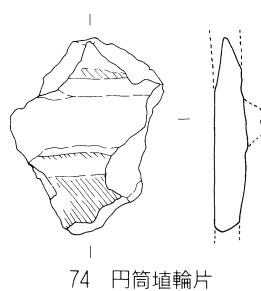
0 10cm

第27図 出土土器実測図⑩

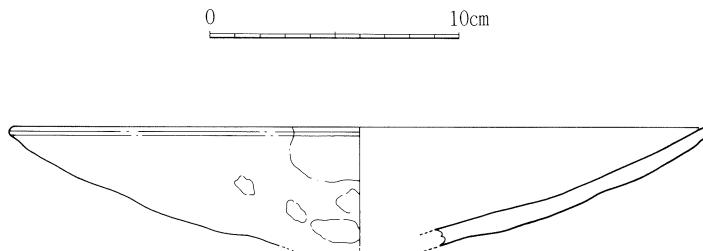
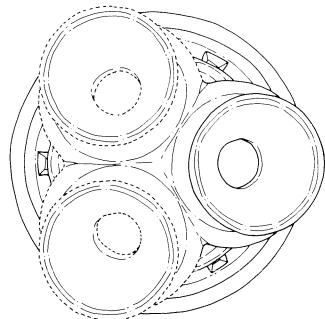


0 10cm

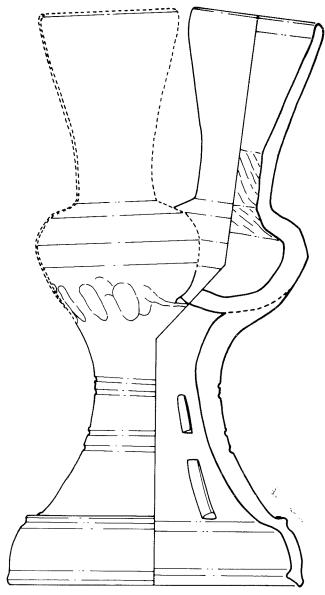
第28図 出土土器実測図①



74 円筒埴輪片



75 高坏(土師器)



第29図 出土土器実測図⑫

73 台付き三連壺

反対側に付けられており、体部は通常と上下逆に用いられている。

68は子持ち高坏であり蓋も4点(69~72)出土しているが、県下での出土例は少なく、今回のようなほぼ完全な形での出土例はない。

73は台付三連壺であり、上部の壺は一部分しか出土していないが、残存部の状況からこのような特異な形態であることが判明した。胎土・焼成は子持ち高坏(68)と同一であり、脚部の形態も酷似している。同一工房の製品と見られる。

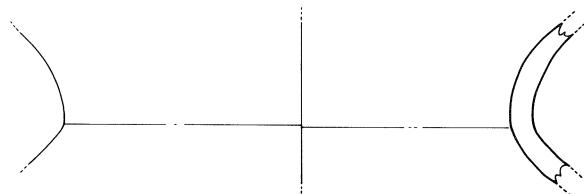
74は羨道部埋土上層から出土した円筒埴輪片である。埴輪はこれ1点しか出土しておらず、墳丘の調査でも全く確認できていないので、本墳に伴うものかどうかは疑問である。

75は須恵器群と伴に出土した唯一の土師器であり、高坏と思われるが、身部と脚部が部分的に出土しただけであり全容は不明である。

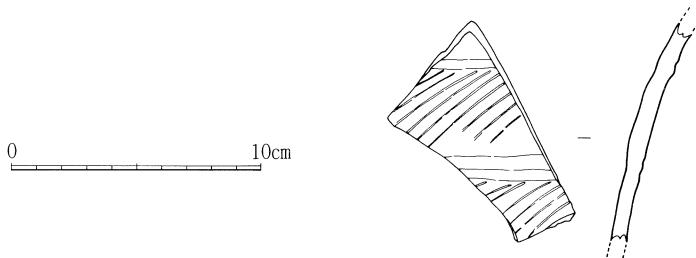
須恵器は墳丘上からも多数出土しているが大半は大型の甕の破片であり、主に開口部周辺から斜面下にかけて散布していた。分類してみると3種類以上になるが、大型の甕は石



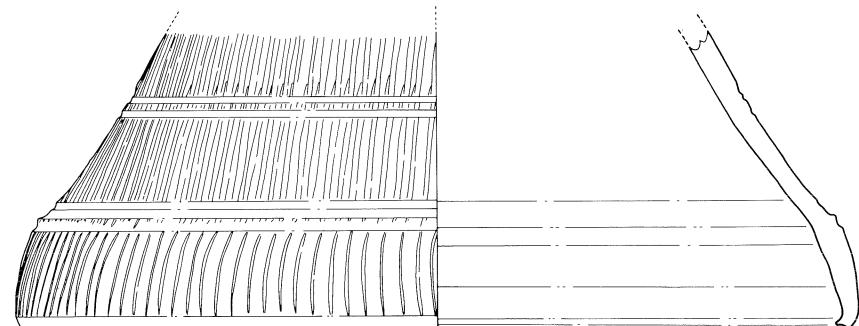
76 大甕の口縁部



77 大甕の頸部

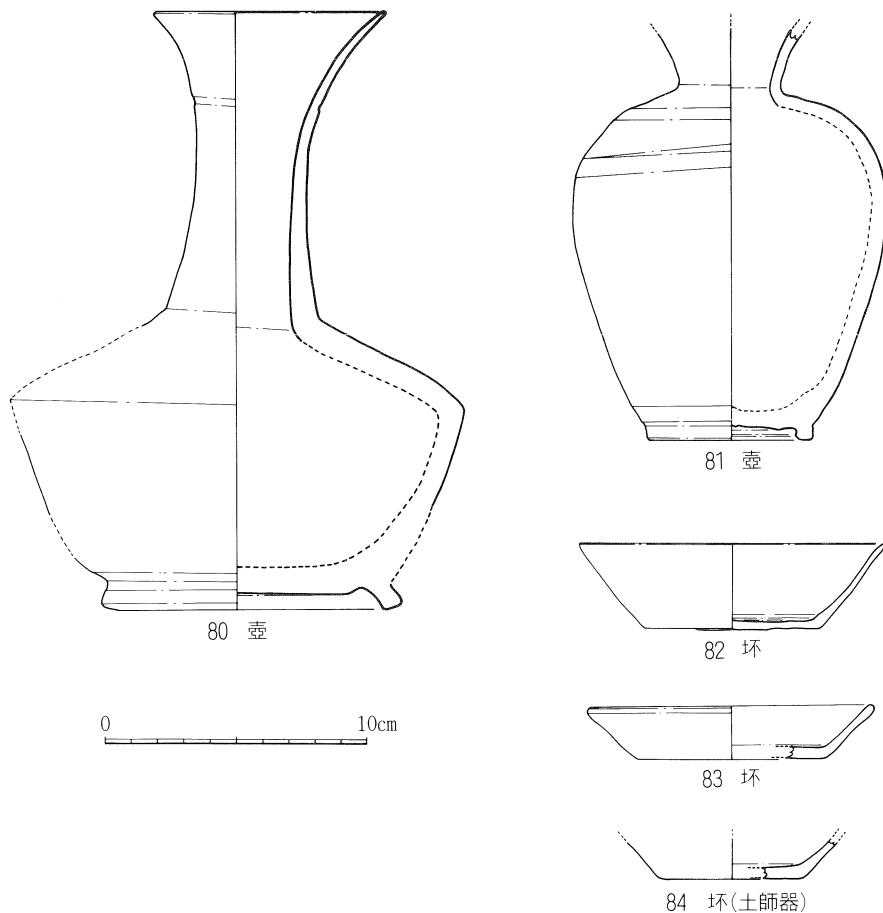


78 大甕の口縁部片



79 器台の脚部

第30図 出土土器実測図⑬



第31図 出土土器実測図⑭

室内部では小片が数点出土しただけであり、当初から墳丘に置かれていたものである可能性が高い。76～78は甕の口縁部及び頸部であり、79は内面調整等から器台の脚部であると思われる。

80～84は本墳本来の埋葬に伴うものではなく、後世に持ち込まれたものである。

80は玄室奥に置かれていた壺である。破片を接合した結果、体部には焼成時の火膨れによる亀裂が生じていたようであり、本来の容器としての用途を果たしていたとは考えられない。形態から8世紀前半頃の所産と考えられる。

81は玄室奥から出土した壺であり羨道部から出土した破片が接合できた。口縁部は失われているが、その摩滅の状態から本墳内に持ち込まれる以前に失われていたようである。破損状況から肩部に人為的に力を加えて破壊された可能性が高い。同時期の遺物、つまり81と共に持ち込まれた可能性が高い遺物として环が3点(82～84)出土している。82・83は須恵器で火襷が認められる。84のみ土師器である。81～84は9世紀前半頃の所産と考えられる。

③ 銀環・ガラス製装飾品

85～91は耳環である。開口部で出土した91のみ全く腐食が認められず、銀箔が完全に遺存している。他の耳環にも黒く酸化した銀箔が部分的に遺存しているものが多く、その状況等から殆どが銀環であったと思われる。

92～99はコバルトブルーのガラス玉である。92～94には不純物が混入されており表面及び内部に白い線が見える。形態は97のみ小玉、他は臼玉である。(98・99は臼玉であるが、遺存状況が悪く粉碎されており詳細は不明である)

100はやや青みがかった透明のガラス製勾玉である。

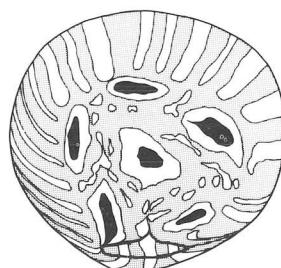
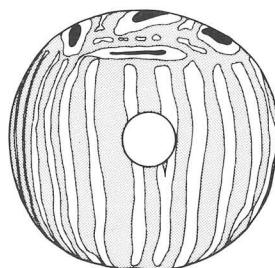
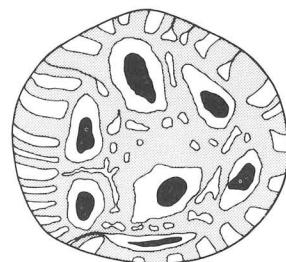
101・102は鼓形のトンボ玉である。101は緑色の本体の最大径部分両端2箇所に乳白色の楕円形斑点が、102は青色の本体の最大径部分両端2箇所に乳白色の勾玉形斑点が認められる。これらのガラス製品は子持ち高杯等と同様に、九州・伊予方面からの影響を色濃く反映している香川県西部地区（母神山古墳群：観音寺市）から多量に出土している資料と酷似している。

103は極めて特異なガラス製品である。各方面の御協力によりモザイクガラス玉と呼ばれる練り玉であることが判明した。

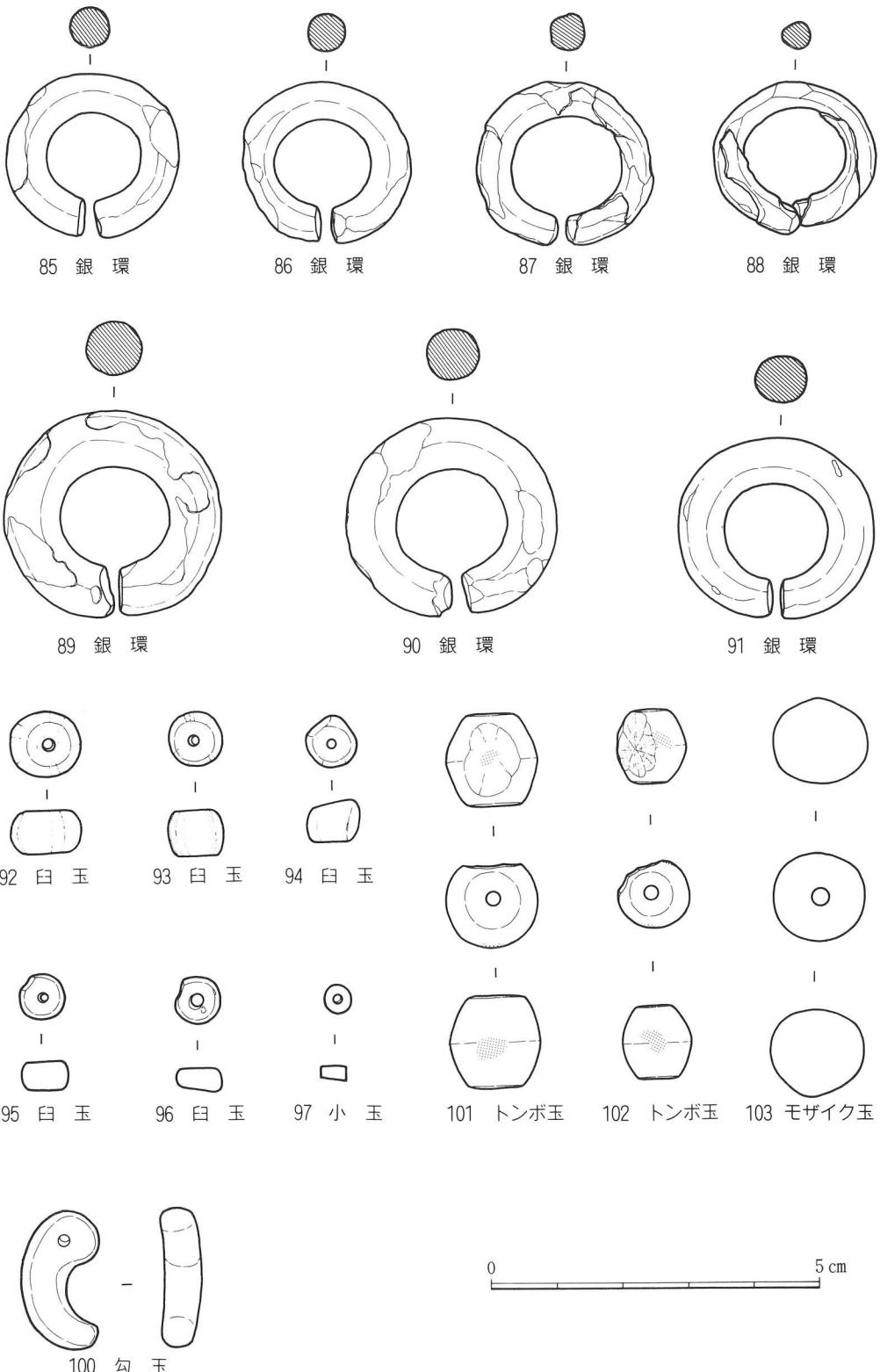
モザイクガラス玉 この遺物は、玄室礫床上面の遺物と小礫を除去した後に、その下に敷き詰められていた扁平な河原石の実測作業と併せて実施した礫床下の転落遺物の確認作業の際に、玄室のほぼ中央部で発見されたまことに美しいガラス玉である。

美しくも奇異な模様を呈しているが、一見してその製作技法が見取れる。まず赤色ガラス棒を中心にして白色ガラスを巻き、その上を青色ガラスで覆い、表面に白色ガラスで縞模様を施した円筒形の素材を造り出す。この断面に見られる同心円图形が模様の最小単位となっている。

更にこれを熱しながら細く伸ばし、必要な長さに切断し、これを7本束ね溶かし付け複雑な模様を造り出している。従って、金太郎飴のように内部に同じ模様が連続しているため、何処で切断しても同じ模様が現われるようになっている。そして最後に適当な大きさに切断したものを熱して丸め、柔かいうちに細い棒を押し当て糸通しの孔を穿ち、最後に研磨し仕上げている。



103 【最大径：1.45cm】
第32図 モザイクガラス玉実測図



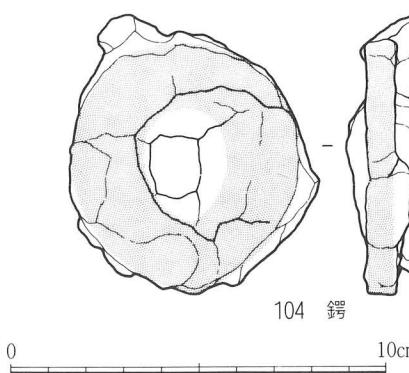
第33図 出土装飾品(銀環・ガラス製品)実測図

この技法が、複雑な模様の玉の量産を目的としたものであるならば、他にも出土例があるであろうと考え類例を探したが、丸亀平野下流域(多度津町)の盛土山古墳から出土したトンボ玉が全国的に有名であるものの、モザイクガラス玉については国内では発見例が無い。そこで製作地を特定するための非破壊分析について奈良国立文化財研究所と協議したが、模様が複雑であり螢光X線の照射範囲を限定することが困難・変色の可能性があるということから科学分析は断念した。しかしながら、特異な製作技法等が外見から判別できることから、外国の古代ガラスを研究されている山陽学園短期大学の谷一尚先生にお伺いしたところ、黒海北岸のケルソネソス(2~3世紀)やハンガリーのバラトンベレニー(3~4世紀)の学術調査で類似資料が発見されていることを御教示いただき、報告資料等もお送りいただいた。

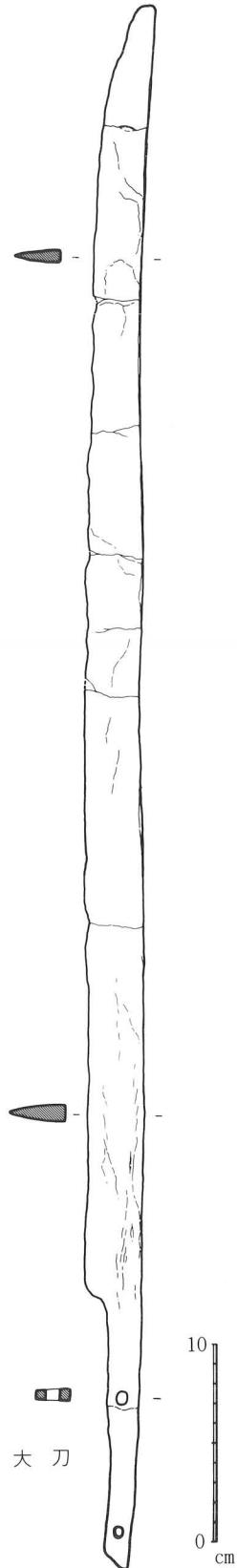
搬入された遺物であることは予測されてはいたが、結果に驚嘆すると同時に、本墳の存在価値について再検討する必要が生じた。

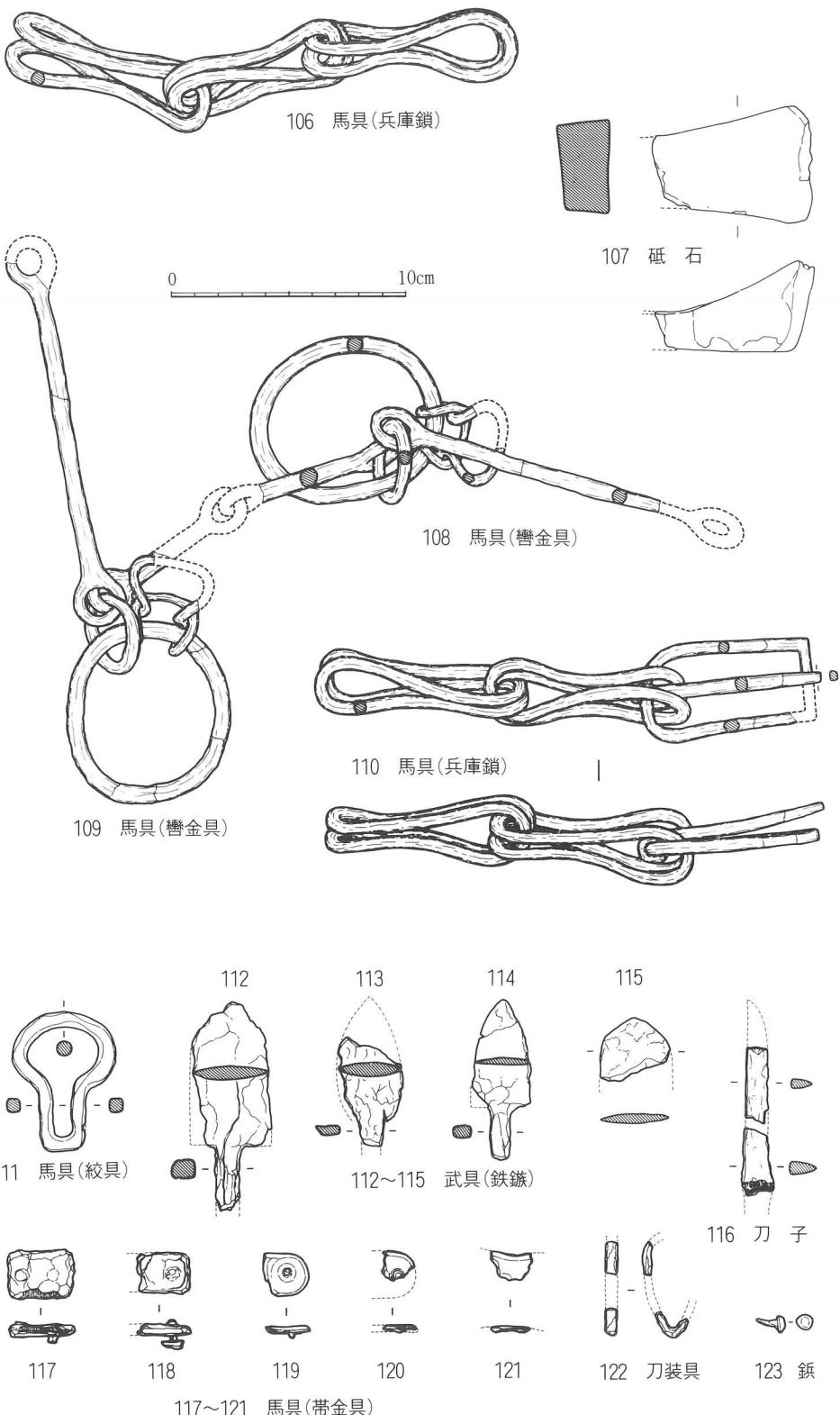
④ 武具・馬具・その他

羨道部調査の際に多数の武具・馬具類が確認されている。玄室から運び出され羨道に積まれた土器群と共に出土した鐔(104)・刀(105)及び轡金具(108・109)や鐙軛(兵庫鎖:106・110)・帶金具(119)等である。開口部からも較具(111)が出土しているが、石室内の遺物と比べると酸化は進んでいない。石室内の埋土は土壤改良された黒色版築土が多く、開口部周辺の埋土は地山と同様の花コウ土であったことから、銀環(91)と同様に、早い時期に石室から運び出されたことで塩分を多く含む土の影響が少なかったことが考えられる。また横穴式石室下層埋土のふるいがけにより、刀子・帶金具・鉄鎌・刀装具等も出土している。



第34図 出土鉄器(刀・鐔)実測図





第35図 出土鉄器(馬具・武具・工具)実測図

これらの鉄器は出土状況等を記録した後に取り上げ、直ちに香川県工業技術試験場に持ち込みX線写真撮影を実施した。その結果、鎧がひどく外觀から馬具（辻金具）と思われていた遺物が実は鎧であり、その縁に銀象嵌による装飾が施されていることが確認された。また、他の鉄器についても鎧の張らみはひどいものの、保存状況が良好であることが確認できた。

鎧・刀・轡金具・鎧靭については、X線写真撮影の結果を受けて、奈良元興寺文化財研究所に保存処理を委託し、他の鉄器については、善通寺市立郷土館で処理を行った。

実測図のうち、105・106・108・109・110についてはX線写真を基に作図した。108・109は出土状態での図化である。

⑤人歯について

安造田古墳から出土した人歯の鑑定結果

岡山大学歯学部口腔解剖学教室教授 小田嶋梧郎

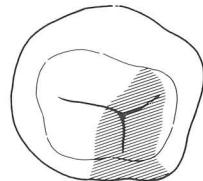
右下顎第二小白歯と思われるが、咬合面の咬耗が強度で、咬頭頂および各咬頭頂から発する三角稜（三角降線）は殆ど認められず、よって溝も不鮮明である。

歯冠の大きさ、特に咬合面の形態、並びに歯冠の内面観（溝の深さ）から上記の歯と推察する。

(平成3年3月12日鑑別)



第36図 出土人歯



第37図 出土人歯実測図

ま と め

満濃町で初めて本格的な埋蔵文化財の発掘調査が実施された。対象は1基の小規模な後期古墳ではあったが、今後、町の文化財行政の対応を大きく変えるような素晴らしい成果が得られた。

石室に盗掘の痕跡は認められたが、石室及び副葬品の遺存状況は極めて良好であり、県下では珍しい子持ち高壺・台付三連壺を含む70点にも及ぶ須恵器、そして土師器、直刀・鎧・鉄鎌・馬具などの鉄器、銀環・ガラス製装飾品などの優れた工芸品が多数出土した。特に、X線写真撮影によって銀象嵌による装飾の存在が確認された鎧や、国内で初めて出土したモザイクガラス玉などは、本墳の見事な玄門構造及び中津山周辺に分布する後期古墳の形態等から、この地にこれまで余り知られていなかった九州文化系勢力が存在していたことを如実に示す資料として注目されるばかりでなく、近隣や畿内勢力との関わりを考える上で極めて重要である。また、満濃町史にも「園城寺に伝わる……忍尾別君は伊予から讃岐に移り、因支首の長女を娶って那珂郡の南部を開拓し、伊予の神野郡にちなんで神野郷と名付け神野神社を祀った」との記載があり、古代、当地の人々が西方から移住してきたことを示している。

また、今回の調査では5箇所で墳丘の断面観察を行ったが、小規模な後期古墳としては極めて丁寧な版築土層に当時の高度な土木技術の一端を垣間見ることもできた。町内にある日本一の溜池「満濃池」は8世紀代に弘法大師が築いたことで有名であるが、当時の豪族の持つ優れた土木技術は、当然のことながら灌漑治水工事等にも活用されていたであろうし、満濃池築堤工事の際にも、この技術を継承していた豪族の末裔の活躍があったであろうことを考えると興味は尽きない。安造田古墳はまさに満濃町の歴史そのものであり、このような地元と密接な繋がりが見える資料は全国的にも数少ないと思われる。

副葬品中のモザイクガラス玉は2～4世紀頃に黒海周辺で制作されたものと見られるが、日本はもとより東アジア全体をみても出土例は殆ど無く、この遺物に対する当時の人々の価値観や搬入経路などについて知る術は無い。しかしながら、同時期の同規模の古墳から比較すれば副葬品の質、量は共に優れており、他のその強固な古墳の築造状況などと併せて、被葬者の性格やその環境などの解明について、大きな期待が寄せられている。

安造田古墳は調査後に破壊される運命にあったが、貴重な調査成果を受け、町負担による公有地化・整備計画が練られている。地方行政にとって開発は大変重要ではあるが、その対象となる文化財についての慎重な調査と判断、できうる限りの保存の努力が必要である。本墳では関係者の多大なご協力とご理解によって、文化財行政が理想的な流れを見せたものと確信している。しかしながら、本墳の出土遺物の分析、被葬者の解明及び中津山周辺に残る貴重な文化財遺産の詳細分布調査・保存等について大きな課題も残された。

版

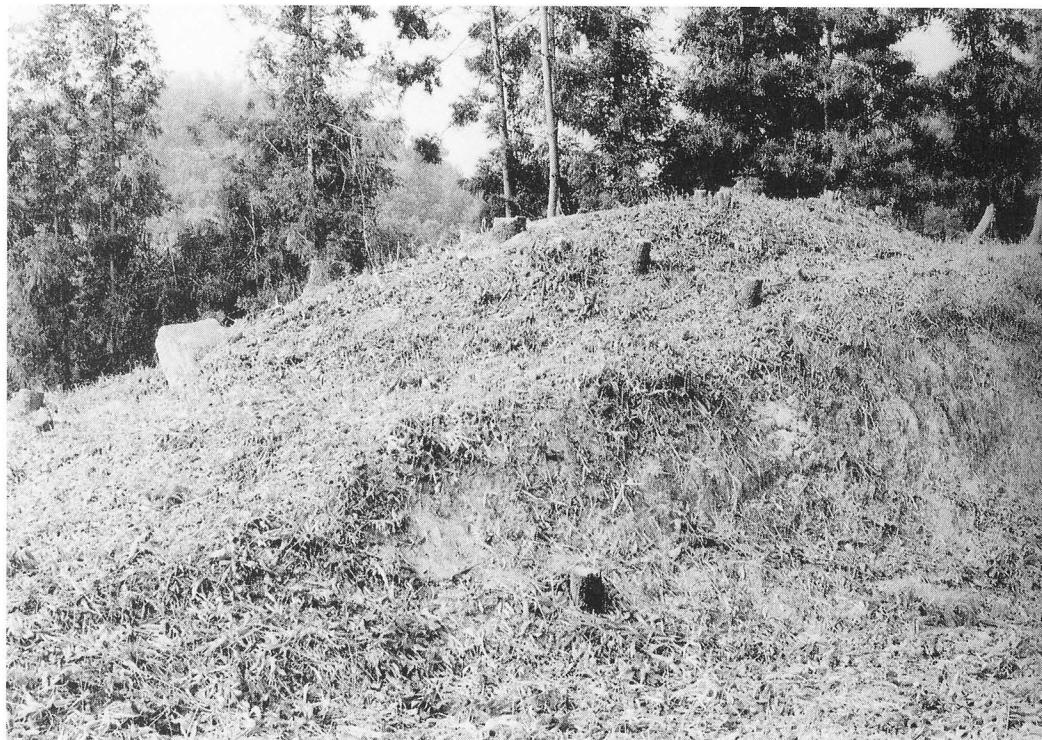
圖



第38図 調査着手前の墳丘遠景（南から）



第39図 調査着手前の墳丘（南から）



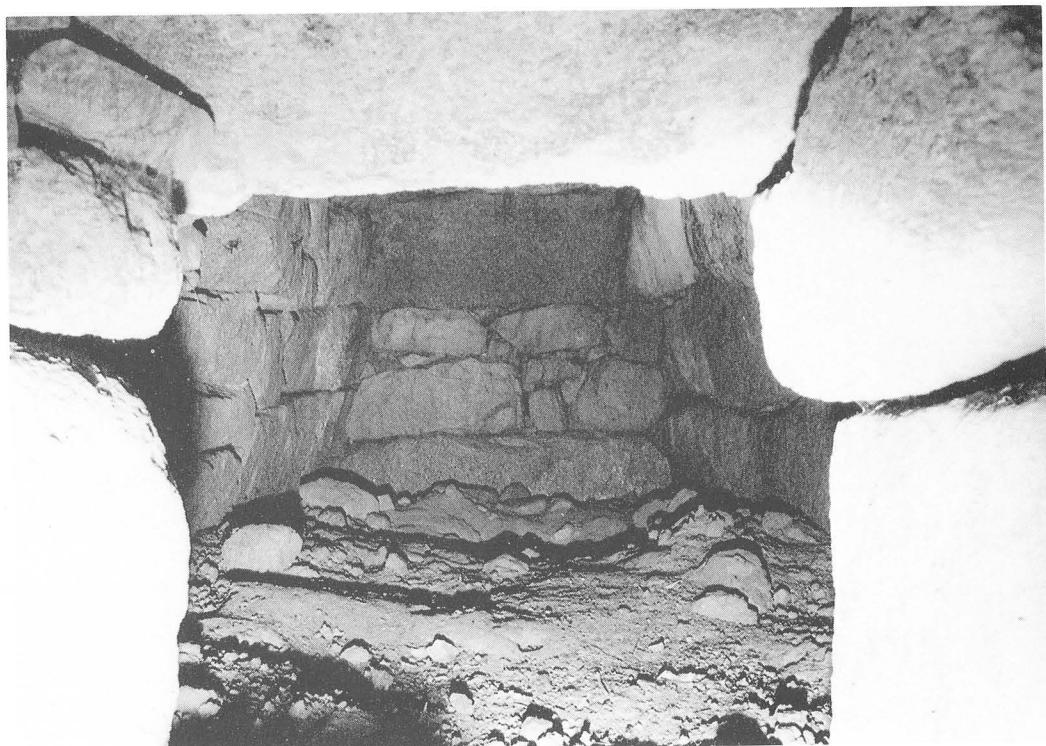
第40図 伐採後の墳丘（南から）



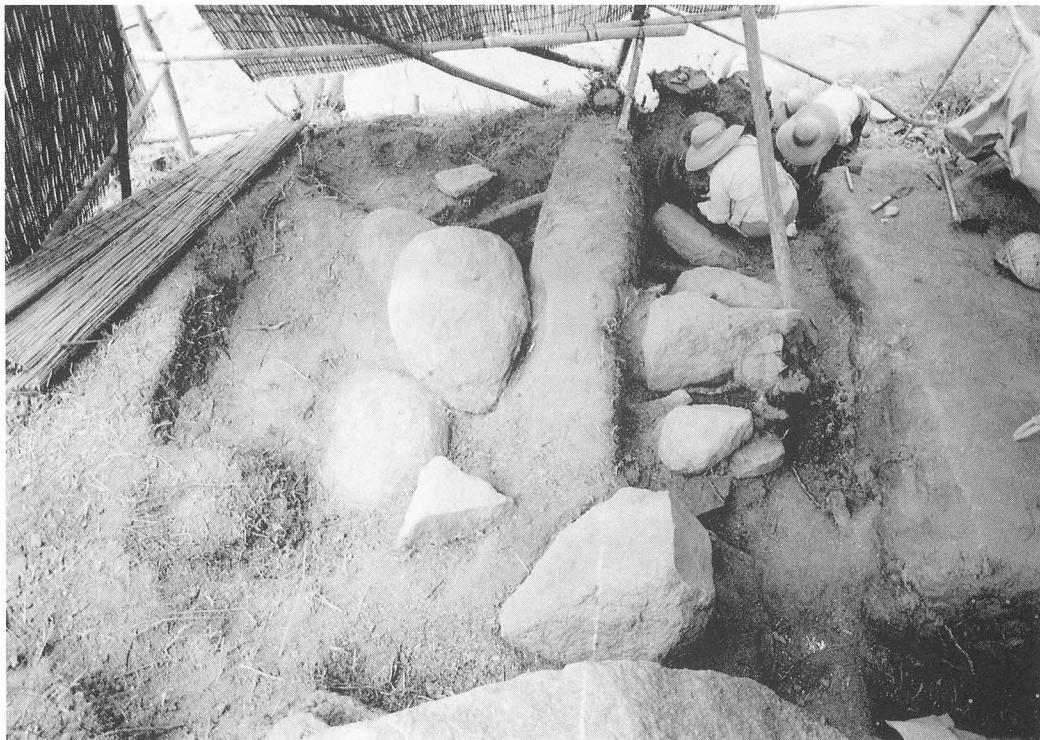
第41図 伐採後の墳丘（西から）



第42図 伐採後の墳丘（東から）



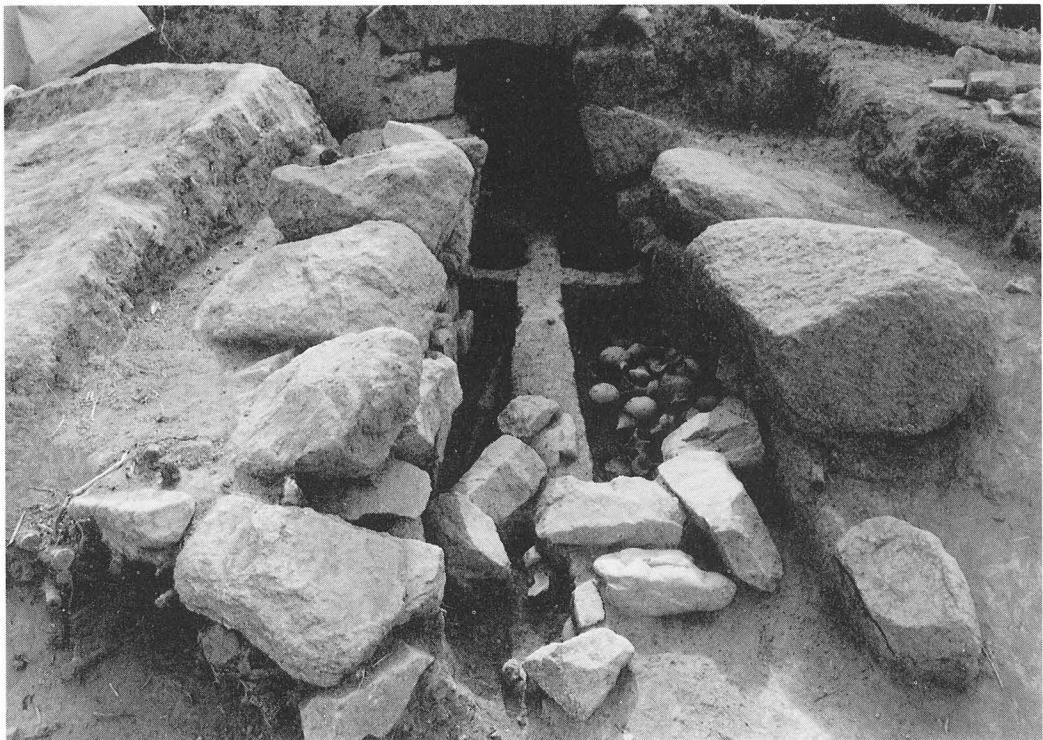
第43図 調査実施前の玄室内部



第44図 羨道部の発掘調査風景（東から）



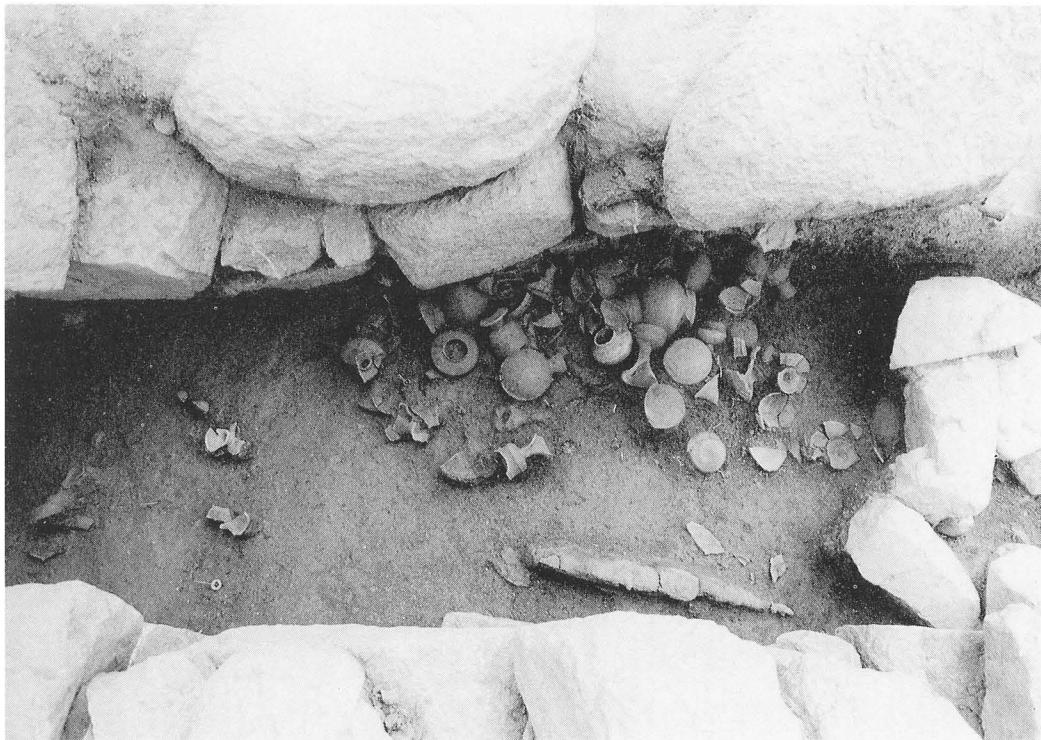
第45図 羨道部の検出状況（東から）



第46図 羨道部の検出状況（西から）



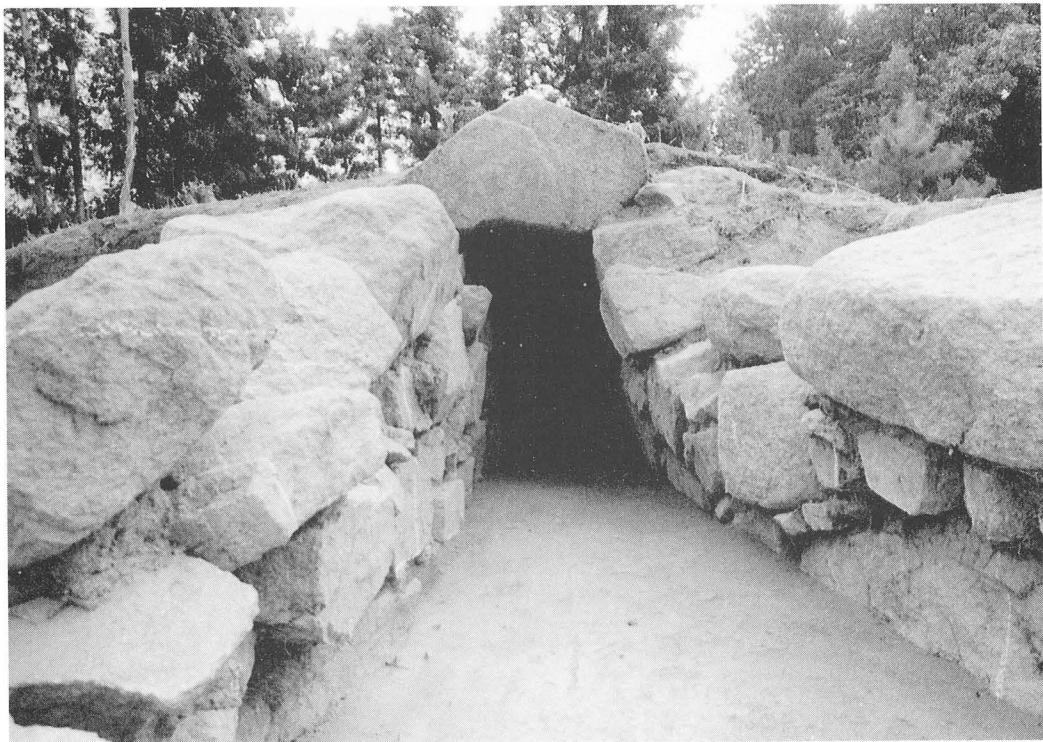
第47図 開口部遺物出土状況（西から）



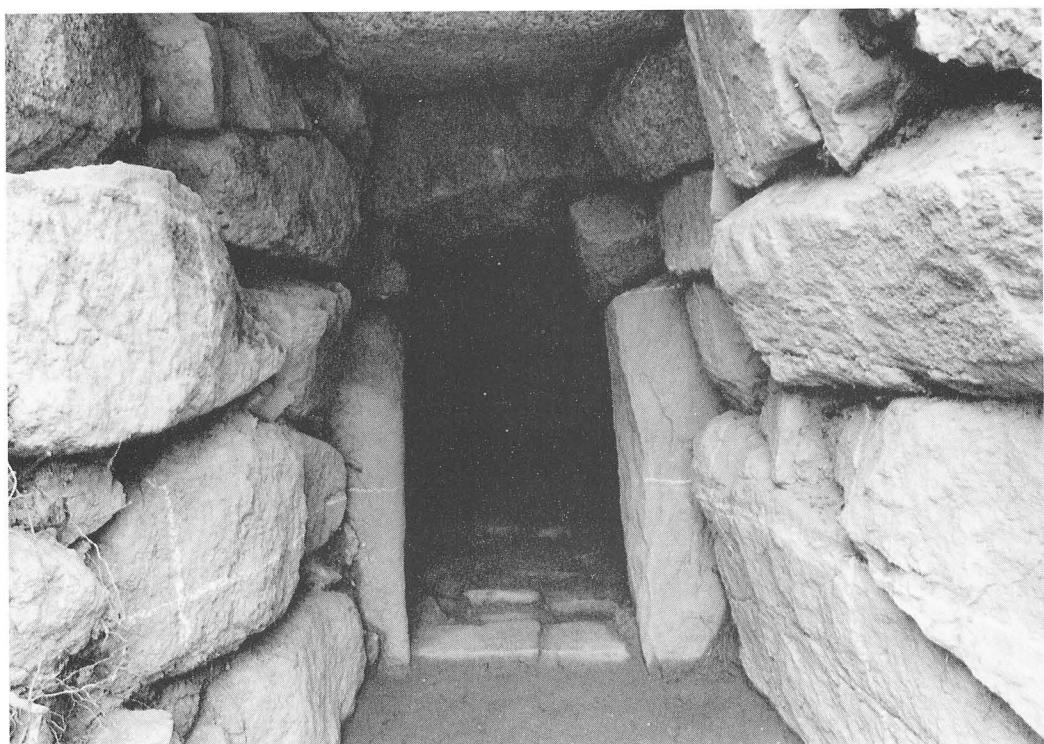
第48図 羨道部遺物出土状況（北から）



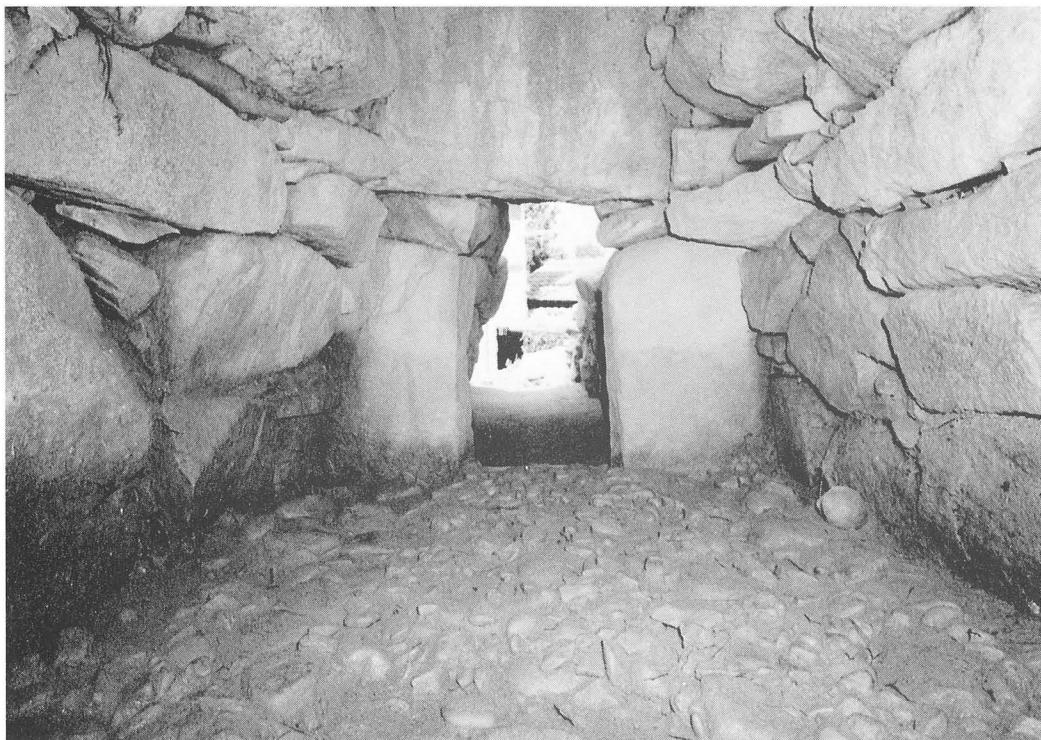
第49図 羨道部遺物出土状況（東から）



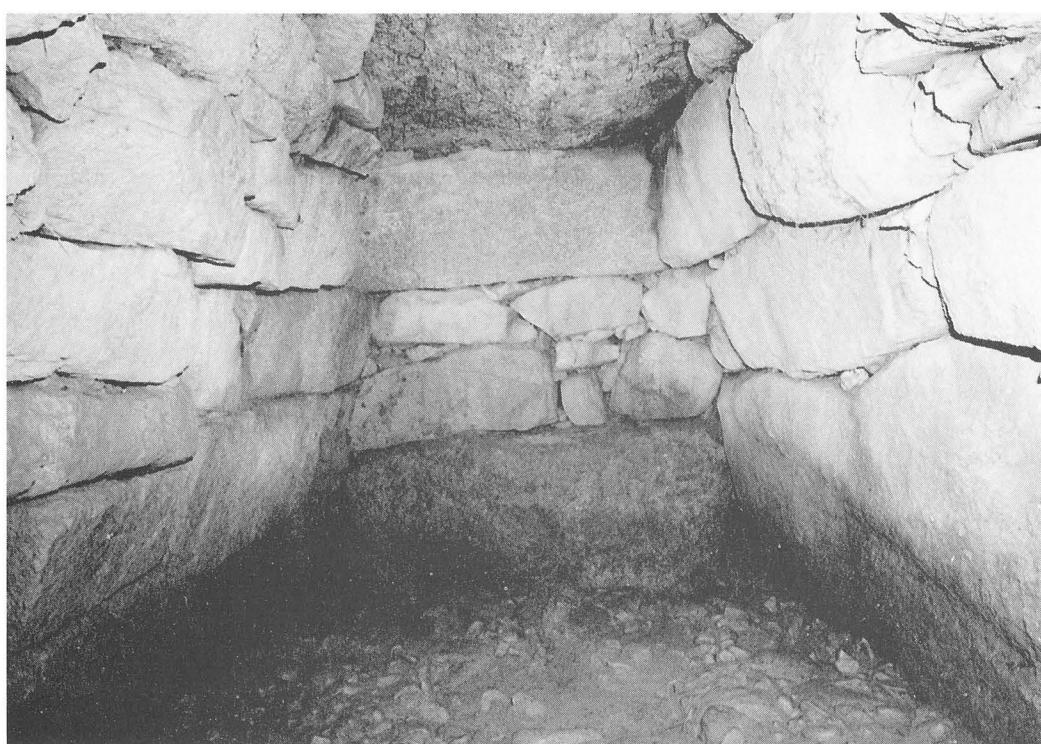
第50図 羨道部完掘状況（西から）



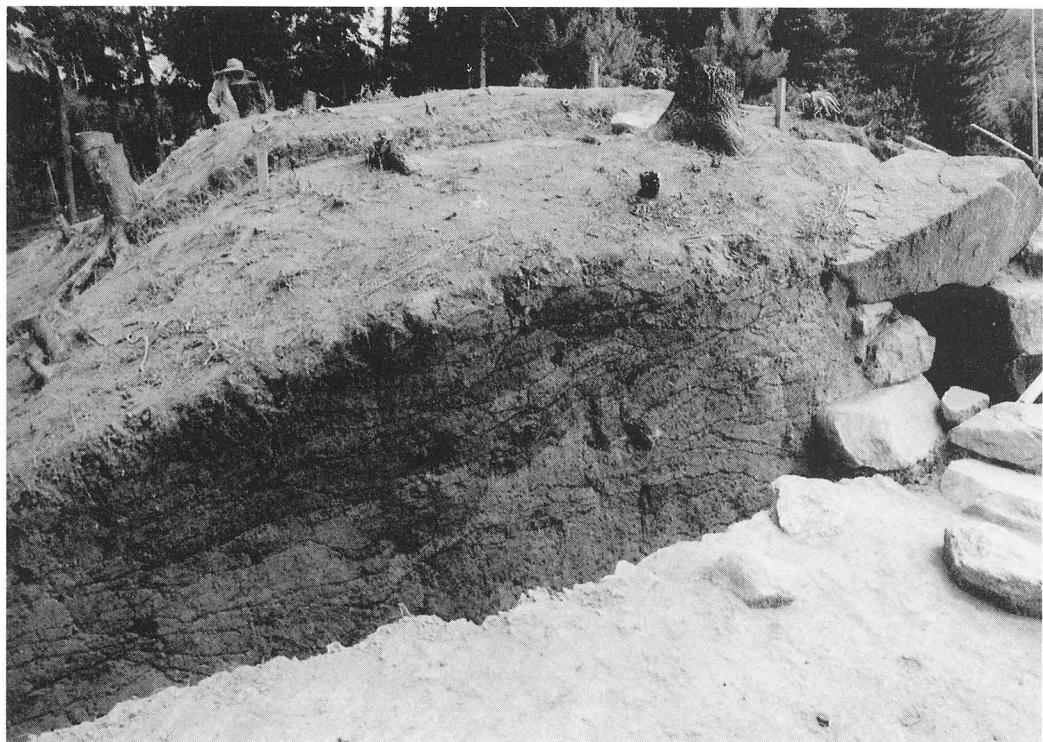
第51図 玄門部完掘状況（羨道部中央から玄室を望む）



第52図 玄室完掘状況（玄室奥から玄門を望む）



第53図 玄室完掘状況（玄門部から奥壁を望む）



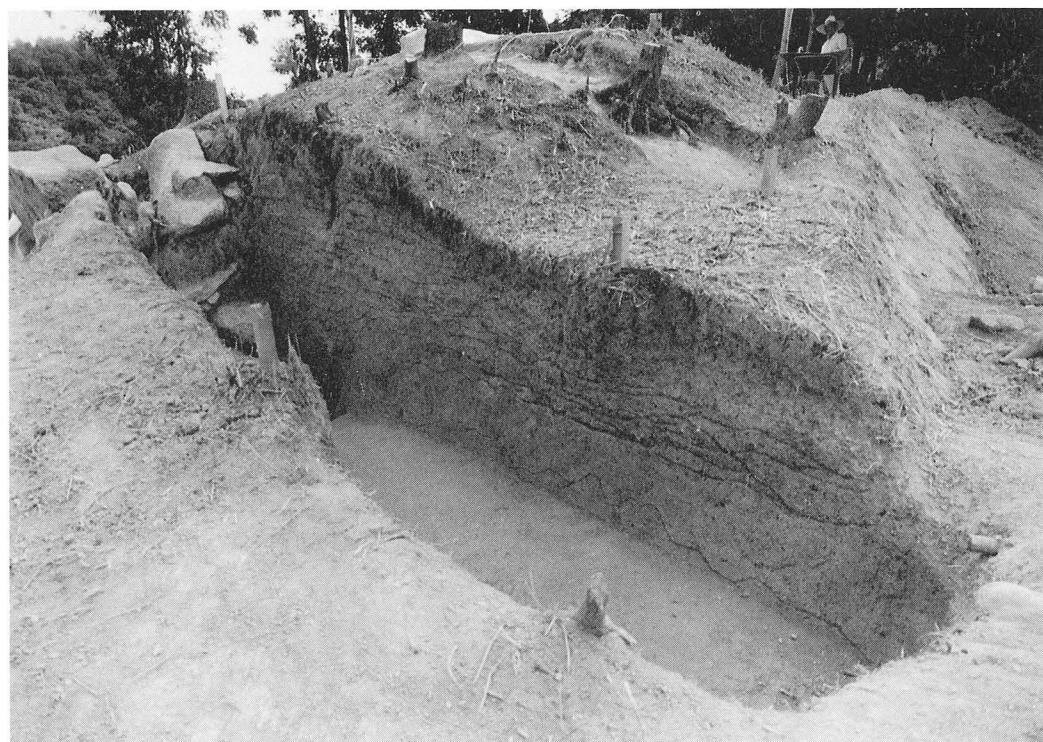
第54図 第1トレンチ東壁



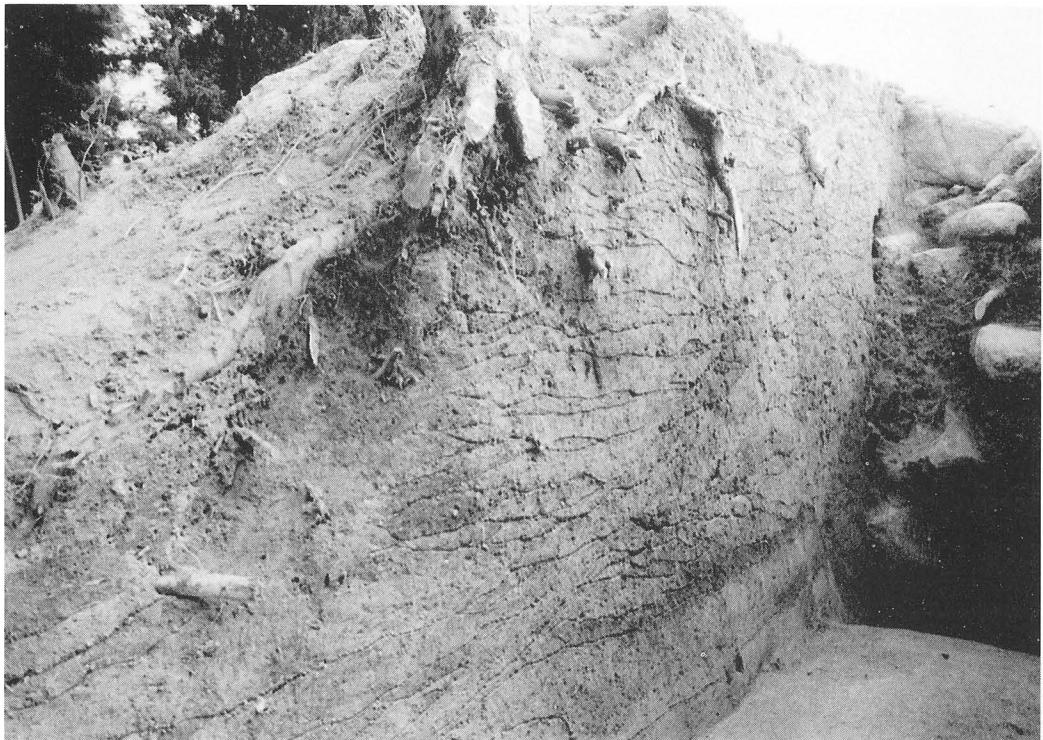
第55図 第2トレンチ西壁



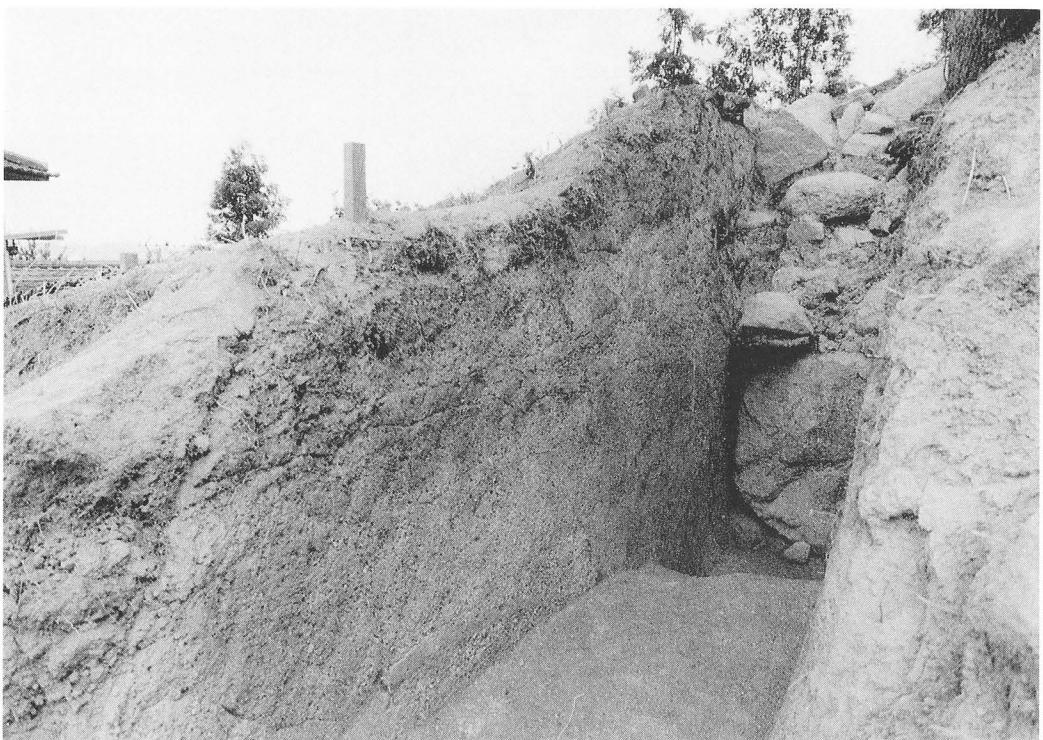
第56図 第3トレンチ西壁



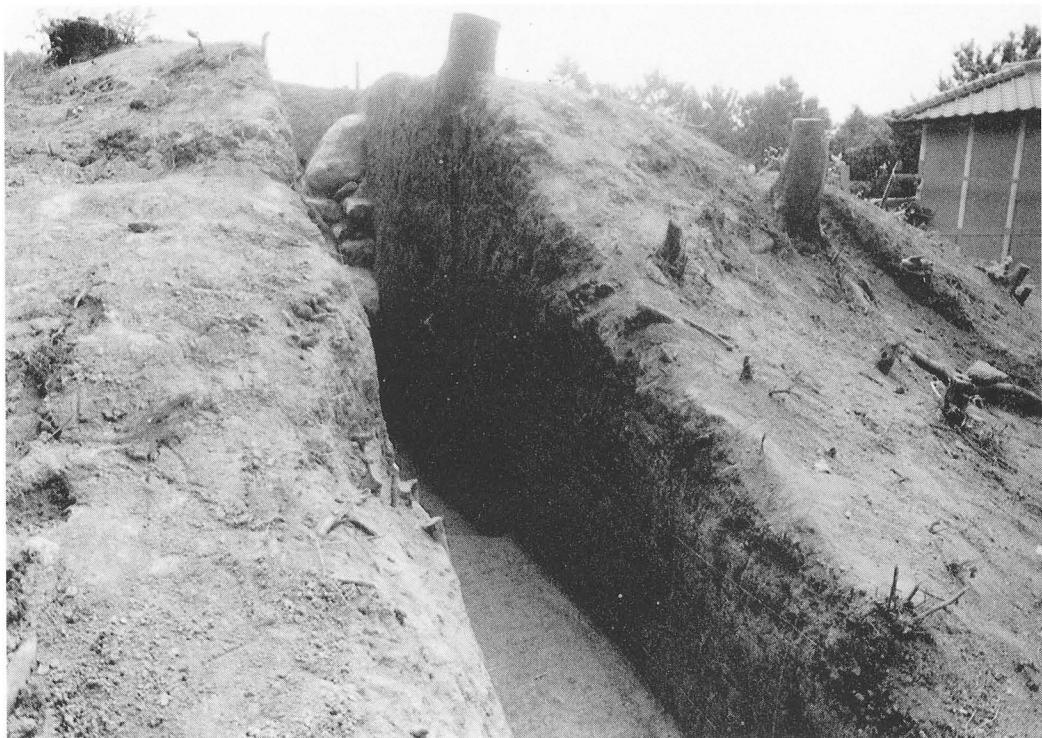
第57図 第2トレンチ東壁



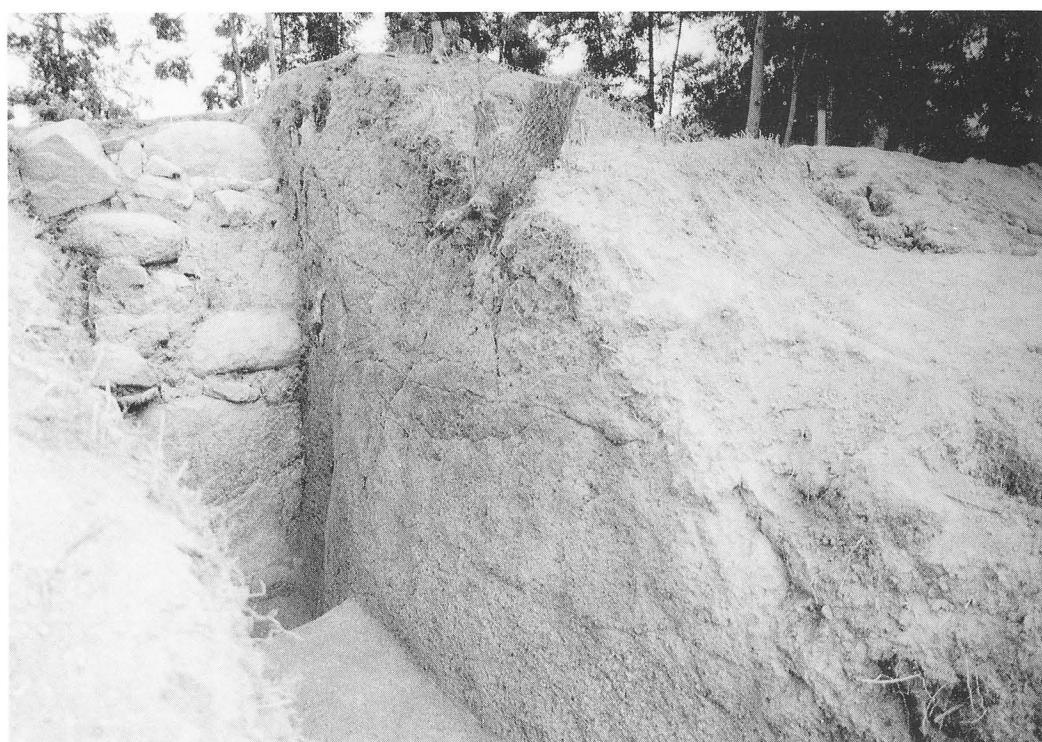
第58図 第3トレンチ東壁



第59図 第4トレンチ西壁



第60図 第5トレンチ西壁



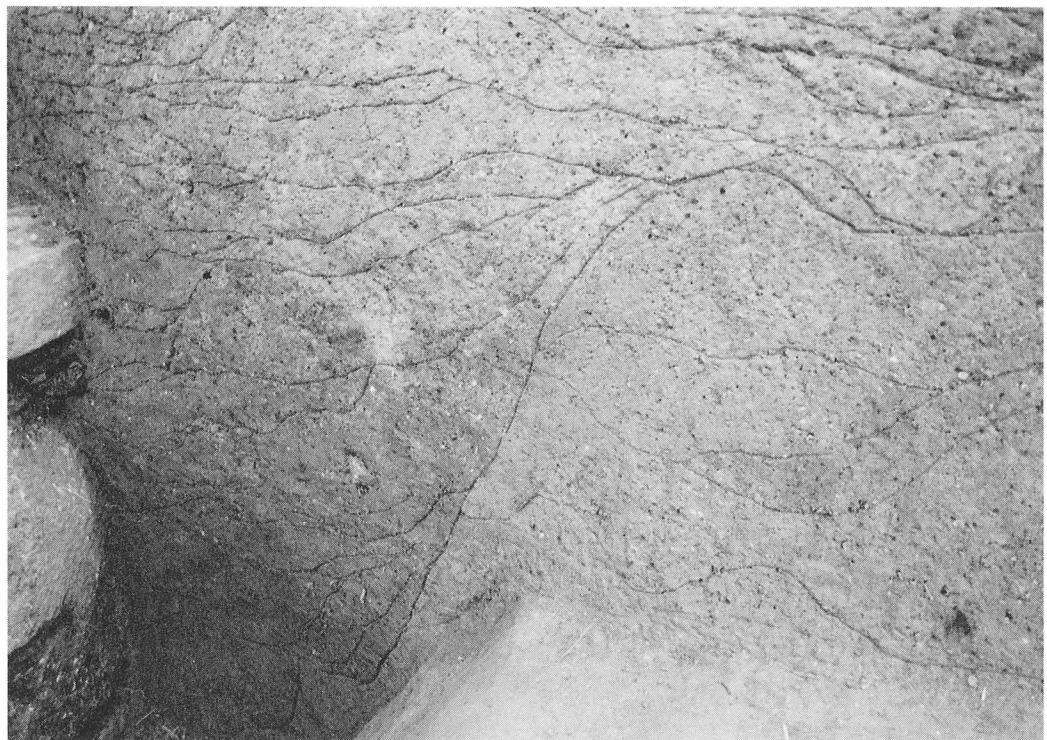
第61図 第4トレンチ東壁



第62図 第6トレンチ南壁



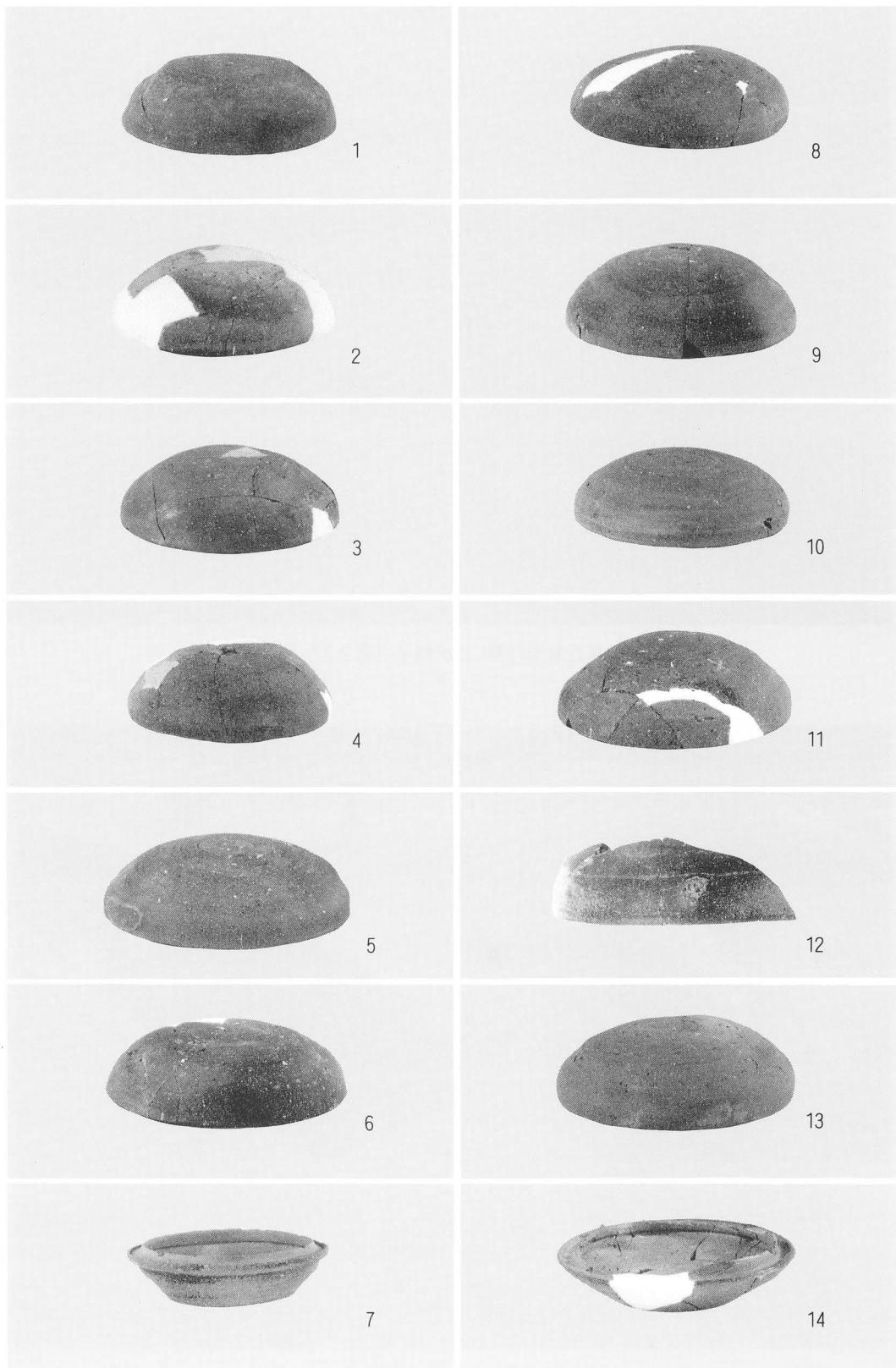
第63図 第1次墳丘と第2次墳丘（第3トレンチ東壁）



第64図 墳丘南部の掘り方の様子（第2トレンチ東壁）



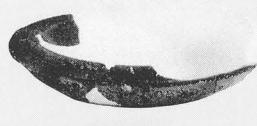
第65図 羨道部の墳丘内部の列石



第66図 出土遺物①(須恵器)



15



18



16



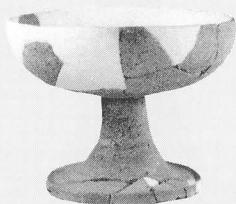
19



17



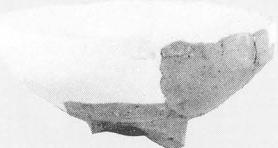
20



21



23



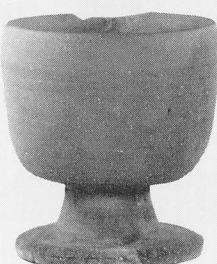
22



24

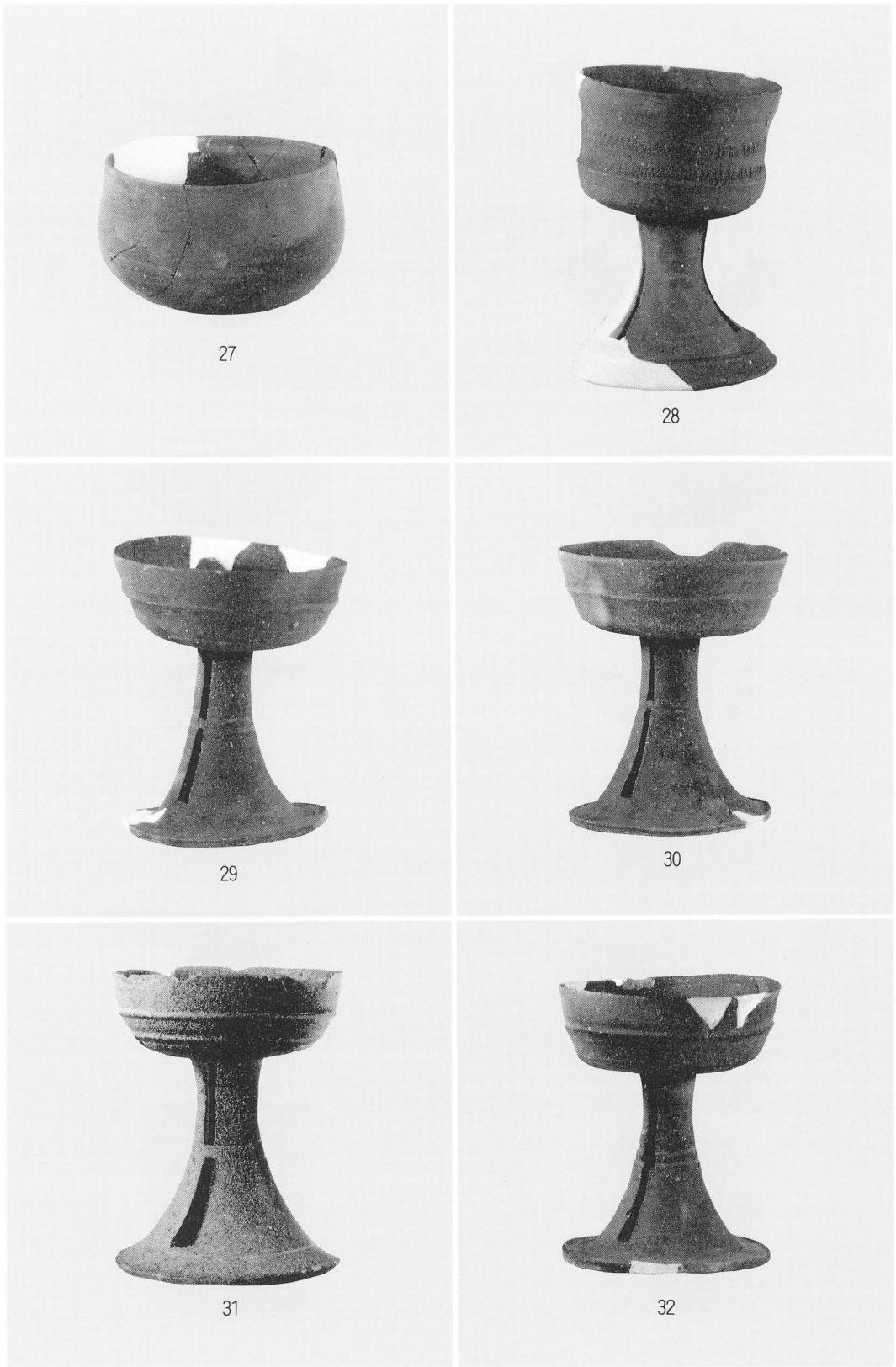


25

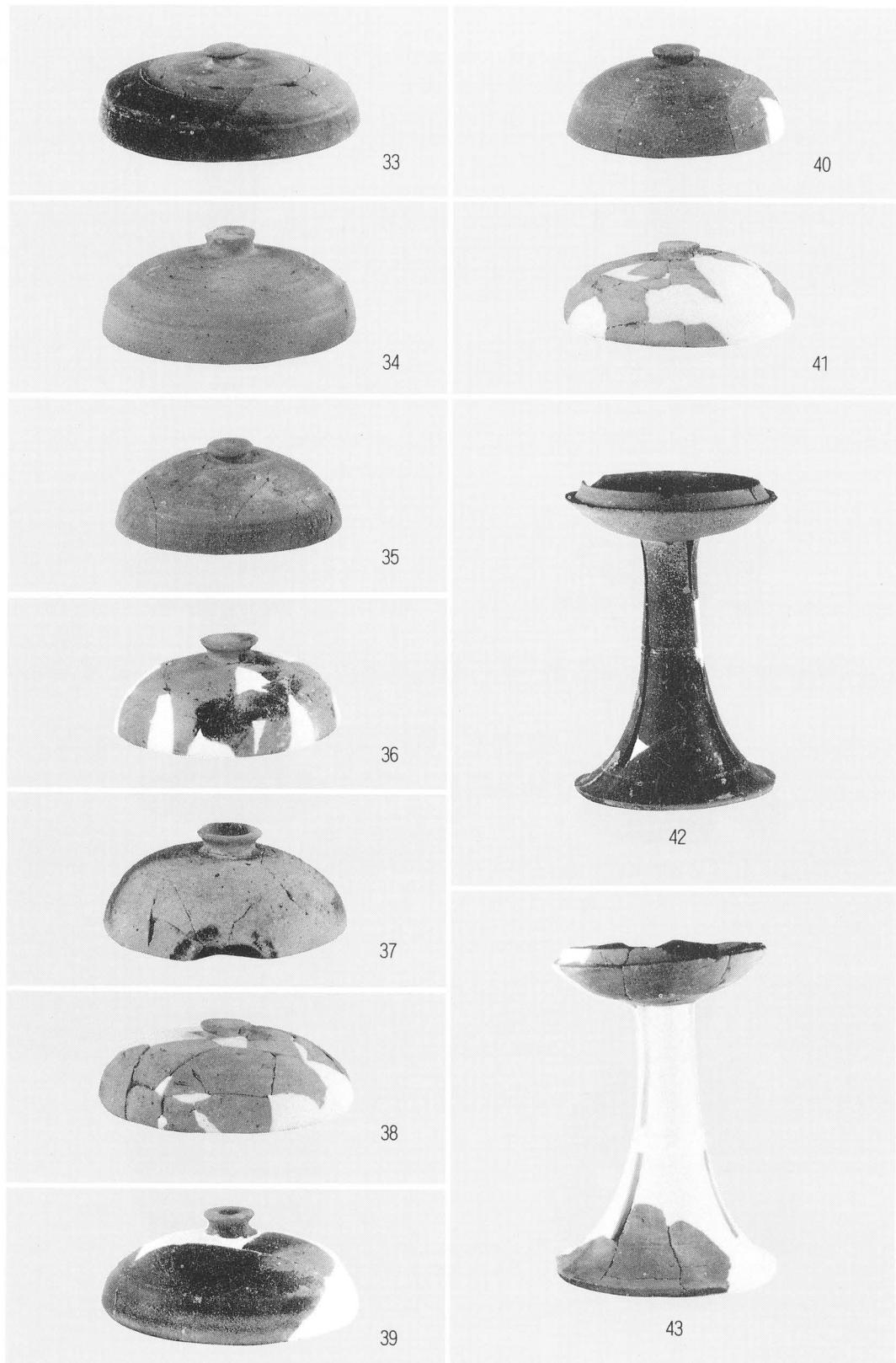


26

第67図 出土遺物②(須恵器)



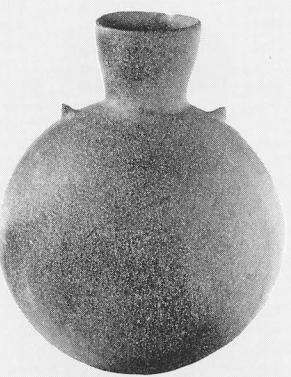
第68図 出土遺物③(須恵器)



第69図 出土遺物④(須恵器)



第70図 出土遺物⑤(須恵器)



50



52



51



53

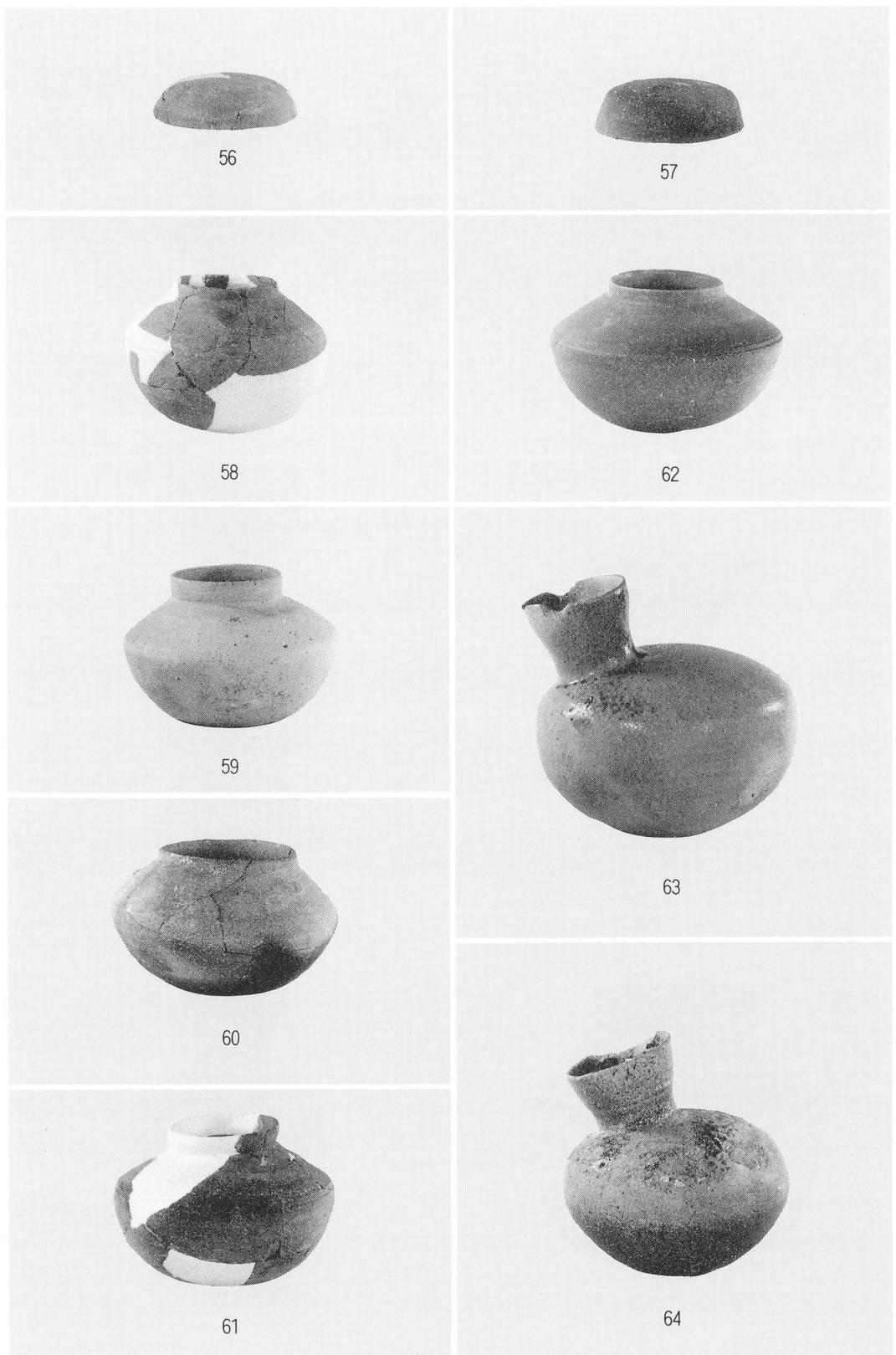


55

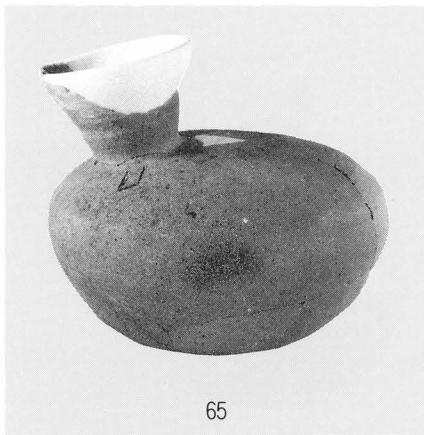


54

第71図 出土遺物⑥(須恵器)



第72図 出土遺物⑦(須恵器)



65



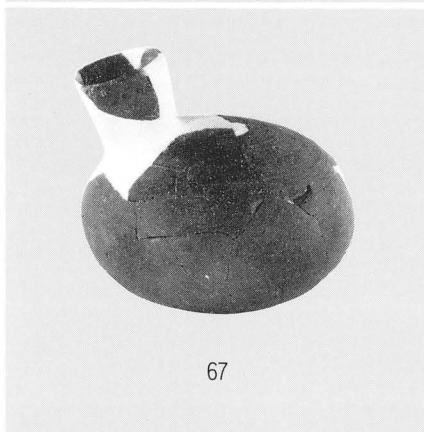
68・69~72



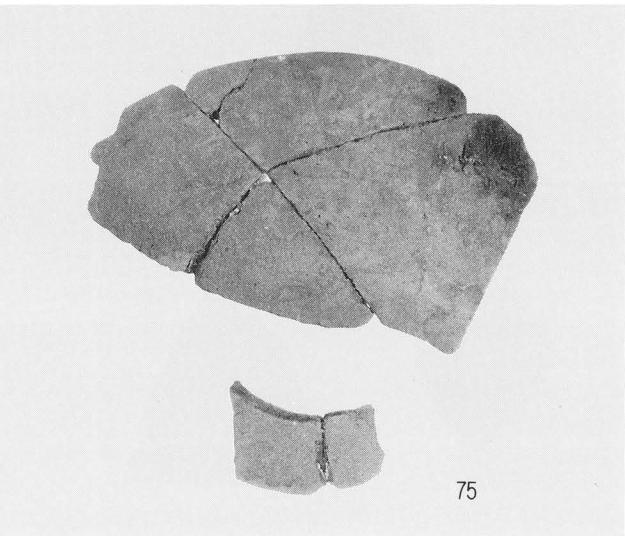
66



73

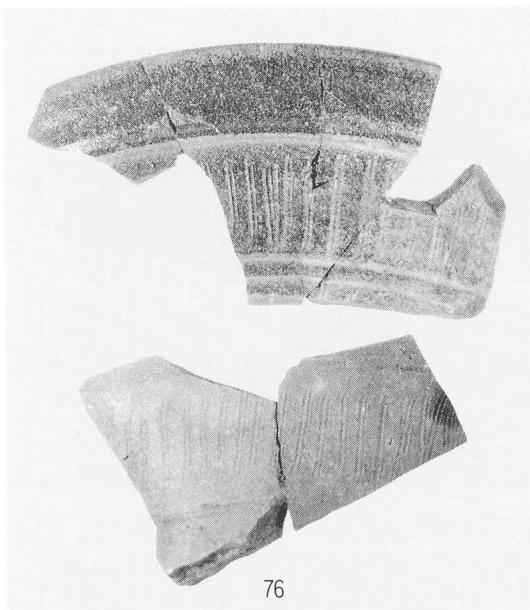


67

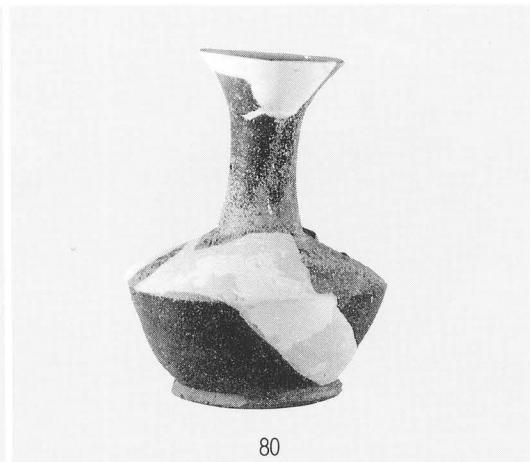


75

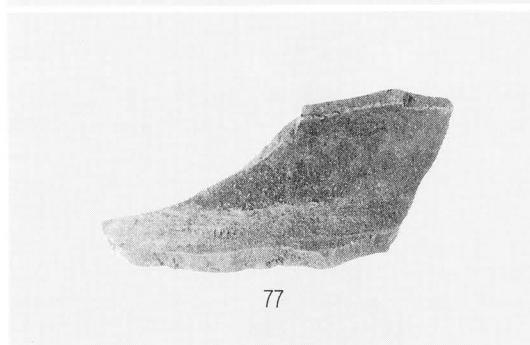
第73図 出土遺物⑧(須恵器・土師器・埴輪)



76



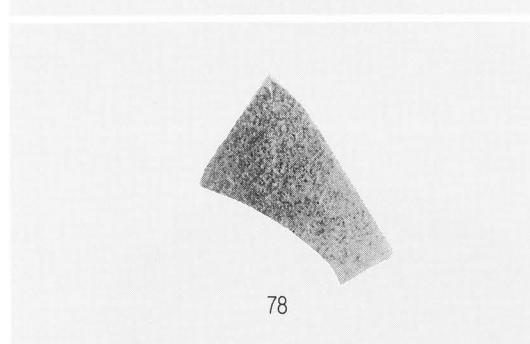
80



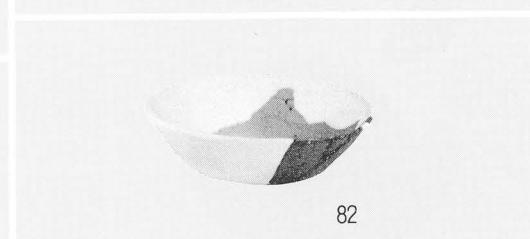
77



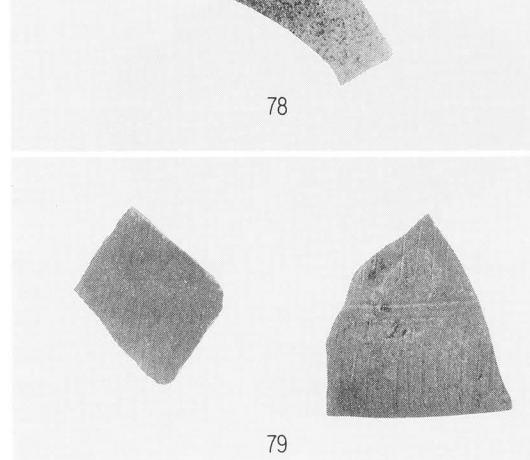
81



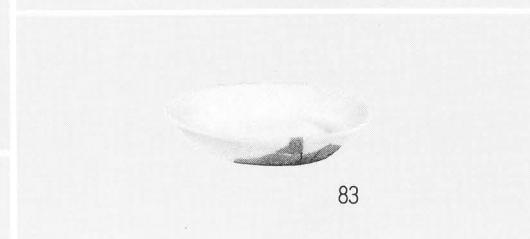
78



82



79

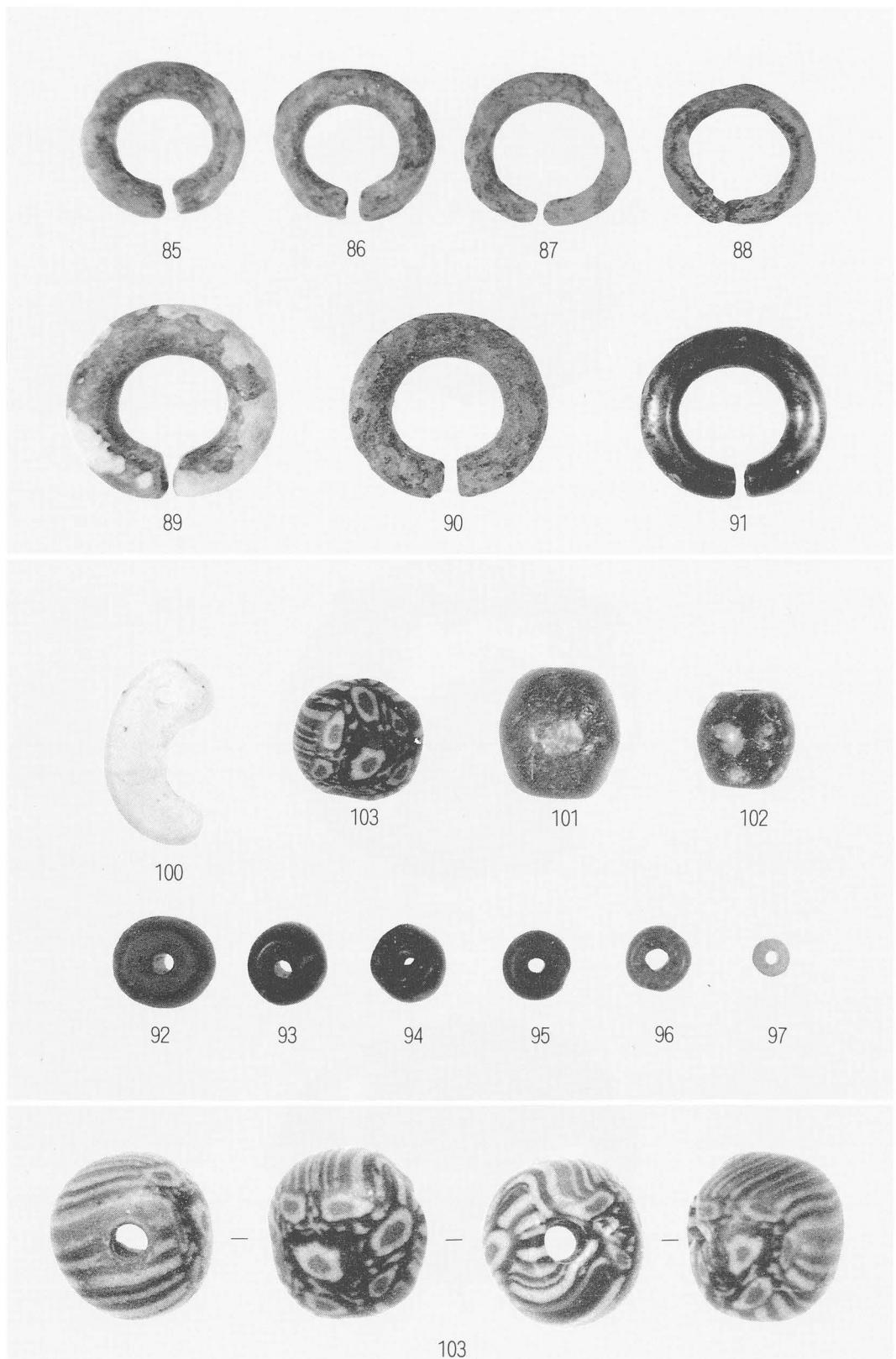


83



84

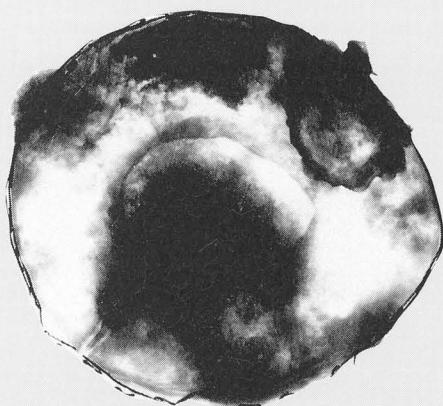
第74図 出土遺物⑨(須恵器・土師器)



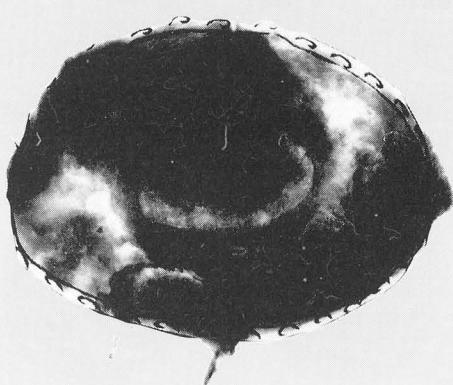
第75図 出土遺物⑩(装飾品)



104

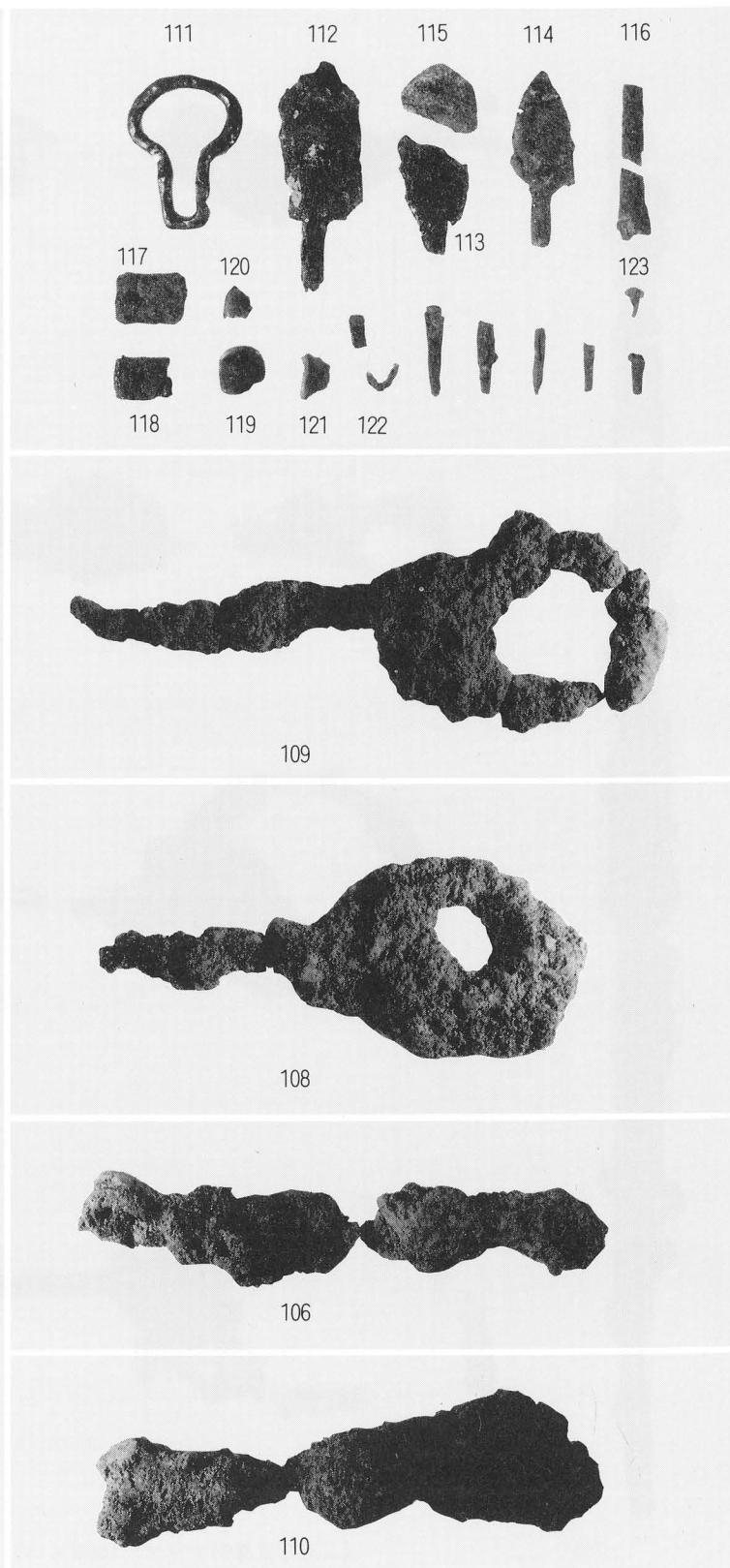


X線写真①

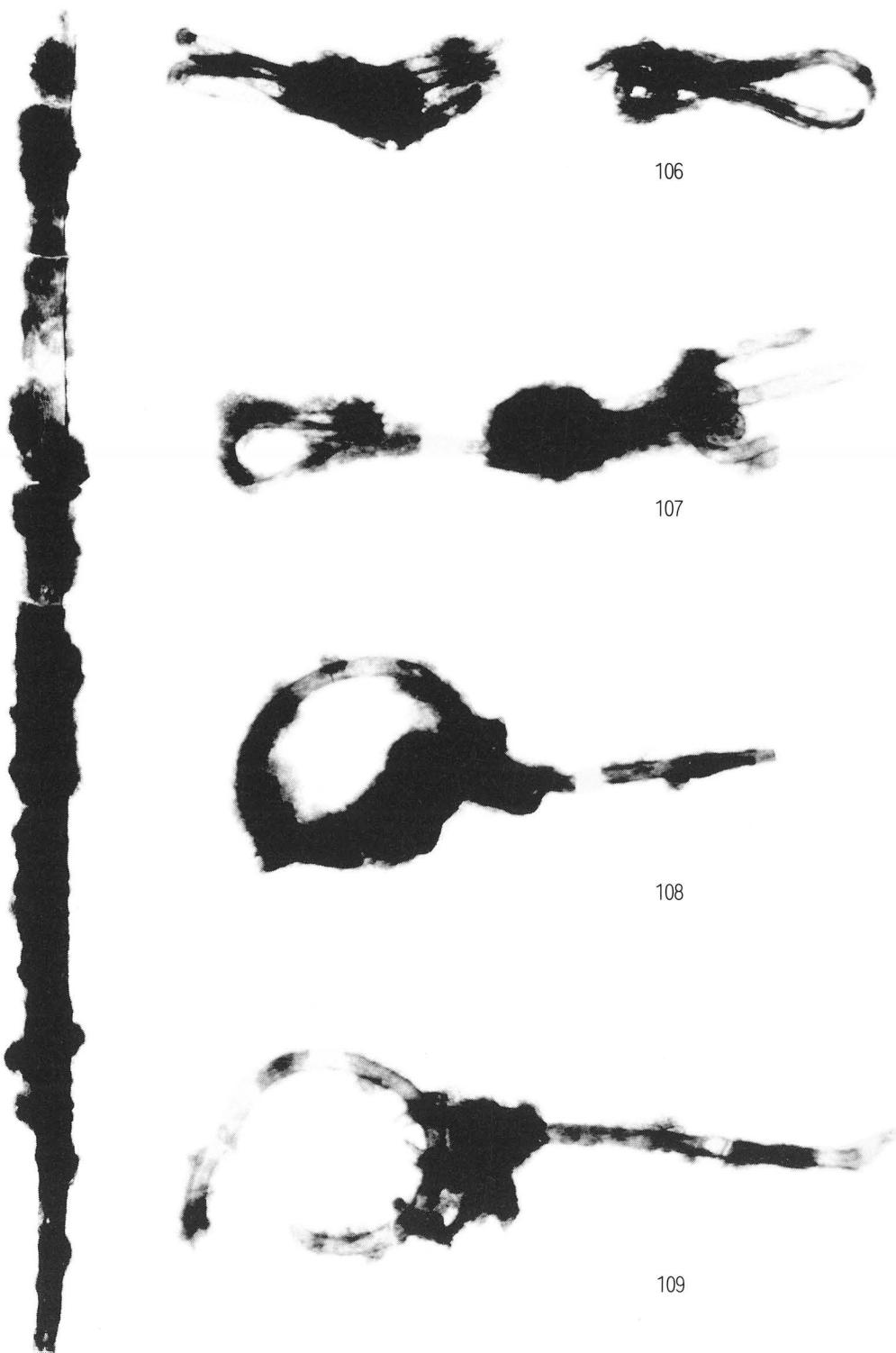


X線写真②

第76図 出土遺物①(銀象嵌入鎧)



第77図 出土遺物⑫(武具・馬具)



105

【X線写真撮影データ：160KV-35~45sec.】

第78図 出土遺物⑬ (武具・馬具X線写真)

安造田東3号墳発掘調査報告書

1991(平成3年)7月30日発行 (第2刷)

編 集 満濃町教育委員会
発 行 満濃町文化財保護協会
香川県仲多度郡満濃町大字吉野下281-1
郵便番号 766 電話 0877 (73) 3111(代)

印 刷 株式会社 紀要出版
香川県仲多度郡多度津町西浜11番32号
郵便番号 764 電話 0877 (33) 1711(代)